

2011 年度 修士論文

男子アルゼンチンバスケットボールの
強化・育成に関する研究

Research on Strengthening and Youth
Development of Argentina Men's Basketball

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
トップスポーツマネジメント

5011A331-7

東野（斎須）智弥

Tomoya Higashino (Saisu)

研究指導員 平田竹男 教授

目次

第1章 序論	6
第1節 アルゼンチンバスケットボール代表の活躍	6
第1項 世界大会における活躍	6
第2項 アンダーカテゴリー代表の活躍	8
第3項 アルゼンチンと日本の基本情報比較	9
第4項 アルゼンチンバスケットボールの歴史	10
第2節 先行研究	11
第3節 研究目的	12
第2章 研究手法	13
第1節 アルゼンチンバスケットボールの関係者へのインタビュー調査	13
第2節 クラブのジュニア選手、指導者に対してのアンケート調査	13
第3章 アルゼンチンバスケットボールはどのように強化されたのか	14
第1節 連盟広報担当	14
第1項 アルゼンチンバスケットボールの歴史	14
第2項 アルゼンチンバスケットボール復活の鍵	15
第3項 アルゼンチンバスケットボールの現状	16
第2節 ボカジュニアズ・アンダーカテゴリー選手	16
第1項 ボカジュニアズについて	16
第2項 若い世代の選手の意識	17
第3節 ユレヒアレスクラブ理事、ブエノスアイレス州・連盟理事	17
第1項 ユレヒアクラブについて	17
第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	17
第3項 アルゼンチンバスケットボールを強くしてきた人々	18
第4項 アルゼンチン代表について	18
第4節 ユレヒアレスクラブ育成コーチ	19
第1項 指導方針	19
第2項 指導者について	19
第3項 クラブ指導で重要視していること	19
第5節 連盟・審判部専務理事	20
第1項 アルゼンチンの審判について	20
第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	20
第6節 ボカジュニアズ・バスケットボール会長	21
第1項 アルゼンチンのクラブについて	21
第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	22
第3項 現在のアルゼンチンバスケットボールの課題	23
第7節 代表ヘッドコーチ	23
第1項 アルゼンチンバスケットボールが強い理由	23
第2項 現在のアルゼンチン代表について	25
第8節 スポーツ局総括・企画責任者	25
第1項 アルゼンチンのスポーツについて	25
第2項 アルゼンチンスポーツの歴史的背景	26
第9節 スポーツ局バスケットボール統括	26
第1項 アルゼンチンバスケットボールの歴史	26
第2項 アルゼンチンのクラブ組織について	27
第3項 LNB について	27
第10節 代表選手、NBA 選手	27
第1項 アルゼンチンで身に付けたこと	28
第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	28

第1 1 節	CABB バスケットボール・ディレクター	28
第1 項	CABB バスケットボール・ディレクターの役割	28
第2 項	アルゼンチン選手のパスがうまい理由	29
第1 2 節	ボカジュニアズ U15～19 コーチ	29
第1 項	アルゼンチンバスケットボールが強い理由	29
第2 項	クラブでの継続指導とコーチ兼任のプラス作用	30
第1 3 節	ESPN 記者	30
第1 項	アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	30
第2 項	アルゼンチン代表について	31
第1 4 節	代表アシスタントコーチ	31
第1 項	海外でのナショナルチームの代表経験	32
第2 項	アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	32
第3 項	アルゼンチン代表について	33
第4 項	リーグについて	34
第5 項	審判について	34
第6 項	アルゼンチンバスケットボールと他国の相違点	34
第1 5 節	ボカジュニアズ・ヘッドコーチ	35
第1 項	アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由	35
第2 項	バイアブランカについて	35
第3 項	アルゼンチンバスケットボールの今後の課題	36
第4 章	アルゼンチンバスケットボールから学ぶこと	37
第1 節	クラブの選手育成強化	37
第1 項	クラブでの年代別育成	37
第2 項	クラブの環境	38
第3 項	年代別のトレーニング	38
第4 項	「飛び級」の制度と試合数	39
第5 項	15 歳からの選手保有制度とセレクション	40
第6 項	特徴的なクラブでの育成方法	41
第7 項	19 歳以下 3 選手の登録	41
第2 節	クラブのコーチ養成	41
第1 項	「一貫指導」の責任感とクラブによる育成	41
第2 項	継続的な指導とコーチ兼任でのプラス作用	42
第3 項	トップチーム選手の戦う意識	42
第4 項	クラブ内でのヘッドコーチの役割と責任	42
第5 項	技術、戦略とフィジカルトレーニング、メンタルの役割分担	43
第3 節	リーグの選手育成強化	43
第1 項	選手育成を理念としたリーグの創設	43
第2 項	リーグの構成	44
第3 項	世界の壁	45
第4 項	リーグが目論んだ選手育成と強化	46
第4 節	リーグのコーチ養成	46
第1 項	もう一つのリーグ創設の意図	46
第2 項	世界との戦いに備えた海外進出	47
第3 項	LNB リーグのヘッドコーチになるための条件	47
第5 節	リーグの審判養成	47
第1 項	常に評価されるプロレフリー	47
第2 項	連盟とリーグの連携による定期的な講習会	48
第3 項	LNB の審判のジャッジ基準	48
第6 節	連盟の選手育成強化	48

第1項	連盟の選手育成	48
第2項	危機感から生み出された育成思案	48
第3項	ゴールデン世代の台頭	50
第4項	アルゼンチン代表のコンセプト	50
第5項	現在のアルゼンチン代表強化	51
第6項	フィジカルコンタクトの世界基準化	53
第7節	連盟のコーチ養成	53
第1項	高い水準の指導者ライセンス	53
第2項	アルゼンチン代表とアンダー代表のスタッフの配置	54
第8節	連盟の審判養成	54
第1項	講習会の実施	54
第2項	「強化の一貫」としての審判のジャッジ	55
第3項	ジャッジの世界基準化	55
第4項	審判と指導者の相互作用	55
第5章	クラブのジュニア選手、指導者に対するアンケート調査結果	57
第1節	クラブのジュニア選手に対してのアンケート調査	57
第1項	回答者の年齢	57
第2項	バスケットボールを始めた年齢	58
第3項	バスケットボールを始めた理由	58
第4項	バスケットボール以外の習い事	59
第5項	将来の夢	60
第6項	1週間の練習量	60
第7項	1回の練習時間	61
第8項	1ヶ月の試合回数	62
第9項	練習の取り組み方についての意識	63
第2節	アルゼンチンの指導者に対するアンケート調査結果	64
第1項	回答者	64
第2項	「mini」に対する指導方針	65
第3項	U-13 に対する指導方針	65
第4項	U-15 に対する指導方針	66
第5項	U-17 に対する指導方針	66
第6項	U-19 に対する指導方針	67
第7項	トップに対する指導方針	67
第8項	年代別指導方針	68
第6章	アルゼンチンバスケットボールの成功要因	69
第1節	アルゼンチンバスケットボールの成功構造	69
第2節	成功要因	71
第1項	「クラブ」「リーグ」「連盟」のベクトルが世界へ	71
第2項	「自前」の強化・育成システム	73
第3項	育成発掘プログラム	74
第7章	結論	78
参考文献		80
謝辞		81
付録2	クラブのジュニア選手へのアンケート用紙（日本語版）	84
付録3	コーチへのアンケート調査用紙	87
付録4	コーチへの意識調査アンケートまとめ	88

図表目次

図 1	レオン氏が考えた浮き沈みのシステム	44
図 2	審判と指導者クリニックの相互作用	56
図 3	年齢構成	58
図 4	バスケットボールを始めた年齢	58
図 5	バスケットボールを始めた理由	59
図 6	バスケットボール以外の習い事	59
図 7	ジュニア選手の将来の夢	60
図 8	1 週間の練習回数	61
図 9	1 回の練習時間	62
図 10	1 ヶ月の試合回数	63
図 11	練習は自主的か	64
図 12	ミニのカテゴリーに対しての重要性	65
図 13	U13 のカテゴリーに対しての重要性	66
図 14	U15 のカテゴリーに対しての重要性	66
図 15	U17 のカテゴリーに対しての重要性	67
図 16	U19 のカテゴリーに対しての重要性	67
図 17	U21, 23, Top のカテゴリーに対しての重要性	68
図 18	コーチの意識平均図	68
図 19	「クラブ」「リーグ」「連盟」の強化・育成のベクトル	71
図 20	国民の平均身長と「身長」発掘プログラムのサイズ基準値の比較	75
図 21	アルゼンチンの選手発掘システム	76
表 1	世界選手権の成績一覧	6
表 2	オリンピックの成績一覧	7
表 3	FIBA ランキング (2011 年 10 月)	8
表 4	21 歳以下のヤングメン世界選手権大会結果	9
表 5	19 歳以下の世界選手権大会結果	9
表 6	アルゼンチンと日本の基本情報比較 (2010 年 10 月)	10
表 7	アルゼンチンバスケットボールの歴史	11
表 8	インタビュー対象者リスト	14
表 9	アルゼンチンバスケットボールのクラブ形態	37
表 10	アルゼンチン育成年代の平均身長	39
表 11	アルゼンチンバスケットボールのクラブ形態 2	40
表 12	LNB のリーグ構成	45
表 13	South American League for Men's Clubs	45
表 14	FIBA America League 国別戦績 (2010 年)	46
表 15	アテネオリンピック・アルゼンチン代表メンバー	49
表 16	「身長」発掘プログラムの基準サイズ表	50
表 17	2011 年度のアルゼンチン男子代表	51
表 18	アルゼンチン代表の強化サイクル	52
表 19	大会ごとの平均年齢と平均身長	53
表 20	ENEBA コーチライセンス	54
表 21	ENEBA 審判ライセンス	55
表 22	アンケート回答者	65
表 23	成功構造①	69
表 24	成功構造②	70
表 25	ユニバーシアードの戦績	74

第1章 序論

第1節 アルゼンチンバスケットボール代表の活躍

第1項 世界大会における活躍

近年、バスケットボールアルゼンチン男子代表の世界大会における活躍は著しい。

表 1 は、世界選手権における成績を示している。1950 年から 1980 年の期間においては不出場の大会もあるが、1990 年代から 2010 年まで途切れなく出場を積み重ね、2002 年の準優勝など好成績を挙げている。

表 1 世界選手権の成績一覧

1950	1954	1958	1962	1967	1970	1974	1978
アルゼンチン	ブラジル	チリ	ブラジル	ウルグアイ	ユーゴスラビア	プエルトリコ	フィリピン
1 アルゼンチン	アメリカ合衆国	ブラジル	ブラジル	ソビエト連邦	ユーゴスラビア	ソビエト連邦	ユーゴスラビア
2 アメリカ合衆国	ブラジル	アメリカ合衆国	ユーゴスラビア	ユーゴスラビア	ブラジル	ユーゴスラビア	ソビエト連邦
3 チリ	フィリピン	チリ	ソビエト連邦	ブラジル	ソビエト連邦	アメリカ合衆国	ブラジル
4 ブラジル	フランス	台湾	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	イタリア	キューバ	イタリア
5 エジプト	台湾	プエルトリコ	フランス	ポーランド	アメリカ合衆国	スペイン	アメリカ合衆国
6 フランス	ウルグアイ	ソビエト連邦	プエルトリコ	アルゼンチン	チェコスロバキア	ブラジル	カナダ
7 ベルギー	カナダ	ブルガリア	イタリア	ウルグアイ	ウルグアイ	プエルトリコ	オーストラリア
8 エクアドル	イスラエル	フィリピン	アルゼンチン	メキシコ	キューバ	カナダ	フィリピン
9 スペイン	パラグアイ	ウルグアイ	メキシコ	イタリア	パナマ	メキシコ	チェコスロバキア
10 ユーゴスラビア	チリ	アラブ共和国	ウルグアイ	ペルー	カナダ	チェコスロバキア	プエルトリコ
11	ユーゴスラビア	カナダ	カナダ	日本	大韓民国	アルゼンチン	中国
12	ペルー	メキシコ	ペルー	プエルトリコ	オーストラリア	オーストラリア	ドミニカ共和国
13			日本	パラグアイ	アラブ共和国	フィリピン	大韓民国
14						中央アフリカ	セネガル

1982	1986	1990	1994	1998	2002	2006	2010
コロンビア	スペイン	アルゼンチン	カナダ	ギリシャ	アメリカ	日本	トルコ
1 ソビエト連邦	アメリカ合衆国	ユーゴスラビア	アメリカ合衆国	ユーゴスラビア	ユーゴスラビア	スペイン	アメリカ
2 アメリカ合衆国	ソビエト連邦	ソビエト連邦	ロシア	ロシア	アルゼンチン	ギリシャ	トルコ
3 ユーゴスラビア	ユーゴスラビア	アメリカ合衆国	クロアチア	アメリカ合衆国	ドイツ	アメリカ合衆国	リトアニア
4 スペイン	ブラジル	プエルトリコ	ギリシャ	ギリシャ	ニュージーランド	アルゼンチン	セルビア
5 オーストラリア	スペイン	ブラジル	オーストラリア	スペイン	スペイン	フランス	アルゼンチン
6 カナダ	イタリア	ギリシャ	プエルトリコ	イタリア	アメリカ合衆国	トルコ	スペイン
7 コロンビア	イスラエル	オーストラリア	カナダ	リトアニア	プエルトリコ	リトアニア	ロシア
8 ブラジル	カナダ	アルゼンチン	中国	アルゼンチン	ブラジル	ドイツ	スロベニア
9 パナマ	中国	イタリア	アルゼンチン	オーストラリア	トルコ	イタリア	ブラジル
10 チェコスロバキア	ギリシャ	スペイン	スペイン	ブラジル	ロシア	アンゴラ	オーストラリア
11 ウルグアイ	キューバ	ベネズエラ	ブラジル	プエルトリコ	アンゴラ	セルビア・モンテネグロ	ギリシャ
12 中国	アルゼンチン	カナダ	ドイツ	カナダ	中国	スロベニア	ニュージーランド
13	フランス	アンゴラ	大韓民国	ナイジェリア	カナダ	オーストラリア	フランス
14	オランダ	中国	エジプト	日本	ベネズエラ	ナイジェリア	クロアチア
15	プエルトリコ	大韓民国	キューバ	セネガル	アルジェリア	中国	アンゴラ
16	西ドイツ	エジプト	アンゴラ	韓国	レバノン	ニュージーランド	中国
17	オーストラリア					プエルトリコ	ドイツ
18	ウルグアイ					レバノン	プエルトリコ
19	パナマ					ブラジル	イラン
20	アンゴラ					日本	レバノン
21	ニュージーランド					ベネズエラ	コートジボワール
22	大韓民国					セネガル	カナダ
23	コートジボワール					パナマ	ヨルダン
24	マレーシア					カタール	チュニジア

表 2 は、ヘルシンキ・オリンピック以降のオリンピックにおける成績を示しているが、アルゼンチンは 44 年ぶりに 1996 年アトランタオリンピックに出場すると、その後、2004 年、アテネオリンピックでは金メダル、2008 年には銅メダルを獲得した。

表 2 オリンピックの成績一覧

	1952	1956	1960	1964	1968	1972	1976	1980
	ヘルシンキ五輪	メルボルン五輪	ローマ五輪	東京五輪	メキシコシティ五輪	ミュンヘン五輪	モントリオール五輪	モスクワ五輪
1	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	ソビエト連邦	アメリカ合衆国	ソビエト連邦	アメリカ合衆国	ユーゴスラビア
2	ソビエト連邦	ソビエト連邦	ソビエト連邦	ブラジル	ユーゴスラビア	アメリカ合衆国	ユーゴスラビア	イタリア
3	ウルグアイ	ウルグアイ	ブラジル	プエルトリコ	ソビエト連邦	キューバ	ソビエト連邦	ソビエト連邦
4	アルゼンチン	フランス	イタリア	イタリア	ブラジル	イタリア	カナダ	スペイン
5	チリ	ブルガリア	チェコスロバキア	ポーランド	メキシコ	ユーゴスラビア	イタリア	ブラジル
6	ブラジル	ブラジル	ユーゴスラビア	ユーゴスラビア	ポーランド	プエルトリコ	チェコスロバキア	キューバ
7	ブルガリア	フィリピン	ポーランド	ウルグアイ	スペイン	ブラジル	キューバ	ポーランド
8	フランス	チリ	ウルグアイ	オーストラリア	イタリア	チェコスロバキア	オーストラリア	オーストラリア
9	カナダ	カナダ	ハンガリー	日本	プエルトリコ	オーストラリア	プエルトリコ	チェコスロバキア
10	キューバ	日本	フランス	フィンランド	ブルガリア	ポーランド	メキシコ	スウェーデン
11	チェコスロバキア	中華民国	フィリピン	メキシコ	キューバ	スペイン	日本	セネガル
12	エジプト	オーストラリア	メキシコ	ハンガリー	パナマ	西ドイツ	エジプト	インド
13	フィンランド	シンガポール	プエルトリコ	カナダ	フィリピン	フィリピン		
14	ハンガリー	韓国	スペイン	ペルー	韓国	日本		
15	メキシコ	タイ	日本	韓国	セネガル	セネガル		
16	フィリピン		ブルガリア		モロッコ	エジプト		
17	ベルギー							
18	ギリシャ							
19	イスラエル							
20	イタリア							
21	ルーマニア							
22	スイス							
23	トルコ							
	1984	1988	1992	1996	2000	2004	2008	2012
	ロサンゼルス五輪	ソウル五輪	バルセロナ	アトランタ五輪	シドニー五輪	アテネ五輪	北京五輪	ロンドン五輪
1	アメリカ合衆国	ソビエト連邦	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	アルゼンチン	アメリカ合衆国	
2	スペイン	ユーゴスラビア	クロアチア	ユーゴスラビア	フランス	イタリア	スペイン	
3	ユーゴスラビア	アメリカ合衆国	リトアニア	リトアニア	リトアニア	アメリカ合衆国	アルゼンチン	
4	カナダ	オーストラリア	EUN	オーストラリア	オーストラリア	リトアニア	リトアニア	
5	イタリア	ブラジル	ブラジル	ギリシャ	イタリア	ギリシャ	ギリシャ	
6	ウルグアイ	カナダ	オーストラリア	ブラジル	ユーゴスラビア	プエルトリコ	クロアチア	
7	オーストラリア	プエルトリコ	ドイツ	クロアチア	カナダ	スペイン	オーストラリア	
8	西ドイツ	スペイン	プエルトリコ	中国	ロシア	中国	中国	
9	ブラジル	韓国	スペイン	アルゼンチン	スペイン	オーストラリア	ロシア	
10	中国	中央アフリカ	アンゴラ	プエルトリコ	中国	ニュージーランド	ドイツ	
11	フランス	中国	ベネズエラ	アンゴラ	ニュージーランド	セルビア・モンテネグロ	イラン	
12	エジプト	エジプト	中国	韓国	アンゴラ	アンゴラ	アンゴラ	

ここまで、2 代世界大会の成績を見てきたが、現在までにオリンピック、世界選手権の両大会を制覇した国は、4 カ国しか存在しない。アメリカ、ロシア、ユーゴスラビア、そして、アルゼンチンである。44 年間オリンピックに出場していなかった国がこの快挙を果たしたのである。

また、表 3 は FIBA ランキングを示しているが、アンダーカテゴリー代表の世界大会の戦績も加味されている FIBA ランキングにおいては、2002 年インディアナポリス世界選手権での準優勝、2004 年アテネオリンピックでの優勝した時期には 1 位になり、2011 年 11 月においても 3 位に入りランキング上位を維持している。

表 3 FIBA ランキング (2011 年 10 月)

Boys Ranking after 2010 FIBA U17 World Championship				Ranking Men after all 2011 FIBA Zones Championships				
Rank	Country	IOC	Current Points	Rank	Country	IOC	Current Points	+/- Rank
1	USA	USA	306	1	USA	USA	852	
2	Lithuania	LTU	204.8	2	Spain	ESP	730	
3	Serbia	SRB	176.8	3	Argentina	ARG	673	
4	Argentina	ARG	162	4	Greece	GRE	488	
5	Greece	GRE	150.6	5	Lithuania	LTU	426	
6	Canada	CAN	135	6	Turkey	TUR	302	
7	France	FRA	132.4	7	Italy	ITA	272	
8	Australia	AUS	117	8	Serbia	SRB	232	
9	Croatia	CRO	110.8	9	Australia	AUS	224	
10	Spain	ESP	110.6	10	China	CHN	219.7	
11	Turkey	TUR	88	11	Russia	RUS	213	
12	Brazil	BRA	82.2	12	France	FRA	195	2
13	Puerto Rico	PUR	73	13	Brazil	BRA	184	3
14	Russia	RUS	66.2	14	Germany	GER	182	-2
15	Latvia	LAT	61.8	15	Angola	ANG	178	-2
16	China	CHN	58.2	16	Puerto Rico	PUR	157.6	-1
17	Poland	POL	53.4	17	Slovenia	SLO	157	
18	Korea	KOR	49.9	18	New Zealand	NZL	147	
19	Italy	ITA	37	19	Croatia	CRO	134	
20	Egypt	EGY	36	20	Iran	IRI	83.1	
20	Nigeria	NGR	36	21	Nigeria	NGR	67.6	
22	Germany	GER	35.6	22	Venezuela	VEN	49	
23	Islamic Republic of Iran	IRI	34.6	23	Lebanon	LIB	47.4	1
24	Venezuela	VEN	33.2	24	Canada	CAN	46.6	-1
25	Uruguay	URU	32	25	Dominican Republic	DOM	45.6	5
26	Slovenia	SLO	29	26	Panama	PAN	41.8	2
27	Bahamas	BAH	28	27	Uruguay	URU	39.2	-2
28	Angola	ANG	27.6	28	Jordan	JOR	33.8	-4
29	Mexico	MEX	27.2	29	Israel	ISR	30	-2
30	Kazakhstan	KAZ	26.2	30	Mexico	MEX	26.4	-4
31	New Zealand	NZL	26	31	Korea	KOR	26.1	
32	Israel	ISR	25	32	Tunisia	TUN	25.8	5
33	Mali	MLI	22.8	33	F.Y.R. of Macedonia	MKD	25	14
34	Bulgaria	BUL	21.8	34	Japan	JPN	23.8	-1
35	Syria	SYR	18.6	35	Qatar	QAT	22.4	-6
36	Ukraine	UKR	18	36	Senegal	SEN	20.2	-1
37	Lebanon	LIB	17.3	37	Cote d'Ivoire	CIV	20	-1
38	Japan	JPN	12.3	38	Latvia	LAT	19	-4
39	Chinese Taipei	TPE	11.7	39	Poland	POL	18	-1
40	Czech Republic	CZE	11.6	39	Bulgaria	BUL	18	3
41	Virgin Islands	ISV	9.6	41	Chinese Taipei	TPE	14.4	
42	Malaysia	MAS	9.1	42	Cameroon	CMR	13.4	1
43	Philippines	PHI	8.1	43	Great Britain	GBR	12	13
44	Mozambique	MOZ	6.8	44	Portugal	POR	11	3
45	India	IND	6.3	45	Philippines	PHI	10.8	8
46	Jordan	JOR	6	46	Central African Republic	CAF	10.4	
46	Estonia	EST	6	47	Kazakhstan	KAZ	10.2	-7
48	Algeria	ALG	5.4	48	Finland	FIN	10	
49	Kuwait	KUW	5.1	49	Mali	MLI	8.2	6
50	Cote d'Ivoire	CIV	5	50	Morocco	MAR	8	1
				50	Cuba	CUB	8	
				50	Georgia	GEO	8	
				50	Bosnia and Herzegovina	BIH	8	-3
				50	Ukraine	UKR	8	-7

第 2 項 アンダーカテゴリー代表の活躍

近年、アンダーカテゴリー代表の活躍も著しい。表 4 は、21 歳以下のヤングメン世界選手権大会の成績を示している。2005 年には、アルゼンチンにて 21 歳以下の世界大会を開催するなどアンダーカテゴリーの強化を積極的に行うという姿勢も見て取れる。また、1997 年、2001 年にはベスト 4 に入っている。この両大会の U-21 アルゼンチンバスケットボール代表選手たちは、その後、「ゴールデン世代」と呼ばれ世界の注目を浴びている。

表 4 21 歳以下のヤングメン世界選手権大会結果

FIBA Men's U-21 World Championship					
開催年	開催国	優勝	準優勝	3 位	4 位
1993年	スペイン	アメリカ合衆国	フランス	ブラジル	イタリア
1997年	オーストラリア	オーストラリア	プエルトリコ	ユーゴスラビア	アルゼンチン
2001年	日本	アメリカ合衆国	クロアチア	アルゼンチン	ドミニカ共和国
2005年	アルゼンチン	リトアニア	ギリシャ	カナダ	オーストラリア

※1993第一回 U21 ヤングメン大会 2007にU-19統合

表 5 は、19 歳以下の世界選手権大会の結果を示している。1991 年には 3 位、2007 年には 6 位、2009 年には 5 位、そして、2011 年には 4 位という成績を世界大会で残している。

表 5 19 歳以下の世界選手権大会結果

FIBA Men's U-19 World Championship					
開催年	開催国	優勝	準優勝	3 位	4 位
1983年	スペイン	アメリカ合衆国	ソビエト連邦	ブラジル	スペイン
1987年	イタリア	ユーゴスラビア	アメリカ合衆国	イタリア	西ドイツ
1991年	カナダ	アメリカ合衆国	イタリア	アルゼンチン	ユーゴスラビア
1995年	ギリシャ	ギリシャ	オーストラリア	スペイン	クロアチア
1999年	ポルトガル	スペイン	アメリカ合衆国	クロアチア	アルゼンチン
2003年	ギリシャ	オーストラリア	リトアニア	ギリシャ	クロアチア
2007年	セルビア	セルビア	アメリカ合衆国	フランス	ブラジル
2009年	ニュージーランド	アメリカ合衆国	ギリシャ	クロアチア	オーストラリア
2011年	ラトビア	リトアニア	セルビア	ロシア	アルゼンチン

第 3 項 アルゼンチンと日本の基本情報比較

表 6 は、アルゼンチンと日本の基本情報を示しているが、まず、両国の平均身長が同程度であることが分かる。また、アルゼンチンの人口は約 4070 万人でありその数は日本の約 1/3 であり、国土面積は、2,766,890km²であり、その広さは日本の約 7.3 倍ある。

そして、アルゼンチンの競技者数は、約 13 万人であるのに対し、日本は約 33 万人登録されている。また、アルゼンチンのクラブ数は 1200、日本は 17524 となっている。

表 6 アルゼンチンと日本の基本情報比較 (2010 年 10 月)

	 アルゼンチン	 日本
人口	40,700,000人	127,400,000人
国土面積	2,766,890km ² (8位)	377,930km ² (62位)
登録人数 男子 (女子)	130,500人 (11,000人)	336,324人 (279,965人)
クラブ・チーム数 (女子)	1,200クラブ (-)	17,524チーム (16,665)
平均身長 18歳	172.6cm	171.0cm

第4項 アルゼンチンバスケットボールの歴史

表 7はアルゼンチンバスケットボールの歴史を整理したものである。

1910年アメリカ海軍が基地としていた、バイアブランカにて初めてアルゼンチンにバスケットボールが伝わったとされている。その後、バイアブランカがバスケットボールの聖地と呼ばれるようになった理由として、バスケットボールがアルゼンチンで最初に行われた場所以外にも、優秀な選手が多数この地域から生まれたことが理由とされている。

1912年にキリスト教青年団で公式戦が行われたが、その後、1927年にアルゼンチンバスケットボール連盟が設立され、その翌年アルゼンチンの全国大会(24州の選抜大会)が始まったとされている。全国大会は現在も続いており、2011年には第75大会を迎えた。

サッカーのクラブを追う形でバスケットボールのクラブを設立させた。当初はサッカーと一緒にクラブ経営されることが多かったが、1930年以降、独自にバスケットボールだけのクラブも創設された。また、ソシオ制度を用いてクラブ独自の運営を始めたとされる。

その後、1932年6月には国際バスケットボール連盟(FIBA)の創設に関わった。アルゼンチン、チェコスロバキア、ギリシャ、イタリア、ラトビア、ポルトガル、ルーマニア、スイスの8ヶ国でFIBAを支えてきた原加盟国でもある。

1948年ロンドンオリンピック大会の後、FIBA世界選手権を実施することを決め、1950年第一回のホスト国として、アルゼンチンの名前が上がった。

1950年第一回世界選手権を制し、アルゼンチンバスケットボールのクラブ数は飛躍的に増加し、コートが増設された。世界選手権のタイトルの後に、アルゼンチンはブエノスアイレスで開催された1951年パンアメリカン競技大会で銀メダルを獲得し、1952年ヘルシンキで開催されたオリンピックで4位という成績を残した。

しかし、政治的な理由での、軍事独裁政権は暫定的にアルゼンチンのバスケットボール連盟に登録していた37名のプロ選手を、アマチュアスポーツマンの規程に違反と見なし閉め出した。アルゼンチンバスケットボールは、この時期から低迷することになる。

1980年モスクワオリンピックの出場権を獲得するも、他の西側諸国と同様にオリンピックをボイコットした。

1984年長く続いたアルゼンチンバスケットボールの低迷に、故レオン・ダビッド・ナクスーデル氏は、長年計画したLNB (Liga Nacional de Básquetbol の略、以下LNB) を立ち上げ

た。レオン氏らは、まず競争力が落ちた国内リーグをプロ化し、入れ替え戦方式などを取り入れ、クラブ同士が活性化することを望み、翌年1985年LNBのプロリーグがスタートする。

1996年アトランタオリンピックに44年ぶり出場を果たし9位、その8年後の2004年アテネオリンピックで金メダルを取るようになる。

表 7 アルゼンチンバスケットボールの歴史

西暦	歴史	備考
1910年	アメリカ海軍によってバスケットボール伝導	バイアブランカ=バスケットの聖地
1912年	YMCAにて試合	
1927年	バスケットボール協会設立	
1928年	アルゼンチン全国大会	24洲の選抜大会：現在75回大会
1930年	クラブ組織が作られた	ソシオ制度：営利目的でない
1946-55年	ペロン大統領	National Training Center
1950年	第1回 世界選手権	優勝：ブエノスアイレスで開催 ※バスケット地域クラブ急増：バスケットコートが増設された。
1955-57年	軍事政権 37人のプロ選手が弾圧	
1970年代	世界大会1度だけ	
1980年	(モスクワ五輪)	他の西側諸国と同様ボイコットにより不参加となった
1984年	リーグ設立	故レオン・ダビッド・ナクヌーデル氏によって設立
1985年	LNBスタート	
1996年	アトランタ五輪	44年ぶり出場9位
2004年	アテネ五輪	金メダル
2008年	北京五輪	銅メダル

第2節 先行研究

スポーツの強化・育成に関する先行研究の中で、まず他国スポーツの強化・育成について見てみるとは、海外の発展してきたスポーツの育成を対象にした研究は盛んに行われている。フランスのサッカー選手育成システムに着目し、日本のサッカー選手育成を改革するに資する資料を得る事を目的とした松原ら（2009）の研究がある。他にも、日本のジュニア育成システムを比較した研究としては、イギリスのスポーツに関するジュニア選手の育成・発掘のシステムを検証し、日本におけるジュニア育成方法との比較を試みた伊藤ら（1999）の研究が存在する。また、韓国におけるプロゴルファーの強化・育成をインタビュー、アンケート調査を明らかにした井上（2010）の論文がある。アルゼンチンの男子バスケットボール代表がアテネオリンピックで優勝に着目した論文としては、アテネオリンピック報告（倉石平 2005）がある。倉石（2005）アルゼンチンプレーヤーの NBA 入団、アテネ優勝などこれまで勝ったことのなかったチームの勝利というのはアルゼンチンの一貫教育からくるものではないかと論じている。

次にバスケットボールに関する研究については、日本国内のバスケットボールに関する先行研究は、バスケットボールの技術や戦術の部分では、バスケットボール競技における長身選手育成について（市谷浩一郎、村上佳司、鳥一成、石川俊紀）の論文や「JABBA 変革 21」の「日本オリジナルバスケットボール」について、「オリジナルバスケットボール」とはいかなるものかを明らかにした（三原学 2005）研究が存在する。

以上のようにジュニア育成に関しての他国の調査をして有効であったことの研究は存在するものの、バスケットボールの育成に関する研究は充分でなく、技術、戦術をベースに論じている物が多い。また、何らかの情報を開示しバスケットボールの強化・育成をする上でのマネ

ジメント施策や戦略を意図とする研究は充分でない。アルゼンチンバスケットボールの育成・強化施策を明らかにすることは、大いに意義がある。

第3節 研究目的

前述の通り、近年、バスケットボールアルゼンチン男子代表の世界大会における活躍は著しい。44年ぶりに1996年アトランタオリンピックに出場すると、その後、2002年世界選手権では準優勝、2004年アテネオリンピックでは優勝を果たした。また、アンダーカテゴリーの世界大会の戦績も加味されているFIBAランキング（2011年11月）においては3位に入っている。日本と同程度の平均身長でありながら、アルゼンチンは日本も経験している約40年のオリンピック不出場から抜け出し、さらには、世界大会で好成績を残し続けている。そこで本研究では、男子バスケットボールアルゼンチン代表の成功要因を明らかにすることを目的とする。

第2章 研究手法

前述の通り、本研究は、男子バスケットボールアルゼンチン代表の成功要因を明らかにすることを目的とする。そこで、本研究では、以下の2つの手法を用いる。

第1節 アルゼンチンバスケットボールの関係者へのインタビュー調査

まず、アルゼンチン現地でインタビュー調査を行った。

調査はアルゼンチンバスケットボール連盟の強化・育成に関わる各部署の責任者、州の責任者、代表コーチ、育成統括責任者、リーグ創設の関係者、クラブの経営者、コーチ、育成コーチ、アルゼンチン代表選手（NBA 選手）の計 16 名に対して行い、アルゼンチンバスケットボールが急成長した要因や育成・強化施策についてなど調査を行った。

第2節 クラブのジュニア選手、指導者に対してのアンケート調査

まず、アルゼンチンバスケットボール・クラブのジュニア選手 69 名に対して、バスケットボールを始めた経緯、練習量、練習に対する意識などについてアンケート調査を行った。

次に、クラブでの年代別の指導方法について、アルゼンチンバスケットボールのコーチ 9 名にアンケート調査を行った。9 つのアンダーカテゴリーごとでどのようなことを重要視してコーチングされているか調査した。バスケットボール選手向上に必要である 8 個の要素を筆者独自に以下のように定め、5 段階で重要性を評価してもらった。

1) 技術、2) 戦術、3) 筋力トレーニング、4) 判断力、5) アジリティー、6) 反応、7) 空間認識力、8) 調整力

第3章 アルゼンチンバスケットボールはどのように強化されたのか

本章では、バスケットボール関係者に対するインタビュー結果を記述する。

調査の際、まず1952年～1996年の「オリンピック44年間不出場」について聞き、その後、どのように世界トップレベルへ急成長したのかという要因をそれぞれの立場でどう考えているのか調査した。そして、それぞれの立場と役割においてアルゼンチンバスケットボールの強化・育成をどのように担っているのかを質問し、アルゼンチンバスケットボールの強さを調査した。

表8はインタビュー対象者を示している。

表8 インタビュー対象者リスト

	氏名	役職	日時
1	ロドリゴ・ガルシア	アルゼンチン連盟広報：男子アルゼンチン代表広報担当	11/4/2011
2	シャンルーカ、アニュエ	ボカジュニアズ U-13-14選手	11/4/2011
3	ヘラルド・ヴィタリ	ユレヒアレスクラブ理事	11/6/2011
4	ラウル・パリオス	ブエノスアイレス州・バスケット協会理事	11/6/2011
5	ニコラス・ガリノ	ユレヒアレス・クラブ育成コーチ	11/6/2011
6	ハンベルト・チェアヴェニル	アルゼンチン強化・審判部門専務理事	11/7/2011
7	ガスタボ・クレメンテ	ボカジュニアズ・バスケットボール会長	11/7/2011
8	ジュリオ・ラマス	アルゼンチン代表ヘッドコーチ、オブラス・ヘッドコーチ	11/7/2011
9	マルセロ・アドリアン・チャメス	ナショナル・トレーニング・センター/スポーツ局、総括・企画責任	11/8/2011
10	オラシオ・フォアン・セルヒオ	スポーツ局バスケット統括：リーグ創設関係者	11/8/2011
11	ルイス・スコラ	アルゼンチン代表選手、NBAヒューストン・ロケッツ	11/8/2011
12	エンリケ・トルカチェル	CABBバスケットボール・ディレクター兼代表アシスタントコーチ	11/9/2011
13	ロナルド・コドバ	ボカジュニアズU15-19コーチ、プロチーム・アシスタントコーチ	11/10/2011
14	アレキハンドロ・ペレス	ESPN、アルゼンチン・バスケットボール歴史書著者	11/10/2011
15	ネストロ・ガルシア	アルゼンチン代表アシスタントコーチ	11/12/2011
16	オスカー・サンチェス	ボカジュニアズ・ヘッドコーチ	11/14/2011

第1節 連盟広報担当

本節では、アルゼンチンバスケットボール連盟広報兼アルゼンチン代表広報担当ロドリゴ・ガルシア氏にインタビューしたものを記述した。

第1項 アルゼンチンバスケットボールの歴史

アルゼンチンは1950年に世界選手権大会を初めて開催した国であり、その大会で優勝したという歴史がある。また、その大会は国が出資することで開催された。さらに、世界選手権は2010年のトルコ世界選手権で16回を迎える歴史ある世界大会で、アルゼンチンバスケットボール連盟は、FIBAの創設に関わった原加盟国であり、FIBAを支えてきたという証が世界選手権でもある。また、その世界選手権大会でアルゼンチンが優勝したことに誇りを持っている。

優秀な選手が出て、世界のバスケットボールを引っ張っていたが、政治的背景が大きく変わり軍事政権となり、選手たちが継続して練習できなくなったということが語り継がれ、この時期は国内の競争がなくなり、その影響でレベルが下がってしまったようだ。

アルゼンチンバスケットボールは、1985年にリーグができ、プロバスケットボールとして始まり大きな変化をもたらした。様々な人を説得し、このリーグを作った人物が故レオン・ダビッド・ナクデール氏であり、ナクデール氏は選手としてもコーチとしても国内リーグで活躍し、その後アルゼンチンバスケットボール連盟の会長も務めた人である。その後、全国各地にクラ

ブでの強化・育成が活発化し、国内でバスケットボールの高い競争ができるチームが増えたことがレベルアップにつながった。また、試合数も増え、審判のレベルや選手のレベルも上がった。これがアルゼンチンの大きな変化の最も重要な部分であると分析する。リーグができた当初は有名な選手が一人も出ていない状況であったが、ゴールデン世代と呼ばれる選手が育成され、その後、素晴らしい結果を残した。アンダーカテゴリー代表が世界で好成績を上げ、日本で行われたヤングメンの世界大会でも好成績を残している。このヤングメン大会の歴史を辿ってみても、現代表のスコラ選手（現・アルゼンチン代表、NBA ヒューストン・ロケッツ）、デルフノ選手（現・アルゼンチン代表・ミルウォーキーバックス）、ノシオニ選手（現・アルゼンチン代表、NBA フィラデルフィア 76ers）、ジノビリ選手（現・アルゼンチン代表、NBA サンアントニオ・スパーズ）らが参加している。1996年、44年ぶりにアトランタオリンピックに出場時のヘッドコーチは、ギイセルモ・ベッキョ氏が務めた。2002年のインディアナポリス世界選手権で2位になり、その後、2004年のアテネオリンピックで金メダルという最高の結果が出た。

2004年には、サッカーもオリンピックで優勝しているが、バスケットボールの方が重要視された。その理由は、バスケットボールはオリンピックの方がワールドカップより重要視され、サッカーはその逆の関係であるからである。その為、人々がバスケットボールを応援したいという気持ちになり、国民全体が盛り上がった。ガルシア氏達は1985年からアルゼンチンバスケットボールの強化を計画的に行ってきたので、アルゼンチンバスケットボールが世界で活躍することを期待していたが、この時の国民は、まだアルゼンチンバスケットボールが世界で活躍するなど予想もしていなかった。しかし、アルゼンチンの国民はNBAでの活躍、そしてアテネで優勝した時にアルゼンチンバスケットボールが世界でどこの位置にいるかを知り、有名な選手が誰かを知らしめ、より多くの若い選手達を発見することになったのである。2004年のアトランタオリンピック後、FIBA ランキング1位になったことは、アルゼンチン国民が誇りに感じた瞬間であった。もちろん今、現在も3位であることは素晴らしいことで、意味があるという。

第2項 アルゼンチンバスケットボール復活の鍵

44年間オリンピックに出ていない状況から、オリンピックに出場し、その8年後には金メダルを獲得するという偉業を成し遂げることができた理由の1つは、1994年に本格的な改革が行われたからである。今までのアルゼンチンの「アメリカ大陸予選では勝てないと考えてしまう。」という根底の意識を覆すことが目的であった。その意識を指摘し、徐々に選手達は変わっていったというのが語り継がれている。

そして、アルゼンチンユース代表ヘッドコーチを務めていたエンリケ・トルカチェル氏が重要人物ではないかと分析している。長い間アルゼンチンバスケットボール代表に関っているコーチで、アルゼンチンのユース年代の育成全てを統括している人であり、育成プログラムを作り、国内全土で選手のスカウティングもしている。2004年アルゼンチンがアテネオリンピックで金メダルを獲得したときはアシスタントコーチである。その他のキーパーソンとして、代表のヘッドコーチであり、オブラスのヘッドコーチのジュリオ・ラマス氏がいる。

その次の理由として、15～19歳くらいからクラブで育成・強化され、選手として熟練した状況で最終的にヨーロッパに行くという構造ができ上がっていることが挙げられる。これはしっかりとしたクラブ組織とリーグが確立しているからこそできる事であり、イタリアやスペイン等のヨーロッパに行くこと自体が、海外での経験でメンタル的に強くなること、そして、レベルの高いリーグでプレーすることによってレベルアップに繋がり、さらに逞しくなって戻ってくるという構造がアルゼンチンにはある。アルゼンチンの代理人がスペインの代理人ととても良い関係にあったこと、アルゼンチンともう一つの二重国籍を持つ選手がヨーロッパの各国のバスケットボール・ルール変更がなされた為、ヨーロッパへ行くことが容易となった。つまりタイミング良くアルゼンチンが強くなった時に外国人枠が広がり多くの選手が世界レベルで

の教訓を得ることができた。

また、アルゼンチン選手のバスケットボールに対する強い思い、這い上がろうとする情熱は世界でも類を見ない。さらに他のことを犠牲にし、バスケットボールに集中する気持ちが強いことなどのがその他の理由として挙げることができる。

第3項 アルゼンチンバスケットボールの現状

現在の代表のヘッドコーチはジュリオ・ラマス氏が務め、アシスタントコーチがエンリケ・トルカチャル氏（ジュニア・ユース年代の代表ヘッドコーチ）もう一人のアシスタントコーチは、ネストロ・ガルシア氏である。ラマスヘッドコーチより上のポジションはなく、彼の意志で全ての方向性が示され、アンダーカテゴリーの総括的役割も担っている。ただし、財政面のことに關しては会長が全ての権限を持ち、それぞれの委員会を通して決められる。ガルシア氏はプレスマネージャー（広報部担当）であり、トルコ大会でも代表の試合に帯同しメディア対応することが主な仕事であるが、海外でプレーする選手、各 NBA で活躍する選手は特に対応が必要であり、チームの現状までも把握している。

国内のリーグ LNB には、16 チームあり、全てがアルゼンチンコーチであると認識しており、この理由は、リーグの規定でもあるがアルゼンチンコーチのレベルが高いからである。その基になっているのが、毎年ヨーロッパからコーチを招聘し、ライセンスを取るため、またライセンスを継続するための講義、試験を行っていることが挙げられる。試合のレポートを書いて評価する強化委員会的な機関のトップは、連盟の会長、プレジデントと呼ばれるヘルマス・ヴァッカロ氏が務めている。ヘッドコーチを選出し、将来のアルゼンチンバスケットボールのビジョンを考え、提唱するのが会長の役目であり、20 年間アルゼンチンバスケットボール連盟の会長として務め近年のアルゼンチンバスケットボールの成功を導いている。

また会長の直轄部門である、アルゼンチンバスケットボールの強化・育成の部門に、プログラムを遂行するシニア代表のラマス氏やトルカチャル氏がいる。また、トルカチャル氏は育成のトップで、アンダーカテゴリーのヘッドコーチからシニア代表アシスタントコーチまで代表チームの活動全てにコーチとして関わり、育成部門全てをマネジメントし、各クラブでのアルゼンチンバスケットボールの育成方針を伝達するまでの責任を司っている。また、指導者学校、審判学校も彼が統括している。審判の学校には、代表ヘッドコーチのラマス氏が講義を受け持つケースもあり、連盟内での強化に関わる全てに代表スタッフが影響している。また、代表が強くなるための組織として、医学部門やマーケティング部門、会計の仕事を担当する部署が存在している。

アルゼンチンバスケットボール連盟とリーグとは関係なくそれぞれが運営している。アルゼンチンバスケットボール連盟の中に存在するが、リーグ A（16 チーム）、TNA（22 チーム）はプロリーグが運営し、リーグ B（55 チーム）、リーグ C（プロではなく州ごとに多数存在）アルゼンチンバスケットボール連盟が運営しているという組織図である。クラブのアンダーカテゴリーは U21、19、17、15 で、この下に 13 歳以下のミニバスケットが存在し、子供たちが競争しながらプレーする。選手は全部で 12 人構成されている。一番小さい子供たち以外、ミニと U13 は 1 週間に 2~3 回練習している。フベニルは 1 週間に 5 回で、試合がある週の場合は毎日活動している。

第2節 ボカジュニアズ・アンダーカテゴリー選手

本節では、ボカジュニアズのアンダーカテゴリーでプレーしている、シャンルーカ選手（U-13）とアニエ選手と（U-14）のインタビューしたものをまとめた。

第1項 ボカジュニアズについて

U13-14 では、火曜日と木曜日に 3 時間くらいテクニック重視の練習を行い、土曜日と日曜

日は試合を行っている。一つ上のカテゴリーでは、月曜日、水曜日、金曜日にU13-14 より少し厳しい練習を行っている。また、小さい年代の練習で特徴的なのは、2対2や3対3等の与えられたゲームの状況でのミニゲームである。

ボカジュニアズはヘッドコーチの方針で基本的にマンツーマンディフェンスを行っており、ゾーンディフェンスはあまり行わない。12、13 歳ではゾーンディフェンスに対するチームでの攻め方については練習せず、一つ上のカテゴリーで練習している。1 チーム 12 人の選手が所属していて、トップチームとは別の人がコーチを務めている。13 歳までは女子も一緒に試合を行える事になっているので、一緒に練習をしている。アルゼンチンは女子バスケットボールも強い。

第2項 若い世代の選手の意識

将来はボカジュニアズのプロバスケットボール選手を目指している。NBAも視野に入れており、できるだけ行けるところまで行きたいと考えている。また、アルゼンチンでは試合中の汗を拭く係がホームのアンダーカテゴリーの選手たちの担当になっているが、バイト代は一応払われるが、自分たちのトップチームの試合だから当然であるという。

また、練習では個人技を少なくし、常に仲間を探してプレーする、チームで試合をするという考え方を持っている。これがアルゼンチン流であるとも理解している。このアルゼンチン流のスタイルを小さい時から教えられている事がアルゼンチンバスケットの強さの理由だと考える。

第3節 ユレヒアレスクラブ理事、ブエノスアイレス州・連盟理事

本節では、ユレヒアレスクラブ理事・ヘラルド・ヴィタリ氏、ブエノスアイレス州バスケットボール連盟理事・ラウル・バリオス氏に同時にインタビューしたものをまとめた。

第1項 ユレヒアクラブについて

ユレヒアクラブは、アマチュアのクラブで、85年に創立され、その頃から世界大会に合わせ、ミニ、インファンテル、カデーテ、U-15、17、19、23とカテゴリーが分かれている。そしてU-15以上はそれぞれに12名ずつ所属しており、合計48名所属選手がいる。この中で、仮契約をしているのは48名のうち15名の選手で、他のクラブより引拔があった場合は、移籍金がアルゼンチンバスケットボール連盟、85%が現在所属のクラブ、15%がブエノスアイレスのバスケットボール連盟に支払われるシステムである。ブエノスアイレス州では不公平をなくすため今年修正された。

アマチュアクラブの特徴は、政治的介入がないため、首脳陣独自で運営ができ、コーチ陣も首脳陣達で決めることができ、また、選手の父親達の積極的な協力で成り立っている。コーチ陣は4名いるが、ドクターがフィジカルコーチを兼任し、スポーツサイコロジ専門の人が指導を協力することもある。そして、以前クラブの選手だった人がコーチをすることも、アシスタントコーチがフィジカルコーチを兼任することも各クラブで違いがある。また、それらは、クラブの首脳陣が話し合い決定している。また、アルゼンチンのクラブの特徴は、フィジカルトレーニングを基本的に15歳から始めるということが当たり前とされ、各年齢で分けられたカテゴリーのチームの中で優れた選手は、1つ上のカテゴリーへ飛び級し、プレーする。

第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

1つ目の理由として、アルゼンチンでは子供から大人まで、攻撃的な面でも、守備的な面でも、長い間同じシステムでやってきたことが挙げられる。

例えば攻撃面では、2002年のブラジルのルーバン・マニアーノヘッドコーチの時から、パスして走るという基本のコンセプトに、付け加え「フレックス」というスクリーンを多用したコ

ンビネーションプレーを用いた。また守備面では、常にアグレッシブな守りというのがコンセプトを持っており、これが継続して現在までのアルゼンチンバスケットボールのスタイルとなっている。世界で戦うために、2002 年より 10 年かけて信じてずっとこのコンセプトを一貫してきているように話した。また、ヨーロッパと比べて体格が劣るアルゼンチンでは、フィジカルの強化に力を入れており、3 月から 10 月のシーズンが始まる前に、機械を使うウェイトトレーニングと、コートの中でする自重でのフィジカルトレーニングやコーディネーショントレーニングを中心に行っている。ただ、外を走るなど、長距離を走るトレーニングはしていない。

2 つ目の理由としては、LNB というプロリーグが創立したことが挙げられるが、そこに至るまでは、政府の交代によって、プロ化を阻止されてきた歴史があった。50 年代にプロ化の動きがあったが、その時は大統領に阻止され、その後の革命があった際にもプロ化を目指したが、その時も政府に阻止され、プロ化になる前は、国内での競争力が弱い状況で、オリンピックに出られないアルゼンチンバスケットボールが続いていた。そこで LNB とプロ化したことでサッカーに次ぐスポーツとして注目され、国内のクラブ間での競争心が生まれたことが競技力アップした理由である。

そして 3 つ目の理由としては、文化的社会的背景が関係している。アルゼンチンは発展途上国であるため、経済的な問題があり、スポーツでお金を稼ぎたいという人が多い。ただ、アルゼンチン国内での生活は保障されていないため、海外へ出なければ稼ぐことができず、そのためにプレーをするという環境から、強いメンタルが自然とついたと考えている。さらに現在では、アルゼンチン出身の NBA プレーヤーもいるため、それが目標となり上を目指していくモチベーションになっている。ただし、経済的に恵まれていないクラブが多いため、技術的なこと、体力的なこと、戦術的なことを中心に練習が行われているのが現状で、サッカーで行われているメンタルトレーニングを取り入れたいと思案しているが、バスケットボールでは行われていない。

第 3 項 アルゼンチンバスケットボールを強くしてきた人々

LNB が創立される前、1975 年から約 10 年、指導者達の間で争いが絶えなかった。そして、1984 年レオン・ナジューデル氏が中心となり LNB を創立し、1985 年にスタートした。このことにより、アルゼンチンバスケットボールのレベルが上がっていき、1996 年に彼の意志を継いだベッキョ氏がさらに改革し、コーチのお手本となってここからさらに強くなっていった。さらにベッキョ氏の意志を継いだ、マニアーノ氏、ラマス氏、トルカチュエル氏などの優秀なコーチが現れ、そのコーチ陣達が現在の強いアルゼンチンバスケットボールに導いてきた。さらに、多くのコーチ達が尊敬され、権限を持ちながら、リーダーシップを発揮してきた。

またこのコーチ陣の特徴として、若年でヘッドコーチになり、リーグ創設と一緒に成長してきた。そして、基礎的なコーチングを国内で学んだ後、海外で学ぶことが当たり前とされ、ベッキョ氏はイタリアへ行き、ラマス氏はスペインに行くなど、ヨーロッパへ勉強に行くコーチが多くなった。

ユレヒアレスクラブの全てのカテゴリーのコーチ達も同様に、ユーゴスラビアに学びに行った経験があり、そうしたアルゼンチンのコーチ達の積み重ねが、現在、LNB16 チームのヘッドコーチが全員アルゼンチン人という事実に至っている。またその事実が、アルゼンチン代表の強さに繋がっているのであろう。

第 4 項 アルゼンチン代表について

アルゼンチン代表ヘッドコーチは、それぞれの州連盟の会長が入っている委員会で最終的に決議され、選手は、代表ヘッドコーチが選出する方法となっている。これまで世代ごとにチームを凝縮した形で継続的な強化がされている。その現象として、1995 年より 35 名しか代表選手が選ばれておらず、同じ選手達でチームプレーを培い、戦ってきたことがアルゼンチンバ

スケットボールの強さの現れではないであろうか。さらに現在でも同じアイデアを持ちながら、同じプレースタイルで次世代へ交替していく時期であり、アルゼンチン代表がチームの若返りを果たせるかの挑戦の時期である。

第4節 ユレヒアレスクラブ育成コーチ

本節では、ユレヒアレスクラブ育成コーチ・ニコラス・ガリノ氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 指導方針

ミニのカテゴリーの練習は火曜日、水曜日、金曜日に1時間ずつ行い、日曜日は試合が行われている。ガリノ氏は13歳以下のミニのカテゴリーを指導し、この年代のチームを教える際には、基本が一番重要な事であり、練習の中に技術的なファンダメンタルを1つは必ず入れるようにしている。バスケットボールのファンダメンタルを大切にしている点は変わらないが、その内容は日々違う。例えば、シュートのドリルを入れたとすると、次の時はパス、その次はドリブル等とし、それぞれの基本練習によって目的を変えながら集中的に行うことが必要である。そして、この年代では、2対2、3対3といったミニゲーム形式が非常に有効な練習であり、その際、シュートに行く前に全員がボールを触るようにするというようなルールを設け、パスで攻める事が大事であるという指導している。

また、一番意識して取り組んでいる事は、この年代の選手たちに対し、段階的にきちんと物事を教えていくことである。最初の段階では楽しむことの重要性を教え、その次にチームの規律を伝え、次にお互いを尊敬する気持ちを持つことが大切であることを教えることが選手の上達するために必要で、コーチする上で最も重要なことである。

第2項 指導者について

7時から15時半までコンピュータ仕事を行い、コーチの仕事は、月曜日～金曜日の17時以降と試合の日曜日である。そして仕事での給料は、1ヶ月1500ペソ稼ぎ、クラブ払われる給料は1ヶ月350～400ペソ程度である。以前、違うクラブから1軍のプロコーチを依頼されたが、仕事が重なって断った経験があるが、選手を育てるため、今後も2つを両立させることが望みである。

第3項 クラブ指導で重要視していること

勇敢にプレーすること、声を出して応援すること、フィジカルなプレーすること、周りを見てプレーすること、状況判断が上手いこと、これらがとても重要である。そして、アルゼンチンの選手が勝つという意識が優れているが、勝つことが全てという考え方にならないことをこの年代では気を付けている。チームで攻めるということを優先するし、ボールを動かし、バスケットに対しカットし、パッシングゲームするという単純なことができることを、一番の最終目標としている。この年代の選手たちは、試合に入った時の集中力は優れているが、チームで戦う点はまだ足りないと分析している。そしていくつかの詳細部分がこの年代で重要であると付け加えた。ボールのもらい方、キャッチしてからボールを下げない。顔を上げてそのまま、クイックモーションでパスすること、そしてスリーラインを走ること、広いスペースを作り仕掛けることなどを意識させている。

さらに、アルゼンチンは首都でも田舎でも競争があり、地域のリーグから全国大会もある。このようなことからいい選手は必ず生まれてくるのではないだろうか。すごくいい世代が育て世界で結果を残してきた。それが結果的に子供たちの憧れとなり、バスケットボールをさせるきっかけにもなってきた。このような環境がアルゼンチンの強さを支えている。

第5節 連盟・審判部専務理事

本節は、アルゼンチンバスケットボール連盟・審判部専務理事、ハンベルト・チェアヴェニル氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 アルゼンチンの審判について

アルゼンチンの審判のジャッジは、フィジカルコンタクトを推奨している部分がある。それは、世界で行われていることで、アルゼンチンだけではない。一番強調したい部分は、「世界には1つのルール」しか存在しないということである。アルゼンチンでは、審判のレベルの格差をなくし、世界基準での判定が国内で行われることを目指し、様々な努力を行っている。まず、アルゼンチンの審判は、バスケットボール界における役割や権限がはっきりしていて、その高いレベルを保つために、審判を指導するインストラクターが存在し、審判を養成している。そのインストラクターは、大学の中に在籍し審判養成プログラムを持っていて、レフリーを養成、指導している。そのインストラクターを統括しているのがハンベルト・チェアヴェニル氏である。

また、アルゼンチン全体にその審判の指導が行き渡るように、毎年リーグ終了後、7月か8月に、ブエノスアイレスのナショナルセンターでアルゼンチン全土の審判が集まり、3日間のクリニックが実施されている。審判は、このクリニックへの参加が義務化され、その際30個の質問の筆記試験とフィジカルチェックを行い、審判のレベルを図っている。この3日間を通して、レベルや、リーグ、大会、国によって笛を吹く基準を変えることのない審判の育成が行われているということだ。また、特出すべきは、国際経験の豊かなシニア代表コーチを呼ぶなどし、指導者側から見た審判の評価などの話し合いも行われる。さらに指導者のクリニックの際には、国際審判の中でもレベルの高い審判を派遣し、同様に審判側から見た指導者の評価、世界の判定基準などが話し合われ、審判と指導者の間でルールに対する基準が変わらないようにしている。またアルゼンチンバスケットボールの審判の判定基準は、フィジカルコンタクトを推奨している部分があり、一本筋道を立てている。「笛を吹かないことも技術である」とし、フィジカルコンタクトをどのようにさせるかが鍵である。それは、アルゼンチンで吹かれているジャッジで選手が育ち、世界でプレーする流れを理解している。また代表が国際舞台でより良い結果を出すためには、判断基準が偏っているとは戦えないのである。この部分の理解を明確にしておけば、次また新しい世代が世界で戦っても成功するという自負をもっている。

それ以外にも、ルールが変わった時など、審判とコーチ連盟との話し合いがあり、意見交換をした状況でリーグ、トーナメントが実施されるようにしている。試合中の状況においても、その時々で、指導者側からの抗議があった場合に、審判がコーチに対し、ルールと基準について説明責任を果たすこと、紳士に対応することを心がけることが指導されている。またコーチ、選手からも信頼してもらえるような努力、そしてコーチと対等に話をできる立場、ゲームを成立させることの役割を果たすために何が重要かをいつも問いただしていることも重要である。さらに、世界の大会においては、国によってのレベル、認識の違いがあるので、その時々で審判が集まり、どのように笛を吹くかの話し合いが行われている。

もう1つのアルゼンチンの特徴としては、12歳までは友情的なものを深めることに焦点を置き、楽しむバスケットボールをさせてあげることが重要視させ、審判には、ミニのレベルを審判する時には、審判の評価はしない。また13歳以降からルールを関連付けてプレーさせているため、レフリングも厳格になり、審判に対しても要求が高くなるのである。

第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

大きな要因として、1985年にLNBが設立されたことが挙げられる。プロリーグの設立により、まず指導者がさらに勉強をしなくてはいけなくなり、レフリーも、ヨーロッパなどの、海外から学ぶ必要性が出てきた。世界を目指そうという思いから始まったプロ化の動きが波及し

てレベルが上がったのである。そして、プロチームにはスポンサーが欠かせない存在であるが、いい選手、いいチームに良いイメージが付き、良いスポンサーが付くという構図から競争力が増したことも挙げられる。また、いいイメージのスポンサーのおかげで、そのチームの選手に対して憧れる人がさらに増えて、さらにスポンサーも増えていくという連鎖反応が、アルゼンチンバスケットボールの資源の基となっていった。その結果、ヨーロッパのプロリーグや、NBAでプレーする選手を次々と輩出することができて、さらにアルゼンチンバスケットボールの全体がレベルアップしていったのではないであろうか。

そして毎年、州ごとのトーナメントの他に、国内全体でトーナメントがあり、その中にクラブのトーナメントも一緒に入って試合をしている。このシステムは、州での 20 チームくらいを 1 つの地域とし、5 チームずつ分かれて 4 ブロック作り試合を重ねる方式である。その中でいいチームだけが残し、その後トーナメント制にして、準決勝を行い 3 チームに絞り、その後、他の地域とも戦いながら、最終的にアルゼンチン国内で 1 番最後に残った 6 チームが戦うようになっている。地域で試合数の多い中で、選ばれた 1 番強いチームだけが残る仕組みで、驚く程の競争力を生み出している。この方式ですべてのカテゴリーで行われ、若い世代、小さい時から競争意識を芽生えさせる仕組みがアルゼンチンバスケットボールの底上げにつながっている。

もう 1 つは、バスケットボールの体制、組織が挙げられる。19 歳以下の年代でも、クラブ組織で育成されたプレーヤーから、アンダー13、15、17、19 の各年代の大会に向け、各年代で専門家を集めてアルゼンチン代表チーム作りを行い、それぞれの年代ごとで成果を出すという体制がアルゼンチンにはある。さらに自然といい選手が次々と出てくるクラブでの育成、組織作りをしている。それぞれのカテゴリーの代表がシニア代表のアシスタント・トカチェリ氏（アンダーカテゴリー代表ヘッドコーチ兼任）のもとで発掘、育成が行われ、継続した形で活動を行っていることがプラスに働いている。さらにその総括をシニア代表のラマス氏が全体を見渡しているという体制がアルゼンチンバスケットボールの強化の支えであり、現在のアルゼンチン代表が世界で戦う準備を実現可能にしている。

第 6 節 ボカジュニアズ・バスケットボール会長

本節はボカジュニアズ・バスケットボール会長、ガスタボ・クレメンテ氏にインタビューしたものをまとめた。

第 1 項 アルゼンチンのクラブについて

ボカジュニアズは、1905 年創立、サッカーチームが設立され、1930 年にバスケットボールチームが設立された。この流れは、アルゼンチンのクラブでは主流であり、サッカーのクラブと共存しているケースが多い。

その後、1984 年に LNB が設立されたが、州よりも少し区切られた地域で優勝したチームしか参加できなかったため、ボカジュニアズは 84 年からは参加できず、2 年後の 1986 年よりリーガ B（現在の TNA）に参戦し、そして 1989 年に現在のリーガ A に昇格した。

ボカジュニアズは、現在に至るまで LNB で 3 度のリーグ優勝を果たし、2004 年から 2006 年まで 3 年連続で南米カップ優勝を果たしている。クレメンテ氏は、1993 年よりバスケットボールチームの会長を務めており、過去に父親がそのポジションを勤めていた。ボカジュニアズバスケットボールチームの経営体制は、経営者が 3 名おり、プロとアマチュアのチームに分かれている。プロチームは、コーチ 1 名、アシスタントコーチ 2 名、フィジカルコーチ 1 名、フィジカルトレーナー 2 名、ドクター 1 名、アマのチームは、ミニのカテゴリーで 2 名、フベニルは 2 名のコーチとフィジカルコーチが加わる。運営に関わる部分は事務で働く人でサポートされている。また、プロチームに必要な、データ分析の担当はアシスタントコーチの仕事であり、アルゼンチンでは、スポーツの中でバスケットボールが、1 番分析が重要だという考え

から、アシスタントコーチが1番大事だという意識があり、ユースのチームのコーチも、アシスタントの一人として分析、練習、そしてゲームに携わっている。そこでアンダーカテゴリーとトップチームとの間でコミュニケーションが行われ、クラブでの一貫指導が行き渡ることになるという意図もある。

また、コーチの選び方は、昔はボカジュニアズのスタイルがあったが、3年前にコミッショナーが変わり、有名なヘッドコーチを取るようになった。過去、ボカジュニアズでヘッドコーチをしていた人として、1996-97年に現・アルゼンチン代表ヘッドコーチのラマス氏、1999-2000年、マニアーノ氏、2003-2005年、セルデオ・エルナンデス氏、それぞれがボカジュニアズを経て、アルゼンチン代表ヘッドコーチを務めたという経緯がある。

そして、選手選びは経営陣が決めた予算の中で、基本的にコーチが自分のスタイルに合わせて一任される。そのスタイルを実現させるための選手選びを行っているため、選手選びに関しては、ヘッドコーチの要望を極力聞かなければならない。しかし、チームに世界レベルの選手がいた場合、予算内でチームを作らなくてはならない理由から安い選手も選ばなければならないということが問題で、ヘッドコーチ、選手の代理人と共にしっかり話しをして、最終的に予算の範囲内で合意するようにしている。また、クラブには約90名所属選手がおり、各世代、12名までの所属となっている。12月に地方から15歳から19歳までの世代で30~40人を集め、トライアウトを行っているという。この選手たちをリクルートする意味でのトライアウトでは、コーディネートするスタッフが4名おり、1人の総括を中心に、ボカジュニアズのユースヘッドコーチがアドバイスする形をとっている。ユースのヘッドコーチがトライアウトで意見を言うのは珍しく、ボカジュニアズのスタイルである。しかしボカジュニアズの宿泊施設の収容可能人数があり、バスケットボールは8名までしか地方選手を選ぶことができないため多くの選手が自らのクラブで育成するという形を重んじている。なお、ボカジュニアズのサッカーチームは百数十名もの選手を他の地域からリクルートしている。トップのヘッドコーチは10ヶ月契約なので、10ヶ月契約のみで終了の場合もあるため、このトライアウトには関与しない。ボカジュニアズではプロのチームとアマチュアの育成の場所に全て関わるわけではないという特徴がある。

フィジカルトレーニングは、必ずフィジカルコーチのもとで実施され、ボカジュニアズ独自の方法でトレーニングしている。アルゼンチンではフィジカルトレーニングを始めるのは15歳からであるとされているが、15~16歳を考えるとまだまだ発達段階にある可能性のある選手も中にはいるので、15歳、16歳は自体重を使ってフィジカルトレーニングを行い、17歳からおもりを使ってのフィジカルトレーニングをしているというのがボカジュニアズのやり方である。ただし、アンダーカテゴリーのアルゼンチン代表に選出されている15~16歳の選手は、自体重ではなく、おもりを使ってトレーニングをしているという違いを指摘した。

第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

1番大きな要因は、1984年にLNBが設立されたことである。始まった時点では、それほど大きなリーグではなかったが、アルゼンチン全土で高い競争レベルを保っていくという目的が、アルゼンチン全土に広がっていったことが強くなった理由ではないだろうか。さらに、世界大会の成功などで選手のレベルが上がり、トップのレベルがアップすることにより、国内全体の底上げにもつながった。リーグ設立以前は、21の州ごとに大会があり、州によって強さに格差があったため、サンタフェ、ブエノスアイレス、エントリオールコールドバの4つの強い州からのみ、アルゼンチン代表選手を選んでいた。そして、ボカジュニアズに関しても、84年以前はブエノスアイレス州のチームとのみ試合をしていたと歴史がある。

それが現在では、国内リーグはリーガA16チーム、TNA16チーム、3部リーグにあたるリーガBトルネオフェデラが55チームあり、それ以外にも地域ごとにリーグが存在している。例えばブエノスアイレス州では、ブランブエノスアイレス、キャピタルフェデラルという地域に120チーム、バイアブランカに50チームあり、オラビエンセでも30チームが参加してお

り、さらにクラブ 1 つ 1 つにプレミニ、ミニがあり、アンダー13、15、17、19、21、トップチームとカテゴリーに分けられアルゼンチンバスケットボールを支えるまでになっている。

もう 1 つアルゼンチンバスケットボールが強くなった理由は、リーガ A のヘッドコーチが全員アルゼンチン人ということから象徴されるように、アルゼンチンの指導者達のリーダーシップ、実力、権限があるということである。指導者達は常に学ぶ姿勢を忘れておらず、時間があったらヨーロッパに自分のお金で講習を受けに行くなど、休みなくバスケットボールに情熱を注いでいる。その結果、コーチ達のレベルが上がり、“我が強い”選手達もコントロールする力を持つまでとなっている。さらにアルゼンチン人コーチが、意図的ではなく優秀であるが故に必然的にそれぞれのクラブでアルゼンチンコーチが採用されている。付け加えリーグに外国人コーチを採用するときの制約がある。それは、他国の代表ヘッドコーチ経験者、他国のクラブで優勝しているヘッドコーチ、もしくは NBA コーチの経験者というものである。そのルールがあるという部分もあるが、どのクラブもアルゼンチンコーチを採用している。

第 3 項 現在のアルゼンチンバスケットボールの課題

2000 年に経済的に国が崩壊したことにより、当時若い選手が少しでも良い契約を求めてヨーロッパなどの海外でプレーをした過去がある。その際、LNB でプレーして成長する前に選手が海外に出て行き、LNB のレベルを上げることができず、3、4 年もの間、国全体で競争力が弱まり、実際にリーグは成り立っていない状況が続いた。その結果、現在の 26、27、28 歳の年代であまりいい選手がおらず、25 歳以下の世代までは現在の代表選手がもう少し長くプレーをしなくてはならない現状がある。

アルゼンチン国内のクラブで若い年代がしっかりプロジェクトを通して育成されなければアルゼンチンバスケットボールは成功しない、国内リーグでの競争力がとても大事であることを物語っている。

第 7 節 代表ヘッドコーチ

本節は、アルゼンチンシニア代表ヘッドコーチ兼オブラスサニタリアス・ヘッドコーチ、ジュリオ・ラマス氏にインタビューしたものをまとめた。

第 1 項 アルゼンチンバスケットボールが強い理由

男子アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由は一つではないということをラマス氏は強調した。1 つだけこれを挙げろということもできないと話し、それ故にいくつかの理由があると順序を示した。

(1) 歴史的な競争力

アルゼンチンは、歴史があり、FIBA の創設に関わった 8 ヶ国の原加盟国であり、FIBA を支えてきた国の 1 つである。そして、1950 年に 1 度チャンピオンになり、52 年のオリンピックで、4 位になった。そのことから、昔から競争率の高いバスケットボールがアルゼンチンには存在していた。

ただ、1957 年に軍事政権に変わった際に、37 人のプロ選手達は、プロ選手としてプレーすることができなくなり国際的な順位が急激に下がった。それでも、アルゼンチンは世界選手権で 10 位前後には入っていると分析し、さらに 50 年に 1 度いい時代が築けている現状から見ても、FIBA の中でも 1 つの大事な国になっていると考えられる。

(2) リーグの設立と競争力

27 年前に LNB というプロリーグの発足により、進化をしたことは間違いない。この発足で強くなったという言い方より、ヘッドコーチと選手がバスケットボールだけに専念できるようになったということがまず前提にある。このリーグは、軍事政権の影響で下がった競技力を取

り戻すために故レオン・ナジュール氏が「競争力」を意識して創設されてできたプロリーグであり、「競争力」があって初めて成長がある。また、国際舞台で戦うためには、国内で競争力をもった戦いがいつも必要なのである。LNB リーグの審判を見ても分かる通りいつもタフなフィジカルコンタクトのゲームでコントロールしており、他国のリーグや国際ゲームを見てもそのフィジカルでの戦いはレベルが高い。選手達のフィジカルな部分は、どこよりも激しいのではないだろうか。

この競争力のおかげで多くの選手が 20 歳を超えるまでアルゼンチンのクラブで成長し、その後海外でプレーし、NBA に行く選手、他国でプレーする選手、そして自国に帰り代表でプレーするという様々な形での成長の図式ができ上がった。このような形になったのも現在の LNB の競争力が選手を育て、若い選手であってもフィジカルなゲームに対応することができ、LNB を経て選手達が海外でプレーしてもフィジカルなコンタクトで問題なかったのである。つまり LNB は、海外への登竜門であり、同時に、タフなリーグなのである。

(3) 選手の海外での成長（ヨーロッパリーグ）

1998 年ラマスヘッドコーチが代表を指揮した後、多くの優秀な選手がおおよそ 20 歳を超えた時に海外に挑戦する形になっていった。それは、ヨーロッパでボスマン・ルールの変更があり、多くのイタリア、スペインのパスポートを持つアルゼンチン選手たちがヨーロッパでプレーする機会を得たという後押しもあったが、多くの選手がヨーロッパで学び、力を発揮したことで、ジノビリ、スコラ、オベルトなどの選手が、NBA でプレーすることになったきっかけでもあった。

(4) ゴールデンエイジ 4 人の選手出現

急激にアルゼンチンが強くなった要因の一つに、同じ時期に、4 人の格別にレベルが高い選手が異なるポジションで生まれたということが言える。偶発的に生まれたのかと問われれば、そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。それは、バスケットボールが発展していない所に生まれ、育ち、競争力のない、もしくは指導者のいない所で、なおかつ一人だけその選手が存在していたとしたら何も驚かれないだろうし、話題にもならないであろう。大事な事としては特に、ジノビリとスコラの両選手が一緒にプレーしているということであり、たったの 3 歳の差しかなく、この 2 人が 10 年の年齢差があったとしたら、現状の結果は勝ち取れてなかったであろう。

そして、この奇跡とまで言えるのではないかというタレントが同じ時期に生まれたことについて、「奇跡とまでは言えない。なぜなら、彼らは鏡を使うようにモデルにできる選手が彼ら以前にいたから。」と言えるであろう。そして選手とは『3 つの状況から生み出される』と考えられている。1 つ目が、その選手のタレント性。2 つ目が、トレーニング。3 つ目が競争の中での成長力（環境）であり、もし、彼らがボリビアで生まれていたら今のアルゼンチンのようにはなっていないのではないだろうか。

(5) アルゼンチンの特徴

常にバスケットボールを知っている選手、レベルの高い選手をもっていることの証明に、4 回、オリンピックや世界大会で最優秀アシスト賞を受賞していることが挙げられる。ミゲール・コルテッホ、ミラネッショ、ペペサンチェス、そして、プリヒオニの 4 選手が受賞しているが、4 人とも違うガードの選手であり、いつもアルゼンチン代表には、ゲームを上手くコントロールできる良いポイントガード選手が存在している。この選手達は何をするかというと、周りの選手を上手く活かし良いプレーを引き出させ、インテリジェンスをもってゲームを構成、支配している。

また、アメリカ大陸の中で、5 つの全部の大会で優勝したチームとていうのは、2 カ国しかないと言った。つまりそれは、グランドスラムを実現した国であり、グランドスラムと言うの

は、南米カップ、世界選手権予選、プレオリンピック、オリンピック、そして、世界大会でチャンピオンになることだという。それができたのはアメリカと、アルゼンチンの2カ国だけであるという自負を持っている。

ゴールデン世代はとても世界的に影響力があり、世界への扉を開いてくれたと言っても過言ではない。それは、ジノビリ選手がヨーロッパに渡り、チャンピオンチームとして貢献した後、道ができた。一時的に200人もの選手がヨーロッパでプレーすることができたということが世界の扉を開いたということに値する。ヨーロッパでアルゼンチン人が活躍することは、代表が世界で良い結果を出すことに拍車をかけたと言える。そして、国内でのインパクトが強く、代表でのプレースタイル、力強いディフェンス、パスを多用すること、チーム精神をもってプレーすることが集結し、それらをリーグの全てのチームが真似をしたことから始まったのである。だからこそ、若い選手が、目標とクラブでいち早くトップチームに駆け上がり活躍するという意識をもってプレーしていくことになったのだ。

第2項 現在のアルゼンチン代表について

現在、年齢的にも最高の選手達が揃っており、その選手達を少しでもいい状況にしなければならぬと考えている。しかしながら、年齢の問題は明らかで平均年齢を見ても分かる通り、来年の南米カップ、ロンドンオリンピックを見据えて、18歳から25歳の3、4人の若い選手の起用が必要ではないかと試算している。世代交代が必要な時期であるということも視野に入れた上でラマス氏の就任であったことを明かした。ラマス氏が率いた1998年の世界選手権の頃にゴールデン世代への交代を押し進めた強化サイクルの転換があり、さらに今回その世代交代の移行を任せられているということだ。

選手の選出は、基本的にはヘッドコーチ中心にスタッフ全員で15名を選び、その承認を連盟の委員会がするという流れである。次の世代交代もこの流れに沿った形で行われるであろう。アルゼンチンの特徴としては、代表へ選手を送り出すこと、代表選手だけが人が出た時に突然の召集をすることなどに対して、全クラブがとても協力的で、戦術に対しての批判があったとしても、全てのコーチが高い志、プライドを持って世界を見ているため、代表を応援する体制になっている。

基本的には、アルゼンチンシニア代表のコニットを15人と考え、怪我人が出た場合などはその中から補充し、また15人から12名を選出し大会に臨んでいる。15人の枠外から選手を招集したことがないというのが現状である。また、平均身長については、見ても分かる通りアルゼンチンのもっている素材でどのようにして世界で勝つかを考えるとこのようなメンバー構成になるとアルゼンチンバスケットボールの歴史書を用いて説明した。ポジションと身長のバランスをどうすればいいかがはっきりしていて、それは経験から来るものでアルゼンチンのコーチであれば常識である。

第8節 スポーツ局総括・企画責任者

本節は、スポーツ局総括・企画責任者兼ナショナルトレーニングセンター総括・マルセロ・アドリアン・チャメス氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 アルゼンチンのスポーツについて

アルゼンチンでは、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ホッケー、陸上競技、ラグビー、ハンドボールが世界的にみても強いスポーツで、その中でもサッカー、バスケットボール、ホッケー、ハンドボールが高い予算が組まれている。そしてこのスポーツの予算は、ほぼ国からの補助で成り立っており、代表選手のみならず、アンダーカテゴリーもそこから資金が出され、アマチュアの選手は個人的に補助金も出ている。

第2項 アルゼンチンスポーツの歴史的背景

チャメス氏がいるナショナルトレーニングセンターは、1950年以前のペロン大統領によって造られ、どんどん修復され現在に至っている。アルゼンチンで1番人気のあるサッカーは、1930年にプロ化されており、他のスポーツと比にならない歴史と人気がある。

そしてバスケットボールも、1950年の最初の世界大会の際にアルゼンチンが優勝し、その後それぞれの地域のクラブが、ほとんどのクラブでバスケットボール・コートを作り、それが推進力となった。しかし、1950年以降からは、全てのスポーツに対して国が援助をしているが、スポーツと政治を結びつけた関係プロジェクトは持っていなかった。その後1955年軍事政権に代わり、1957年にプロスポーツ選手を全て閉め出した時期もありアルゼンチンのスポーツの競技力低下が起きたとしている。2003年以降は政治とスポーツが結びついて強い援助がありアルゼンチンスポーツは、良き時代を取り戻した。

ただし、国の援助によってそれぞれのスポーツが強くなったのではなく、それぞれプロリーグの設立、それぞれのリーグの努力によってアルゼンチンのスポーツが強くなっていったことは明らかである。

第9節 スポーツ局バスケットボール統括

本節は、スポーツ局バスケットボール統括、リーグ創設に携わった・オラシオ・フォアン・セルヒオ氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 アルゼンチンバスケットボールの歴史

1910年、バイアブランカにアメリカ海軍が上陸した際、海軍の兵たちがバスケットボールをしているのを現地の人達が見て、不思議に思ったところからアルゼンチンバスケットボールの歴史は始まったとされている。一方で、国全体には、政治的背景でYMCAが1912年に入った際、アルゼンチンがスポーツとして取り入れ、バスケットボールが始まった。ゴールドバ、サルタ、サンタフェの各州からバスケットボールが始まり、地方に広まっていった。そして、1927年にアルゼンチンバスケットボール連盟ができた。

そして1928年以降から、年齢制限なしの、24の州ごとに、州選抜が出てくる大会が始まり、現在では75回目となる歴史的な大会がスタートした。そののち各州にも全てバスケットボール連盟が設立された。組織体制としては関係がないが、アメリカ海軍よりバスケットボールが始めて伝わったバイアブランカがバスケットボールのメッカになり、そこからジノビリのような選手が生まれたのも、運命的なものを感じている。

1950年、世界大会で優勝したその後、1955～57年に軍事政権に替わった時をきっかけに、60年代70年代と、アルゼンチンバスケットボールの世界での位置付けは下降線を辿った。しかしながら、この時期は、ブエノスアイレスに選手が集まり、この地域は競争力が高かったが、この地域でプレーする選手しか代表を選べなかったという逸話が残っている。大きな国のため経済的に地域の選手がブエノスアイレスまで行くことができない選手も多く、地方にいる卓越した選手を発掘する機会を失ったというのが現状にあった。

それと同時に、移住してくる人達に、少しのお金を払い始めた時期でもあった。そのような理由により、70年代、80年代にあまり高い競争力の大会ができず、フェロ、オブラスの2、3チームしかいいチームを作れていなかった。その状況を打破するために、1984年、クラブの全体のレベルを上げるという目的を持ち、ピラミッド図式の体制にし、プロリーグであるLNBを創立した。国全体で競争することによって、各地域同士相互で影響しあうようになり、そうすることで、国内で高い競争力を持ち、その中で高いレベルの選手を育てることができると考えたようだ。このピラミッドは3つのレベルに分かれていて、LNBのLig-Aが16チーム、TNAが20チーム、(昨年、36チームより20チームへ変さらになった。)、Lig-C (Torneo Federal) が55チームから成り立っている。

最初に決めたのはクラブの全体のレベルを上げるという目的だったが、現在では、そこから代表選手を見つけ出す目的もある。そして、リーグを創立し、現在のルールやアイデアを作った故レオン・ダビッド・ナクデール氏の存在がアルゼンチンバスケットボールの支えとなっている。故ナクデール氏は、セルヒオ氏の親友でもあり、尊敬する人でもあると語った。また現在に至までの間にアルゼンチンバスケットボールが成長してきた要因に、多くのコーチが犠牲を払いながらもリーダーシップを取ってきたことに触れ、4カ国しか成し遂げていない、オリンピック、世界選手権を制覇している国の仲間入りしたことを話した。その4カ国とは、アメリカ、ロシア、ユーゴスラビア、そしてアルゼンチンでバスケットボール大国の一つと言っても過言ではないだろう。

第2項 アルゼンチンのクラブ組織について

アルゼンチンのクラブ組織は、1930年から始まった。そして営利目的ではなく、クラブを作った人達が組織を作り、宣伝方法を考え、「バスケットボールの委員会を作るのか」「経済的によくするためにはどうするか」などを考えるところから始まっていった。毎月クォーターと呼ばれるお金を集め、そのお金で少しずつ物を増やしていったり、場所を良くしていったり、ヘッドコーチやコーチを雇う形にしていくなどの、クラブ組織を整えていった。なお、1915年ごろサッカーも含め多くのスポーツがクラブ体制を整え栄えていった。

そして、1930年頃、バスケットボールのクラブが急速に創立されていった。同じ時期に、バスケットボールに限らず様々なスポーツのクラブも作られていった。例えば、クラブでバスケットボールを強くしたいという方針になってから、スポンサー探しが始まるというスタイルあらゆるスポーツクラブで、徐々に大きくするようになったのである。また1950年アルゼンチンで開催された第1回世界選手権で優勝したことによって、多くのバスケットボールクラブが増えた。

また各地域、いくつかのクラブが集まって組織を作り、その組織で大会などを運営していくようになり、バスケットボール連盟が作られた時から、カテゴリーは国際レベルに合わせた。12歳以下がミニ、13歳、14歳がインファンテル、15歳、16歳がカデーテ、17歳、18歳がフベニルとなっており、現在では、アンダー13からアンダー19とカテゴリーを分けている形になっている。

第3項 LNBについて

故レオン・ダビッド・ナクデール氏と共に1970年頃お互いクラブのコーチであり、「高い競争力」が欠けているということを話し合い、プロリーグを創設することを考えた。競争力をつけるための、目標、基本理念は、6つあったのである。それは、1)クラブのレベルをまず挙げる 2)高いレベルの選手を作る 3)国の中全体で競争できるシステムにする（相互に影響し合う） 4)ディビジョン分け：同じレベルで対戦し競争力を増す 5)3つのレベルを設け入れ替え戦制 6)一番良い選手を見つけ代表チームを強くする、である。

1984年にプロリーグになったLNBでは、3名、19歳以下を登録しなくてはならないというルールを作り、外国人も3名登録でき、3名とも同じコートに立つことができる。この制度も素晴らしい国内の選手が成長できた1つの要因で、競争力が高い上に若い選手を育成することができた。実際、LNBのクラブでは20歳位まで育成されて、海外へプレーをしに行くという構図になった。ちなみに、19歳以下の選手は、自分のカテゴリーでもプレーをすべきだという考えから、両方のカテゴリーに出場することができるようにもした。

第10節 代表選手、NBA選手

本節は、アルゼンチン男子代表、NBA ヒューストン・ロケッツ、ルイス・スコラ選手にインタビューしたものをまとめた。

第1項 アルゼンチンで身に付けたこと

自分自身が世界で活躍することができたのは、全てのバスケットボールのベースをアルゼンチンで培った。そして、常にハードワークでプレーすることを追求することを重要視し、チームでプレーすることを多く身に付けた。またフィジカルトレーニングを若い選手の時からしたこと、海外でのフィジカルコンタクトのプレーには自信を持っている。

第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

ゴールデン世代と呼ばれる選手たちが一緒に生まれて来たことと、チームでプレーすることで、このバスケットボールというゲームを制することができることを、アルゼンチンバスケットボールが知っていることが一番ではないか。また、全てのゴールデンエイジの選手が他の国に同時に生まれたとしてもアルゼンチン代表が残した結果を世界で同じ様に残せたかは分からない。アルゼンチンにいい指導者がいることと、いいプログラムがこの国に存在していたことでアルゼンチンが強くなった。

第11節 CABB バスケットボール・ディレクター

本節は、CABB バスケットボール・ディレクター兼アルゼンチンシニア代表アシスタントコーチ兼アルゼンチン U19 代表ヘッドコーチ、エンリケ・トルカチェル氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 CABB バスケットボール・ディレクターの役割

トルカチェル氏は、1997 年よりアルゼンチンシニア代表アシスタントコーチを担当しており、2007 年より、アルゼンチンバスケットボールの世代交代を目的に、育成プロジェクトの構築責任者、運営の最高責任者に抜擢され、このポジションは、2007 年に 19 歳以下の選手を育成するために新しく設置されたポジションであり、世代交代する目的のものであると話した。そして、エンリケ氏中心となっていく育成プロジェクトは、選手の育成、選手のセレクション、代表選手育成、コーチ・審判育成の 4 つのプログラムから成り立っている。

1 つ目の選手の育成は、アルゼンチン国内での全国クラブ選手権に出場する権利を得るために、州で勝ち抜く必要があるため、まずは小さいエリアから戦っていき、最終的にアルゼンチン全体の大会に出場するという目標に繋がっている組織を作っている、子供達に刺激を与えられる環境であるという。そして、2 つのクラブのトーナメント大会と、州選抜大会があり、その中で高い競争力を保ちながら、いい選手の発掘を大会通して行う。その後いい選手を集めて集中的にキャンプを行っている。この順序で、アンダーカテゴリー代表選手への道順を作っているという。それは、シニア代表と照らし合わせても同じで、南米カップ、アメリカカップ、そして最後は世界大会という流れであり、3 年連続で大会をする機会を与えられ、ステップアップしていけるようになっている。

そして 2 つ目の育成プログラムの中で、選手のセレクション＝発掘は、大きく 2 つのプログラムがある。1 つ目は、1 年に 2 回、3 月と 12 月に 12 歳から 16 歳の身長の高い人を集めるというプログラムで、アルゼンチンの完全オリジナルのプログラムである。2007 年以前にもこのプログラムがあったが、毎年実施されていなかった。しかし、身長が高い選手を、しっかりプログラムを組み育てると、代表で活躍する選手になるという結果がでており、2007 年以降毎年実施されるようになった。ここで世界基準になる身長は、例えば、12 歳で 185 センチ以上、13 歳で 188 センチ以上、14 歳で 193 センチ以上という基準で、13 歳、14 歳の年代が、身長が伸びる時期となり人数が多くなる。しかし、このプログラムでは、例えば 13 歳の時に 188 センチあったとしても、14 歳の時に 193 センチに達していなければ、参加することはできない。今年は、12 月 12 日実施予定で、現在 50 名の登録選手がいる。この集められた選手

達で1週間合宿を行い、この間は代表のセレクションとは違い、将来性のために刺激を与えるという特徴があり、またゲームなどを通して現状を把握し、フィジカルチェックを行い、各々の選手に何が足りないのか、またどのようなセンス持っているのかなどをチェックする。そしてそれをもとに、それぞれの選手のための年間育成プログラムを作り、そのプログラムを各クラブへ渡して実施してもらう。また、定期的にこのプログラムに参加したコーチ、CABBの担当者が成長をチェックしている。もう1つの発掘プログラムが、資質を探すプログラムである。6月から11月にかけて、10地区の12歳から16歳の選手約40名を集め、3日間の合宿を行う。この時は、8名のCABBスタッフと、他の地区から5名コーチを招待して行われ、フィジカルテスト、ゲーム行う。そして、栄養学、心理学、怪我予防トレーニングなど、バスケットボールに必要なあらゆる講義を練習前後に入れ知識の教養も行い、1日に2～3時間のプログラムを午前、午後の2部制で実施する。

そして3つ目のプログラムは代表選手育成プログラムで、4つ目のプログラムは「プランデカパシダ」という国内のコーチ・審判育成のプログラムである。コーチ、審判の学校がそれぞれあり、コーチは、ENEBA、審判はEAABAである。まず、コーチはライセンスが必要で、3つのレベルに分かれており、レベル1がミニから13歳、レベル2がアンダー15、17、19と各地域、レベル3がリーグのヘッドコーチ、国際大会と分かれている。そして、毎年1回、3日間のライセンス更新クリニックがあり、こちらは参加義務となっている。もう1つは、ライセンスのレベルを上げるためのもので、年間を通しての講義があり、試験を受けて合格すると上のレベルへいける。そして審判も3つレベルがあり、ナショナルがプロリーグ、フェデラティーボが州ごと、アソシアティーボが地域ごとに分かれている。審判の場合、毎年3日間アルゼンチン全土の審判が集まりクリニックを実施し、毎年の参加義務がある。さらにもう1つ、州ごとで行っているクリニックと合わせ2つのクリニックを受講する必要がある。

この4つのプログラムは各カテゴリーに相互作用するため、トルカチェル氏がプロジェクトのトップに立ち、各カテゴリーの担当者と常にコミュニケーションをとり、アルゼンチンバスケットボールのマネジメントを行っている。

第2項 アルゼンチン選手のパスがうまい理由

12歳まではとにかく楽しんでゲームをして、競争することなくレクリエーションの感覚で様々なスキルを身につけさせ、一方、12歳からはファンダメンタルの全てを教え、どこのスペースを使ったらいいかということも教える。チームとして全体でパスをつなぐ意識を早くから持たせる。そして、クラブで16歳以下からフィジカルトレーナーを雇えないという現状もあるが、本来は、14歳から週に3回くらいフィジカルトレーニングも入れるのが理想である。

第12節 ボカジュニアズ U15～19 コーチ

本節は、ボカジュニアズ U15-19 コーチ兼ボカジュニアズ・プロチーム・3番目のアシスタントコーチ、ロナルド・ゴドバ氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 アルゼンチンバスケットボールが強い理由

1950年に軍事政権に代わった際、だいたい70名くらいの選手がプロでプレーできなくなったと話し、その時に、多くのレベルの高い選手達がいなくなってしまった事によって、小さい子達が上手な選手達を見る事ができなくなり、それで国内での競争がなくなり、レベルが下がっていった。この約44年間、国内での競争をすることが減少し、プロフェッショナルリズムを追及できず、選手、コーチも、世界のレベルについていくことができなかった。

その後80年代にオリンピックモスクワ大会にアルゼンチンは参加したが、アメリカとの関係があり、ボイコットをして、参加しなかった過去がある。

44年間ずっとオリンピックに出たいと思い続けてはいたが、1984年、LNBが創立されたこ

とがアルゼンチンバスケットボールの分岐点となり、選手達やヘッドコーチのレベルを上げる事を目的に構成され、継続的に国内で競争が行われたことにより、ヘッドコーチ達は自身で学べなければならない環境に置かれた形となった。コーチ達が切磋琢磨し、準備したものが優位にたったという価値観を生み、観察し、ヨーロッパにも行かなければならない雰囲気になっていった。

それによって、世界的にみても、アルゼンチンの指導者のレベルはとて高くなり、選手達の成長に繋がった。ただ、指導者達の成長の背景には、とてつもない努力があり、ヨーロッパへ行く資金の援助はなく自費で学ぶしかなかったため、車を売ってまでも資金をやり繰りし、ヨーロッパへ勉強に行っていた。現在でも同じように学び、さらに指導者の育成としてクリニックを受け、ライセンスの更新が義務化されている。なお、コーチの更新料 200 ドルも自費払いとなっている。

第 2 項 クラブでの継続指導とコーチ兼任のプラス作用

ボカジュニアズのような大型のクラブでは、それぞれのカテゴリーにコーチが付き、さらにトップのコーチなどが兼任している。ゴドバ氏は、ボカジュニアズの育成のコーチとして 20 年以上に渡り、継続的な指導をクラブから任せられているため継続的な育成指導ができ、これまで試行錯誤で自身のコーチングを培ってきている。

また、トップの戦術は、今の U15-19 の育成年代においてはマネができないと認識しており、戦術に関してはコーチがデザインしている。それぞれの選手の違いによって戦術も差がでくため、特に育成世代では、戦術に頼るのではなく選手がチームでプレーすることに重点を置き、単純な戦術の中で駆け引きを覚えることが重要である。なお、育成選手がトップのチームに引き上げられる時に対応できるよう考えている。

そして、ボカジュニアズ・トップチームのヘッドコーチサンチェス氏とは、若手育成の良案、問題点を話し合い、引き上げる選手の情報を共有するために、常にコンタクトを取ることができるよう 3 人目のトップチームのアシスタントコーチとしても役割を遂行している。コミュニケーションがコーチ達のレベルを上げ、それぞれの知恵となっている。

第 1 3 節 ESPN 記者

本節では、ESPN 記者、バスケットボール歴史書の著者・アルベルト・ペレツ氏にインタビューしたものをまとめた。

第 1 項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

ペレツ氏は、1974 年からアルゼンチンバスケットボールを追い求めている。アルゼンチンは、サッカーが一番の国で、「1 にサッカー、2 サッカー、3、4、5 もサッカーで、6、7、8 までサッカーで次にバスケットボール」である。

1950 年の第 1 回世界選手権、母国開催で優勝していて、2004 年アテネオリンピックで優勝していることは、50 年に一度成功を収められる国であると証明している。しかし、1957 年軍事政権に代わり、35 名のプロ選手がプレーできなくなり、その後アルゼンチンバスケットボールは、アマチュア、もしくはセミプロフェッショナルのスポーツとして歩むことになった。その軍事政権の影響を受けたことにより、国内バスケットボールの競争力がなくなりアルゼンチンバスケットボールが低迷することになった。それを見かねた故レオン・ダビッド・ナクデル氏らが 1984 年にプロリーグを設立させたという経緯である。このプロリーグがアルゼンチンバスケットボールの成功の一步である。LNB は、強いフィジカルของเกมが展開され、世界基準で行われている。シーズンは、レギュラーシーズン 44 試合が開催され、プレーオフがある。シーズン途中に行われる国内トーナメントと合わせ国内のプロチームが戦う試合数合計 60 試合くらいである。そして、強豪だけが参加する南アメリカ、アメリカ大陸でのクラブ選手

権があることを考えれば一番多く試合するクラブで約70試合程度である。通常LNBの試合は、金曜日と日曜日に試合が行われ、月～木曜日、2部練習で選手達がボールに触れていることが多い。クラブでの若い選手の育成は、アルゼンチンの特徴で10～20歳でファンダメンタルを覚え世界で戦えるレベルの選手となり、欧米に出向きさらに成長するという構図である。アメリカの大学に行く選手や、イタリアやスペインのプロチームに引き抜かれるケースが非常に多くなったのもアルゼンチンバスケットボールが成長できた要因である。1996年前後の若い代表が活躍し、その後オリンピック、世界選手権で活躍すると多くのスカウトがアルゼンチンの選手に目をつけ、イタリア、スペインの2重国籍をもつ選手に転機が訪れたのである。ヨーロッパの多くのプロフェッショナルリーグでの外国人の扱いが変さらになり、二重国籍を持つアルゼンチン選手が、20歳を超えた有能な選手に活躍の場がさらに増えたのだ。その当時、イタリア、スペインリーグのレベルは非常に高く、アルゼンチン選手にとって、さらなるレベルアップの場として好都合であった。また、ジノビリ選手を例に出すが、イタリアリーグで活躍し優勝をした後に、NBAがドラフトして世界的プレーヤーに育った。多くのアルゼンチン選手がジノビリ選手の辿った道を目指し、選手が大きな上達を得ることができ、アルゼンチン代表が世界の舞台で結果を出すことになったとも言える。

44年間オリンピックに参加できなかったが、5～8人のゴールデンエイジと言われる選手が生まれアルゼンチンバスケットボールの歴史は変わった。それは、運が良かったとも言えるし、それぞれのポジションで世界レベルの選手が存在したことは驚きである。しかしゴールデン世代の存在だけで世界の王座についたのではなく、アルゼンチンバスケットボールの育成プログラム、レベルの高いコーチが存在したことが素晴らしかったことを世界に証明したのである。

第2項 アルゼンチン代表について

44年ぶりに1996年アトランタオリンピックに出場した後、劇的に世界大会で結果を残した。2002年のインディアナポリス世界選手権では、銀メダル、2004年アテネオリンピックでは金メダル、2008年北京オリンピック銅メダルなどである。これらの成果は、1998年世界選手権以降にラマス氏が率いたゴールデン世代が残してきた結果である。2011年9月にアメリカ大陸予選で優勝したアルゼンチン代表は、ラマス氏が率いてきたゴールデン世代の選手達であり、現在、平均年齢32歳を超え世界と比べても年齢層が高くなってきている。そのためアルゼンチンバスケットボールでは世代交代がささやかれている。つまりサイクルの移行をラマス氏が任せられているのである。

このアメリカ大陸予選でラマスヘッドコーチが選択し決断した12名に悲観的な意見をペレツ氏は持っている。それは、ロンドンオリンピック出場がかかっていたための選択であったというが、若い選手をいれるべきであったという見方である。それは、ロンドンオリンピックにあまり良い見込みがないという見解だからである。世界の高いフィジカルに2011年の代表メンバー構成ではもたないという分析からである。過密日程に加え、ロンドンオリンピック時で33歳の平均年齢では、とてもフィジカル的に持たない。また世界のバスケットボールで3大会オリンピックに同じ選手達が出場しいい結果を残したチームはない。しかし非常に難しいことでありえないが、期待する部分も存在する。それは、フィジカルでの問題をアルゼンチンバスケットボールが培ったインテリジェンスでカバーできるかもしれないという希望的観測である。2011年9月にアメリカ大陸プレオリンピックでの優勝時に、ジノビリ選手他、足が上がりな伊選手がいたことが現状である。

近年、19歳以下の世界大会でアルゼンチンが活躍している。本年度4位に入り次のアルゼンチン代表の世代交代を待つ選手がいることを忘れてはいけない。

第14節 代表アシスタントコーチ

本節は、アルゼンチン男子シニア代表・ネストロ・ガルシア氏にインタビューしたものをま

とめた。

第1項 海外でのナショナルチームの代表経験

ガルシア氏は、海外でのナショナルチームの代表経験を高く評価され代表チームにアシスタントコーチとして招集された。24歳の時にプロのコーチになり、プエルトリコ代表コーチをし、28歳でアルゼンチンに戻り、LNBで3度ファイナルを経験し、そのうち1回は優勝の経験がある。その後、ベネズエラのクラブコーチ、ウルグアイのクラブ、ブラジルのクラブ、アラブ首長国連邦のクラブコーチの経験がある。その中で、ベネズエラとプエルトリコでは代表コーチを務めた経験がある。すべてのヘッドコーチの経験の中で、アルゼンチンで3チーム、ベネズエラで3チーム、ウルグアイで1チーム、プエルトリコで1チーム、メキシコで1チーム、アラブで1チーム、計10チームでファイナルまで行った実績があり、この実績を現在のアルゼンチン代表ラマスヘッドコーチに認められ、現在、アルゼンチン代表アシスタントコーチを務めることになった。世界で戦うには、様々な情報が役に立ち、現代バスケットボールが情報戦だということを理解した上での抜擢である。またラマス氏より年齢は高いが、国のために戦うということにポジションは関係なく、光栄であるとしている。

第2項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由の1つに、国土全体でバスケットボールが行われるようになったということである。その要因にLNBの創立がまず挙げられる。アルゼンチンは、4千万人の人口であり多くなく、地図で示されるように、どこの国に行くにもとても遠い場所に国が位置しているため、その環境の中でアルゼンチンバスケットボールを強くするためには、アルゼンチン全土でバスケットボールが行われることが必要不可欠であった。少ない人口の中でまずバスケットボール人口を増やし、アルゼンチンのどこの地域にいい選手が存在しているのか、背の高い選手がいるのかなどの情報を迅速に得ることが重要であったからである。そして、良い選手達を確実に育成していける環境づくりを持つ必要があった。そして、1984年、リーグが創立されたことにより、アルゼンチンバスケットボールが下から上へ上がっていくピラミッド型になり、より明確な目標ができたことが大きな要因である。情報の早期伝達が可能となり、その結果アルゼンチンバスケットボールがさらに強化するためにやり易くなった。

それを象徴する事実、2004年の北京オリンピックで金メダルを獲得した選手たちが、1つのエリアから生まれていない選手たちで構成されたチームであったことである。アルゼンチンで1番人口の多いブエノスアイレス州出身の選手は、スコラ選手たった1人であった。ガルシア氏の出身バイアブランカ州は、人口25万人の中、3名の代表選手を輩出している。アルゼンチン全土にバスケットボールが広まっていることが代表チーム選手たちの出身地で分かる。

アルゼンチンバスケットボールの中でガルシア氏にとって4つ大事なことがある。それは強さでもあり、秘密とも言える。1つ目は、育成年代におけるクラブのディビジョンである。そして2つ目が、国内での戦う意識が高いことが上げられる。それは、アルゼンチンの歴史と文化にも関係があり、アルゼンチンが過去に何度も経済危機に陥ってきたことにある。この経済危機の度にスポーツによって人々が強く生きる必要があり、復興していくことを何度も経験している。国の経済にスポーツが左右されてきたことで、国民性ができ上がっているため、もし試合に負けた場合、翌日プライベートの時間、例えばスーパーに行った時でも、かなりの罵声を浴びせられ、ののしられるという文化がある。選手達はもちろんそれが嫌であるために、歯を食いしばり負けまいと必死で頑張っている。そういう強いメンタリティと高い競争力を維持することが必要不可欠である。他国とこの部分を比較すると、ブラジルはもう少し穏やかだという印象がある。

3つ目が、この国にはいい指導者がそれぞれのカテゴリーにいることである。指導者がどう養成されているかということ、コーチライセンスがまず1つ目のハードルとしてある。そしてそ

れを保持し続けるために講義を毎年受けなければならない、そして自身で学ぶ姿勢が勝つために、強くなるために必要だということが自然に身に付いているのかもしれない。

ガルシア氏の世代のコーチは、若くしてコーチになれたという運もあり、若さを武器にコーチになった当初、1 軍のチームが自分の地域に来た時に、そのヘッドコーチが出てくるのをひたすら待って質問をした。1994 年のトロント世界選手権の際、リーグのほとんどのヘッドコーチと一緒にその大会を見に行き、このチームはどういう攻め方、構成をするのかなど、皆で情報交換をしながら試合を見るなどしてきた。常に頭を疑問でいっぱいにしてバスケットボールのことばかりを考えるなど、情熱を持ったコーチがとても多かった。

4 つ目が、20 人の凄い選手が同時期に出てきたことである。きっかけはリーグ創立にあるのかもしれないが、現在、その 20 人に追いつくグループはまだ出てきてはいないという。例えば過去にサッカーでマラドーナがいたけれども、凄い時間がかかってメッシが出て、次にいつそのレベルの選手が出てくるか分からないという状況に似ている。アルゼンチンが国として全力で選手を育成するだけではなく、成長したい、もっと上のリーグに行きたい、海外などに行きたい、世界で勝ちたいと思える環境にしなければいけない。そして、その環境に情熱を合致することがとても重要である。

アルゼンチンの指導者が素晴らしい能力をもった選手を手にした時にいつも心がけていることがある。それは、「才能」という言葉を良く使うが、「才能」というものは、背が高い、速く走る、身体能力が高い、メンタル面が強いなどでもない。それらは、単なるその人の特質、特徴であり、才能を持ったタレントとは、特質、特徴を持っていながら、なおかつ情熱と一緒にそれをコートで見せることのできる選手の事である。それはヘッドコーチでも、コーチでも同じで、その情熱を見せることができる人が、アルゼンチンでは、タレント性を持っている。

第 3 項 アルゼンチン代表について

現在のアルゼンチン代表スタッフは、ヘッドコーチ 1 名、アシスタントコーチ 2 名、フィジカルコーチ 1 名、医者 1 名、トレーナー 2 名から成り立っている。

選手の選出は、スタッフ全員で 15 名を選ぶという。その際のアルゼンチンの特徴としては、代表へ選手を送り出すこと、代表選手でけが人が出た時に突然の召集することなどに対して、全リーグがとても協力的で、戦術に対しての批判があったとしても、全てのコーチが高い志、プライドを持って世界を見て代表を応援している。

そして代表の練習が始まる前の準備にとっても力を入れており、準備の方法は、キャンプが始まる前に会議を行い、それぞれの選手のフィジカルトレーニングプログラムを用意し、キャンプまでにそれを各選手に実施させる。そして大会までの 45 日間で全体の練習を行う。

練習場所は、床の良さと、警備の良さなどから、ウニョアレイという所で行われる。練習は 2 部練で、4 日練習して 1 日休むというサイクルをとっている。1 日の流れは、8 時半にスタッフが集まってミーティングを行い、11 時から練習が始まる。午前中の練習は 2 時間で、1 つの事を 5 分やって、8 分違うことやり、10 分違うことやって、20 分のゲームを行う。そして午後 6 時から始まり、朝の様子を見て考え、実際の状況に見合った練習をもっと入れるべきなのか等、その日の練習ごとで考えている。キャンプが進むごとに練習の強度は本当の試合並みに激しくなっていく。

ルイス・スコラの話で、選手皆がプロフェッショナルだという一例であるが、膝の手術をした後、代表準備期間に入り「手術したからって気にしないでほしい。私の状況に合わせず、強く練習がしたい」とコーチに伝えた。その理由が、「今ここで慎重にやって本番の時に何かあったら方が嫌だから最初から強くやりたい」とスコラ選手はコーチに申し出たのだ。このことについて、アルゼンチン代表の強さの秘密がここにもある。選手がプロフェッショナルリズムを持ち合わせていて、怪我であろうがやるからにはやる。メンバーに選ばれ、国を背負っている責任を果たすことを各々がもっているのだ。そして、確かなプライドを持ち合わせている。

第4項 リーグについて

LNB リーガ A の 16 チームのコーチが全てアルゼンチン人だということは、ガルシア氏にとっては当たり前のことである。外国人コーチが LNB のコーチをするためには、いくつかの条件が必要である。

1) NBA でその人は指揮していなければいけない、2) アメリカの大学でも指揮していなければいけない、3) 他国の代表ヘッドコーチを指揮していなければいけない、4) 世界的なライセンスを持っていなければいけない、5) 他国のクラブで優勝していなければならない、である。

リーグのコーチ全体の会議で、1990 年後半にイタリアのリーグを参考に決めたという。それは、ハードルを高くし、他国を意識しアルゼンチンが世界を意識し、全員が高い意志、志を持っている証であり、指導者がレベルアップするための施策である。

第5項 審判について

アルゼンチンの審判は、世界基準に合わせ、今一番フィジカル的に強いプレーをさせているという。コンタクトプレーを推奨している。なぜなら、ヨーロッパ他強豪国が世界の舞台でとても強いフィジカルを持ってプレーしているからである。バスケットボールは格闘技の要素がとて多く、コンタクトをしてプレーをする必要があるスポーツだと考えている。子供たちはトップのリーグを見て、どういうプレーをすべきというのを目のあたりにしている。審判がそのコンタクトプレーを許しているのは、当たり前のことである。

そして、高いレベルを保つため、リーグが始まる前に審判とコーチが会議をし、またルールが変わった時も、どのような基準を持つかなど話し合われる。尚かつ、大きなミスをした場合、数試合ジャッジできない罰則もあるほど、とても厳しく委員会でチェックされている。その委員会では、試合が終わった後に、録画されたフィルムを一つ審判委員会に渡され、直後にチェックする。ガルシア氏が経験してきたウルグアイ、メキシコ、ブラジル、ベネズエラでは、国内と国際大会では審査基準に差があり、アルゼンチンの審判のレベルの高さを実感した。

第6項 アルゼンチンバスケットボールと他国の相違点

アルゼンチンバスケットボールでは、技術より先に空間認識力が重要視され、それぞれが判断するバスケットボールが存在している。それは、各々の選手がゲームの状況を判断するチームがあるとするということであり、コーチのアイデアを持った選手が増えたという状況があると考え、良いか悪いかを考えると一目瞭然であろう。だからこそ早い段階から、状況判断とその状況を解決するための知識と技術を教えていくというのがアルゼンチンのやり方である。アルゼンチンの多くのコーチ達は状況、シチュエーションを与え、実際にゲームに必要なシチュエーションを多数練習で作っていくのである。全体を包括するという考えであり、全員がボール触るということでの的を絞らせないことを重要視している。だからこそ選手自身もチームプレーに喜んで参加する。そして、その中で状況判断することがゲームを制することを知識として持っているから、簡単にボールを触らせないディフェンスも存在し、多く練習することになる。強度の高いディフェンス練習をすることは、それが実際の状況に近くなり、特にそのパスの巧さというのは、何かパスの特別な技術を教えているわけではなく、その状況を選手自らが解決することが必要とされ、自然に強さ・巧さが身に付いていくのである。本物の試合の状況を作り出し、さらにそれを「楽しみながら行う」ということを重要視していることが大きく他国と違う点である。

その次に、相手に思い通りにやらせない、1 点でも勝つという競争心の練習が必要だと考えている。それは全部シチュエーションで、本物の試合でのシミュレーションである。例えば違うポイントを与え、それぞれのポジション全部の要素に価値＝ポイントを入れることもその 1 つの方法であり、勝てば連続してオフェンスを行えるという練習を多く取り入れている。これは、アルゼンチンバスケットボールのどのクラブでも行っている要素である。

1 人で、1 つの場所を歩く、ボールを使う、縄跳びをする、階段を昇るなどは、小さい年代

で行う行動だが、1つのことを4人の中でやれば逆に邪魔な時が存在し、バスケットボールでは味方の5人、邪魔する5人の相手がいる。だからこそ、スペース感覚＝空間認識力は、この時期に感覚を掴み、学ぶ必要がある。もちろんバスケットボールでは、多くの技術的な要素を指導しなければならない。それは、シュートにいくタイミング、ボールを持ってない時にどのように動くのか、どういうスペースを使い、埋めるのか、アウトサイドの選手がボールを展開した時に、他の選手がどのようにスペースを取っていればいいのか、ドライブインしたときにスペースをどのように閉めたり開けたりするのか、一つのボールがある場所に近づかないなど多くのことを教えていく必要がある。さらに、スペース感覚＝空間認識力についてわかっていなければ、低い年代で技術を習得することは難しいという考え方をアルゼンチンにコーチ達は持っている。そして、これを指導することは忍耐力を持って指導するべきで、トレーニングさせる方向性を持たせてやらないと選手は育たないという考えを持つべきである。

第15節 ボカジュニアズ・ヘッドコーチ

本節は、ボカジュニアズ・プロチーム・ヘッドコーチ、オスカー・サンチェス氏にインタビューしたものをまとめた。

第1項 アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由

アルゼンチン人は、中間くらいで体系的に恵まれていないが、強い気持ちを持っており、それをプレーに生かすことができる。また、アルゼンチンでバスケットボールは、サッカーに次いで2番目に人気があるスポーツで、子供のモデルになるようないい選手が沢山生まれたことによって、その選手達を目標に刺激を受け、成長することができた。そして海外との比較としては、例えばNBAでは、1対1や2対2が中心の攻めのスタイルになっているが、アルゼンチンはチームプレーを重視し、チームプレーで戦っていける国なので、それも強い理由である。

連盟の体制としては、過去にユーゴスラビアが勉強のためロシアやアメリカにコーチを送ったように、アルゼンチンでもコーチを海外へ積極的に送り、国内ではクリニックをするなどコーチの育成に力を入れている。選手も同じく海外へ送って育成を図っているが、若い段階で、体格を重視して選手を探すことに力を入れるようになった。さらに、ゴールデンエイジといわれるスコラ、ジノビリ、ノシオニ、のような選手が同時期に、そしてオベルトは5番、スコラは4番パワーフォワード、サンチェスはガードという風に、それぞれ違うポジションの選手達が偶然生まれてきたことも強くなった理由に挙げられる。

第2項 バイアブランカについて

まず、バイアブランカがバスケットボールのメッカになったきっかけが、60年代に3人国際的な選手が生まれたからである。現在でもバイアブランカ出身の代表選手が多いが、そういう有名な選手達が国際大会で活躍しているのを、子供と親と一緒に見に行き、そのことによって子供達が皆バスケットボールをしたがり、そこからいい選手が生まれ、いいヘッドコーチが生まれていった。そして、その中でも有名な、サンチェス氏がプロへと送り出したエマニエル・ジノビリ選手は、バイアブランカ出身の選手とし、母親とも親交が深い。また、ジノビリ3兄弟を小さい時から見てきた中でもエマニエル・ジノビリ選手は特別で17歳の時にサンチェス氏がヘッドコーチとして指導した。そして、ジノビリのような選手が生まれた理由として、毎日バスケットボールをする家庭環境があったことと、アルゼンチンのクラブでバスケットボール教育を受けられたことである。また、ジノビリ選手自身、人一倍負けん気が強く、ずる賢く、毎日のように競争があり、家の椅子をかき分けてドリブル練習をしていた。さらにジノビリ選手は、才能が70%、努力が30%の特徴を持ち、アルゼンチンのクラブを経て、イタリアのローニャに行ったことで、さらに開花した。

第3項 アルゼンチンバスケットボールの今後の課題

現在のアルゼンチンシニア代表選手は30代の選手が多く、次世代の選手が育っていない現状がある。その1つの理由として、以前、代表側のスタッフと、育成年代側のスタッフとの間に衝突があり、問題が多かった。しかし現在では、その関係が戻り、育成側、代表側で1つのプランを作り、それに向けて準備や育成をし、そして元々才能のある選手を探すのではなく、体格的に有利な選手を見つけ出して、若い時に育成していくことに力を入れ、今現在の代表選手たちに代わる選手を育てている。

第4章 アルゼンチンバスケットボールから学ぶこと

本章では、インタビュー調査結果を「クラブ」、「リーグ」、「連盟」ごとの施策に分類し、まとめた。

第1節 クラブの選手育成強化

第1項 クラブでの年代別育成

表9は、アルゼンチンバスケットボールのクラブ形態を示しているが、プレミニ、ミニ、プレ・インファンテル、インファンテル、カデーテ、アベニルと19歳まで6つのカテゴリーに分かれており、クラブができた当初からそれぞれ上記のような呼称で呼ばれている。また、このカテゴリー分けは、FIBAの国際大会のカテゴリーに対応させてある。

表9 アルゼンチンバスケットボールのクラブ形態

クラブ組織 (年齢)	人数	FIBA	ARGクラブ 呼称	ルール (リングの高さ、ボールのサイズ他)	育成の呼び方と 枠組み
8 - 9歳	12名		プレ・ミニ	265cm / 5号	Mini ミニ
10 - 11歳	12名		ミニ	265cm / 5号	
12 - 13歳	12名	U - 13	プレ・ インファンテル	305cm / 5号	
14 - 15歳	12名 (支配下対象)	U - 15	インファンテル	305cm / 7号 (LNB対象選手)	Juvenil フベニル
16 - 17歳	12名 (支配下対象)	U - 17	カデーテ	305cm / 7号 (LNB対象選手)	
18 - 19歳	12名 (支配下対象)	U - 19	アベニル	305cm / 7号 (LNB対象選手)	
20 - 21歳	12名 (支配下対象)	U - 21 (U - 23)		305cm / 7号	
トップ	12名			3名19歳以下 9名(3~1名まで外国籍)	Club Colegiales カレッジクラブ プロ Liga - A~C

各年代別チームには12名ずつ所属しており、一つのクラブに約100名の選手がいる。8歳以下の選手は保護者の同意とともにクラブ入会することができ、13歳までの子供は、望めばいつでもクラブに入会することができる。プレミニとミニには、人数が入りきれないケースも存在するが、その際は、それぞれのカテゴリー内でA、Bの2チームに分けて運営されている。

アルゼンチンバスケットボールのクラブは、地域の人々による協力で成り立っているソシオ制度により運営されているが、選手としてクラブに入るという事はソシオ制度の会員になることでもあり、プレーするだけでなくクラブを支えている。

さらに、特徴的なのはアルゼンチンバスケットボールで日本発祥といわれるミニバスケットボールが存在し、プレミニ、ミニのカテゴリーでは265cmのリングの高さで5号のボールで

行われ、プレ・インファンテルでは、305cm のリングを採用し、5 号ボールを使用する。成長に合わせた年代別のルール（リングの高さ、ボールの大きさ）を設定しているのが特徴的だ。しかしベーシックなルールは変わらず、日本のようなバックパス・ルールなどの特別ルールは存在しない。

第 2 項 クラブの環境

ジノビリのような選手が生まれた理由としてサンチェス氏は、毎日バスケットボールをする家庭環境があったことと、クラブでバスケットボール教育を受けられたことをの 2 点挙げている。この 2 つはその後の更なる成長には不可欠な要因である。

ジノビリ選手はアルゼンチンのクラブを経て、イタリアのボローニャに行った時に、爆発的に成長したが、その成長も上記の 2 つの要因がなければなかった。

学校教育とクラブでのスポーツ活動は別物であり、学校に行った後、クラブの練習に参加するというのが通常である。大きなクラブなどに移動するときは、転校などの処置がされ本人にとって一番いい道が選択できるようにしている。また、学校でのスポーツは、リクリエーションに近い形で本格的にスポーツをする人以外の人が楽しんで行う場所がある。

また、大きいクラブでは、毎年 12 月に地方から 15 歳から 19 歳までの世代で 30～40 人を集め、トライアウト（選手を獲得するための実技試験）を行いリクルートする。しかしボカジュニアズの場合、宿泊施設の収容可能人数に制限があり、バスケットボールは 8 名までしか地方選手を選ぶことができない。（サッカーは約 200 名収容可能）トライアウトでは、コーディネーターするスタッフが 4 名おり、1 人総括の人を中心に、ユース代表ヘッドコーチにも来てもらい話し合いが行われている。ユースのヘッドコーチがトライアウトで意見を言うのは珍しく、ボカジュニアズのスタイルである。

第 3 項 年代別のトレーニング

世界各国と比べて体格が劣るアルゼンチンでは、フィジカルトレーニングの強化に力を入れている。ほとんどのクラブではフィジカルトレーニングを、基本的に 15 歳になる年から始めている。また 3 月から 10 月のシーズンが始まる前に、ただ、外を走るなど、長距離を走る練習はせず、フィジカルトレーニングやコートの中でするコーディネーショントレーニングを多く取り入れ身体作りに力を入れている。ボカジュニアズでは 15 歳までは自重トレーニングで 16 歳から機械を使うウェイトトレーニングを始めるなど、クラブによって特徴がある。また、育成部門責任者のトカチェル氏は、14 歳になる年からフィジカルトレーニングを採用すべきだ証言している。

表 10 は、アルゼンチンと日本の育成年代の平均身長を示しているが、アルゼンチンの育成世代の平均身長が日本と比較するとさほど変わらないことが分かるが、長年に渡るクラブ経験とフィジカルテストなどの科学的検知から、アルゼンチンバスケットボールがトップレベルで勝つためには、この時期からフィジカルトレーニングを始めることが必須であるとトカチェル氏は証言している。それ故に、今回調査したほとんどのクラブがインファンテルのカテゴリーより上の年代、つまり 15 歳になる年の年代からフィジカルコーチが必ず帯同し、各クラブが、フィジカルトレーニングをフィジカルコーチが責任を持つシステムになっている。

表 10 アルゼンチン育成年代の平均身長

【男】：身長(cm)									
歳	10	11	12	13	14	15	16	17	18
日本(前年+)	0	6.2	7.4	5.3	5.4	3.1	1.7	0.8	0.3
日本身長	138.8	145.0	152.4	159.7	165.1	168.2	169.9	170.7	171.0
アルゼンチン身長	135.9	140.2	145.2	151.3	158.6	164.7	169.2	171.8	172.6
アルゼンチン(前年+)	0	4.3	5	6.1	7.3	6.1	4.5	2.6	0.8

第4項 「飛び級」の制度と試合数

8歳から13歳までのそれぞれのカテゴリーでは、楽しさを追求し、誰もが選手としてクラブに参加できる。また、優秀な選手はどんどん上のカテゴリーへ進むことができる。

表11はアルゼンチンバスケットボールのクラブ形態を示しているが、「飛び級」する際にはコーチと本人と家族の間で話し合いが必ず行われる。その合意によって、一つ上のカテゴリーで練習、試合をすることができるが、本人の年齢カテゴリーでも基本的には練習・試合をする。シャンルーカ選手とアニュエ選手は二人とも将来はボカジュニアのプロバスケットボール選手を目指しているが、シャンルーカ選手(13歳)は、飛び級して14-15歳のクラブと、13歳のクラブの二つのチームでプレーし、「上手くなるには多く練習する必要がある」と語っている。また、飛び級によるボールの大きさの変化について何も問題がないと証言した。この飛び級の制度は、ある意味で「エリート教育」と言え、「質」、「強度」、「量」の三つの要素で負荷が掛けられ、より高い優秀な選手を輩出するためのシステムである。

表 11 アルゼンチンバスケットボールのクラブ形態 2

クラブ組織 (年齢)	Staff	練習頻度	試合	飛び級
8 - 9歳	HC 1 AC 1	火・水・金 1.5時間	日:1game (年間40game)	
10 - 11歳		火・水・金 1.5時間	日:1game (年間40game)	
12 - 13歳 (U - 13)		火・水・金 1.5時間	日:1game (年間40game)	
14 - 15歳 (U - 15)	HC 1 AC 1 Physical 1 Trainer 1	月～金 2-3時間	日:2game (週末1game)	① セレクション ② フィジカル・トレーニング
16 - 17歳 (U - 17)		月～金 2-3時間	日:2game (週末1game)	飛び級する (コーチと家族本人と 話し合い決定)させるが 自分のカテゴリーでの 練習は基本的に行う。
18 - 19歳 (U - 19)		月～金 2-3時間	日:2game (週末1game)	
20 - 21歳 (U - 21,U - 23)		月～金 2-3時間	日:2game (週末1game)	
トップ	HC,AC,AC (U15 - 19HC) Physical,Trainer, Doctor,用具係	準備期と試合期と 違うが基本的 :AM/PMの2回 (2-3h)	週:2-3game リーグ:44+Playoff +トーナメント	

また、年間合計試合数は、ミニのカテゴリー（プレミニ、ミニ、プレ・インファンテル）で約40試合近くとされ、飛び級で二つのカテゴリーでプレーしている選手は必然的に多くなる。そのため、練習と試合のスケジュール、過度なトレーニング等にならないようコーチがコミュニケーションを取り配慮されている他、練習・試合が重ならないようにも工夫している。また15歳以上になると試合数が増え、毎週2試合と練習試合等を含めて年間計約80試合くらいになる。

第5項 15歳からの選手保有制度とセレクション

アルゼンチンバスケットボール代表ヘッドコーチであるジュリオ・ラマス氏によると、選手は、15～19歳頃からクラブで育成・強化され、熟練した状況で最終的にヨーロッパに行くという構造がアルゼンチンバスケットボールにはでき上がっている。これはしっかりとしたクラブ組織が確立しているからであるとも話した。クラブでは、15歳になる歳の選手から振るいに掛けられる。表11の中央に引かれているラインが、15歳になる選手がセレクションされるというラインである。クラブでのそれぞれカテゴリー分けて、各12名とされているため、人数の多いミニのカテゴリーから、14-15歳のカテゴリーに変わる時、人数が削られるケースが多い。

またアンダー15以上から21以下の選手の48名のうち15名がクラブの仮契約の選手となり、他の大きなクラブから引き抜かれる可能性が生じる。引抜きがあった場合は、移籍金が生じ、ブエノスアイレス州では、85%が現在所属のクラブ、15%がブエノスアイレス・バスケットボール連盟に支払われるシステムである。ブエノスアイレス州では不公平をなくすため今年から取り分の割合が修正された。

第6項 特徴的なクラブでの育成方法

ミニのカテゴリー（プレミニ、ミニ、プレ・インファンテル）では、練習の中に基礎技術に関する要素を1つは絶対に入れるようにしているとガリノ氏は語る。しかし、技術ばかりの練習をしているわけではないというのが特徴的な育成方法なのだ。それは、ボールを持ってからの動きではなく、周りの選手がどのようにスペースを使っているのかを見ながらプレーする事がまず大事である。自分の味方、ディフェンスを見ながら、そしてフィジカルコンタクトを受けながらプレーして行く事で個人の技術はついてくるものだという理解を多くのコーチがもっている。

そして状況判断や空間認識力を持たす事がアルゼンチンバスケットボールの特有の部分であり、2対2、3対3のシチュエーションの練習をよく使う。また、アルゼンチンの子供たちは、勝つという意識が優れているが、勝つことが全てという考え方にならないことをミニのカテゴリーでは気を付けていると話す。ボールを動かし、カットする、パッシングゲームという単純なことができることを、一番の最終目標としている。さらに、15-19歳のアンダーカテゴリーを指導するゴトバ氏によると1ヶ月で4000通りのシチュエーションを練習で作る事でバスケットボールの知能指数を高め、空間認識力が備わり選手がトップレベルで活躍するための育成が可能であるとしている。

第7項 19歳以下3選手の登録

アルゼンチンで1985年にLNBプロリーグが創設された際、トップのプロチームに19歳以下の選手を3名登録しなくてはならないというルールを作った。外国人もリーガAは、3名登録でき、3名とも同じコートに立つことができる（TNAは、外国人1名登録）。この制度は、19歳以下の選手が育成から強化に変わる時期を示しており、クラブでの選手育成を目論むものとなった。また20歳からプロ選手になるためには、12人中、外国人選手を除く6人のプロ契約の枠を目指すことになる。狭き門となり、競争力がさらに増す状況を示している。またリーグ創設を手伝ったセルヒオ氏は、国内の選手が成長できた1つの要因に、クラブでの育成を重視する制度であり、育成に充分に力を注ぐことができるシステムにあると言及した。

第2節 クラブのコーチ養成

第1項 「一貫指導」の責任感とクラブによる育成

クラブでの若い選手の育成は、アルゼンチンの特徴で10~20歳で基礎技術を備え、世界基準の熟練した選手として成長をさせたいという責任感があるとアレキハンドロ・ペレス氏はいう。世界で戦えるレベルの高い選手を育成し、その若い選手達が欧米に挑戦し、さらに成長する。アメリカの大学に行く選手、イタリアやスペインのプロチームに引き抜かれるケースが非常に多くなったのも、アルゼンチンバスケットボールがクラブ内での育成に成功した要因であり、アルゼンチンが「一貫指導」に成功したことを裏付ける。一貫指導とは、発掘から育成、そして強化するまでのすべてに関わる指導体制をいい、アルゼンチンバスケットボールではクラブでこの「一貫指導」が行われている。そして、これを支えるのが発掘、育成を支えるそのクラブに長年属しているコーチである。

ユレヒアレスクラブは、小さいバスケットボールクラブでトップチームはあるが、プロは存在しない。「一貫指導」をするために、それぞれのカテゴリーのヘッドコーチ達が、全員自費でユーゴスラビアに学びに行っている。コーチ力を向上するために自身がその責任を全うするために学ぶことが必要だとヴィタリ氏は語る。アルゼンチンクラブのコーチ達の積み重ねが、現在のLNB16のクラブヘッドコーチが全てアルゼンチン人だという事実に至っている。またその事実が、アルゼンチン代表の強さに繋がっているとバリオス氏（ブエノスアイレス州・バスケットボール連盟理事）は語る。

第2項 継続的な指導とコーチ兼任でのプラス作用

コーチの数は、それぞれのクラブの大きさによって異なり、ユレヒアクラブのようなバスケットボールしかない小さいクラブ（トップがプロチームでないクラブ）でのコーチ陣は4名程度であり、プロの体育の先生がフィジカルコーチをしたり、スポーツサイコロジ専門の人が指導をしたり、それぞれのクラブ選手だった人がコーチをしたり、アシスタントコーチがフィジカルコーチを兼任したりし、首脳陣が話し合い決めている。ユレヒアクラブのガリノ氏はバスケットボールのコーチの他にコンピュータシステムの仕事をしながら、ミニのカテゴリーを担当する。給料は1500ペソ/1ヶ月、コーチの仕事は月曜日・水曜日・金曜日の17時以降と日曜日で、クラブ払われる給料は350～400ペソ/1ヶ月である。

しかしながら、ボカジュニアズのような大きなクラブでは、それぞれのカテゴリーにコーチが付き、さらにトップのコーチなどが兼任しているため継続的な指導ができ、試行錯誤で自分のコーチングを培っている。加えて、コーチ間のコミュニケーションにより高いレベルでの選手育成が可能になっているとボカジュニアズ U15～19 コーチ、ロナルド・ゴドバ氏はインタビューで証言した。また、トップチームの戦術は、今の U15-19 の育成年代においてはマネができないと認識している。それぞれの選手の違いによって戦術にも差がでてくるので、特に育成世代では、選手がチームでプレーすることに重点を置き、トップのチームで対応できるよう考えている。トップチームのヘッドコーチサンチェス氏とは、若手の育成の話、引き上げる選手の情報を共有するために、常にコンタクトをとっている。コミュニケーションがコーチ達のレベルを上げ、それぞれの知恵となると語っている。

第3項 トップチーム選手の戦う意識

大きなクラブ、つまりプロリーグに参加するクラブのトップのヘッドコーチとトップのチームの一人のアシスタントコーチは10ヶ月契約の完全なプロコーチである。クラブ全体を見る必要があるが競争力のある LNB での戦績を追求することに集中してもらう。育成コーチを3番目のアシスタントコーチとして迎え、分析の担当。同時にトップチームのヘッドコーチから学ぶという体制を取り、3番目のアシスタントコーチからアンダーカテゴリーの選手の状況、情報が伝わるよう、常にコミュニケーションを取れるようにしている。さらに育成に対してのアドバイス等を通して全体を把握し一貫指導を徹底している。

ボカジュニアズの会長・クレメンテス氏は、過去にボカジュニアズでヘッドコーチをしていた人として、1996-1997年に現アルゼンチン代表ヘッドコーチのラマス氏、1999-2000年、マニアーノ氏、2003-2005年、セルデオ・エルナンデス氏の3名がボカジュニアズを経て、アルゼンチン代表ヘッドコーチを務めている例を挙げた。それは、競争力が高いリーグで闘うための独自のヘッドコーチ選びを行ってきたからできたことだと語った。クラブでのコーチングが非常に過酷であるがゆえに、それを加味した上で若手のコーチを抜擢してきたという経緯である。すなわち、クラブでコーチが育成されているが現状ある。

第4項 クラブ内でのヘッドコーチの役割と責任

選手選びは経営陣が決めた予算の中で、基本的にヘッドコーチが全選手を選ぶという役割がある。それは、ヘッドコーチのスタイルを実現させるためであり、選手選考に関しては、ヘッドコーチの要望を極力聞かなければいけないとフロントは考えている。しかし、チームに世界レベルの選手がいた場合、予算内でチームを作らなくてはならず、比較的低予算の選手も選択しなければならないということが生じた場合、フロントとヘッドコーチ、選手の代理人と共にしっかり話しをして、最終的に予算の範囲内で合意するようにしている。

トップチームのヘッドコーチは、クラブ全体の中心的存在で U15～19 のコーチが一人3番目のアシスタントコーチとしてチーム登録し、ヘッドコーチと橋渡しの存在になるようだ。コミュニケーションを重要視し育成選手の状況、トップチームの重要にしているコンセプトを

育成年代に伝達、コーチングの技術、戦術の情報共有などをヘッドコーチがクラブ全体に伝えるべき責任をもっているようだ。クラブのヘッドコーチは、10ヶ月契約なので、その期間のみで終了する場合もあるため、育成の現場に直接関わる状況は少ないということである。

第5項 技術、戦略とフィジカルトレーニング、メンタルの役割分担

多くのアルゼンチンバスケットボールのクラブでは、バランスを考えた役割分担を考えているとラウル・バリ奥斯氏は語る。1) 技術、2) 戦略、3) フィジカル、4) メンタルの各サポートを、誰がどのように、それぞれのカテゴリーの選手達にバランスよく行うかということである。バスケットボールでは、メンタルサポートが経済的部分も含め手薄でコーチが兼任で指導、サポートをするようにしているが、アルゼンチンサッカーでは、専門家がこの部分を年代別にサポートしている。ラウル・バリ奥斯氏は、心理学者であり、U-17 のサポートを実際に行っている。

第3節 リーグの選手育成強化

第1項 選手育成を理念としたリーグの創設

「高い競争力」が欠けていることに気がつき、1970 年ごろ低迷していたアルゼンチンバスケットボールを立て直そうと、故レオン・ダビッド・ナクデール氏らがプロリーグ設立を思案した。図 1 は、レオン氏などが競争力を生み出す仕組みを考えられたという手書きの図である。セルヒオ氏は、このプロリーグがアルゼンチン全土のクラブを活性化させリーグのレベルが世界レベルに引き上げられれば、必ず良い方向に向かうと証言した。

ascensos y descensos

浮き沈みのシステム:「競争力が足りない」



資料:リーグ創設時に提案された「競争力」生み出すシステム1984
創設者レオン・ダビッド・ナジュデル氏の手書き

図 1 レオン氏が考えた浮き沈みのシステム

また、このリーグのコンセプトとなっている競争力をつけるための、目標、基本理念は、次の6つある。

- 1) クラブ、コーチのレベルを上げる
- 2) 高いレベルの選手を作る
- 3) 国の中全体で競争できるシステムにする（相互に影響し合う）
- 4) カンファレンスで分ける：国土が広いためエリアで分ける。多くのゲームができるよう考えられている。
- 5) ディビジョンに3つのレベルを設け、入れ替え戦制
- 6) 一番良い選手を見つけ代表チームを強くする

地図で見ると分かるように、どこの国に行くにもとても遠い場所に国が位置している。その環境の中でアルゼンチンバスケットボールを強くするためには、アルゼンチン全土でバスケットボールが行われることと、競争力のあるプロリーグが必要不可欠であったのだ。

第2項 リーグの構成

表 12 は LNB のリーグ構成を示しているが、現在では、国内リーグはリーガ A16 チーム、

TNA16 チーム、3 部リーグにあたるリーガ B、別名トルネオフェデラルが 55 チームあり、それ以外に約 1100 クラブが存在し、地域ごとにリーグが存在している。例えばブエノスアイレス州では、ブランブエノスアイレス、キャピタルフェデラルという地域に 120 チーム、バイアブランカに 50 チームあり、オラビエンセでも 30 チームが参加しており、さらにクラブ 1 つ 1 つにプレミニ、ミニがあり、アンダー13、15、17、19、21 歳、そしてプロまでの 8 カテゴリーに分けられ、ブエノスアイレスの 1 つの州だけでも 500 以上のクラブ存在し、アルゼンチンバスケットボールを支えている。

表 12 LNB のリーグ構成

LNB:Liga Nacional de Básquetbol	
Divison	チーム数
Div 1 Liga-A	16
Div 2 TNA	22
Div 3 Liga-B	55
Div 4 Liga-C	約1,100

第 3 項 世界の壁

多くのインタビューに答えた人たちが世界の壁を破った要因の一つとして、1984 年、LNB が創立されたことをあげ、44 年間オリンピックに参加できなかった理由は、「世界レベルでの競争力が欠けていたこと」であると口を揃えた。

現在の LNB は、強いフィジカルのゲームが展開され、世界基準で行われていると言っている。シーズンは、44 試合レギュラーシーズンが開催され、プレーオフとシーズン途中に行われる。リーグでの戦いと国内トーナメント、トータル 70 試合前後が LNB のクラブが行う試合だ。そして、LNB の強豪が招待参加する南アメリカクラブリーグ、FIBA アメリカ大陸リーグのクラブ間での大会がある。世界の壁をまず各 LNB のクラブが体験することができる場であり、選手達が世界早くから経験するチャンスがある大会だ。表 13、表 14 は各大会の成績を示しているが、アルゼンチンのクラブは、南アメリカ、アメリカ大陸でのクラブ選手権の両大会で好成績を残している。

表 13 South American League for Men's Clubs

Nation	優勝回数
 Argentina	10
 Brazil	5

表 14 FIBA America League 国別戦績 (2010 年)

Nation	優勝	2位
 Argentina	3	0
 Brazil	1	0
 Mexico	0	2
 Puerto Rico	0	1
 Venezuela	0	1

第4項 リーグが目論んだ選手育成と強化

LNB のプロリーグに、19 歳以下 3 名を登録しなくてはならないというルールを作った。さらに、外国人登録については、リーグ A で 3 名登録でき、3 名とも同じコートに立つことができる。TNA では、一人の登録である。その他のリーグでは外国人が居ない状況だ。この 19 歳以下の選手を登録させる制度は、国内の選手の 19 歳以下の若い選手に早くから高いレベルの経験をさせ、海外での活躍を目論んでいる。互いに競争し、狭き門を通り抜けようと選手達が努力し、成長することができた 1 つの要因である。競争力が高い上に若い選手を育成することができたことで、アルゼンチン LNB のクラブで 20 歳位まで育成されて、海外へプレーをしに行くという構図ができ上がった。1998 年ラマス氏が代表を指揮した前後、多くの優秀な選手がおおよそ 20 歳を超えた時に海外に挑戦する形になる。ボスマン・ルールの変更の後押しがあり、アルゼンチン選手の二重国籍（多くがイタリア、スペイン）でのパスポートを持つ選手たちがヨーロッパでプレーする機会を得たのだ。

そして、多くの選手がヨーロッパで鍛えられ、大きな経験をして選手が強化されたのだ。また、リーグの中で、19 歳以下の選手は、自分のカテゴリーでもプレーをすべきだという考えから、両方のカテゴリーに出場できプレータイムを確保することも考えられていた。

第4節 リーグのコーチ養成

第1項 もう一つのリーグ創設の意図

LNB が創立される前、1975 年から約 10 年間、指導者達の間で争いが絶えなかったが、これは、プロリーグを作るきっかけの一つでもあった。全国各地にクラブでの強化・育成が活発化し、試合数が増えコーチのレベルが上がった。指導者がさらに勉強をしなくてはいけなくなり、指導者も選手同様に、ユーゴスラビア、イタリア、スペインなどの海外に行き、LNB での競争力が増した。世界を見ることによって、頂点を目指すという明確な目標にも繋がった。プロチーム＝スポンサーが欠かせない状況で、いい選手、いいチームにはイメージの良いスポンサーが付く。そうすると、いいイメージのスポンサーのおかげで、そのチームの選手に対して憧れる人がさらに増えて、さらにスポンサーも増えていくという連鎖反応が、アルゼンチンバスケットボールの資源の基となっていった。競争力を重視することが、このシステム構築の要因であると言及した。

アルゼンチンは、まだ発展途上である。自分を犠牲にしてでも、サッカーやバスケットボールで経済的に豊かになろうという若年層が多い。その環境下で、84 年にリーグが創立された際に多くの人がフルタイムでその仕事だけに専念しなければいけなくなった。その時に、ベテランのコーチたちがその仕事を選択せず、何人もの若い指導者がその空いた席を譲り受けたのがきっかけで若いヘッドコーチが指揮するチャンスがまわってきた。若いコーチを新しいプロリ

ーグが育成したとも言える。ラマス氏も、恩恵を受けたその時コーチだと語った 1 人である。彼は、24 歳の時にアルゼンチンバスケットボールの歴史のなかで最も若くしてチームのヘッドコーチになった。そして、31 歳の時にリーグ・ナンバー1 ヘッドコーチになり、32 歳でシニア代表のヘッドコーチとなった。

第 2 項 世界との戦いに備えた海外進出

このコーチ陣の特徴は、若いうちからコーチ、ヘッドコーチになり、リーグと一緒に成長し、基礎的なことは国内で学んだ後、歴代の代表ヘッドコーチのベッキョ氏はイタリアへ行き、ラマス氏はスペインに行くなど、ヨーロッパへ勉強に行くコーチが多い。世界的にみても、アルゼンチンの指導者のレベルはとて高くなり、選手達の成長に繋がったと言える。コドバ氏は指導者達の成長の背景には、とてつもない努力がありヨーロッパへ行く資金の援助はなく自費のため、車を売ってまでしても資金をやり繰りし、ヨーロッパへ勉強に行くと自分が辿った道を明らかにした。

第 3 項 LNB リーグのヘッドコーチになるための条件

LNB リーグに外国人ヘッドコーチを採用するときに制約がある。このルールが LNB のコーチの基準値を上げているとネストロ・ガルシア氏という。5 つの LNB リーガ A のヘッドコーチになるための条件がある。

- (1)NBAでの指揮経験
- (2)アメリカの大学で指揮経験
- (3)他国の代表ヘッドコーチを指揮経験
- (4)世界的なライセンスの保有
- (5)他国のクラブで優勝経験

現在、リーガ A の 16 チームのコーチがどのクラブもアルゼンチン人のコーチを採用している。アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由でもある。LNB リーガ A のヘッドコーチが全員アルゼンチン人ということから象徴されるように、アルゼンチンの指導者達は、リーダーシップ、実力、権限があるということは、もちろん、他国の優秀なコーチに匹敵するべき存在でなければならないのである。指導者達は常に学ぶ姿勢を忘れておらず、時間があつたらヨーロッパに自分のお金で講習を受けに行くなど、休みなくバスケットボールの勉強をしている。その結果、レベルの高い、そして“我が強い”選手達もコントロールする力を持っているアルゼンチン人コーチが、意図的ではなく自然に選ばれている。この施策は、コーチ自体が会議をし、1990 年後半にイタリアのリーグを参考に決定した。ハードルを高くし、他国を意識しアルゼンチンバスケットボールが世界を意識することは、全員が高い意志、志を持っている証であり、指導者がレベルアップするためのものだ。

第 5 節 リーグの審判養成

第 1 項 常に評価されるプロレフリー

高いレベルを保つため、リーグが始まる前に審判とコーチが会議をし、ルールが変わった時も、どのような基準を持つかなど話し合われる。また、大きなミスを犯した場合、次の試合で審判を務めることができない罰則があるほど、とても厳しく委員会でチェックされている。その委員会では、試合が試合終わった後に、録画されたフィルムが一つ審判委員会に渡され、直後にチェックしている。ガルシア氏が経験してきたウルグアイ、メキシコ、ブラジル、ベネズエラでは、国内と国際大会では審査基準に差があり、アルゼンチンの審判のレベルの高さを実感したと明言した。

第2項 連盟とリーグの連携による定期的な講習会

アルゼンチン全体にその審判の指導が行き渡るように、毎年リーグ終了後、7月か8月に、ブエノスアイレスのナショナルセンターでアルゼンチン全土の審判が集まり、連盟とリーグが協力し合い3日間のクリニックを行う。審判は、このクリニックへの参加が義務化されている。その際に、30個の質問の筆記試験とフィジカルチェックを行い、審判のレベルを図っている。この3日間を通して、レベルや、リーグ、大会、国によって笛を吹く基準を変えることのない審判の育成が行われている。

第3項 LNBの審判のジャッジ基準

アルゼンチンの審判のジャッジは、フィジカルコンタクトを推奨している部分がある。それは、世界で行われていることで、アルゼンチンだけではない。「世界には1つのルール」しか存在しないと審判部専務理事のハンベルト氏は言い、また「笛を吹かないことも技術である」とし、フィジカルコンタクトをどのようにさせるかが鍵であると証言した。アルゼンチンでは、審判のレベル格差をなくし、世界基準でのジャッジが、国内リーグ、全てのカテゴリーで展開されることを重要視している。

また、アルゼンチン代表ヘッドコーチのラマス氏は、LNBリーグの審判を見て分かる通り、いつもタフなフィジカルコンタクトのゲームをコントロールしているし、他国のリーグや国際ゲームを見てもそのフィジカルでの戦いはレベルが高い。選手達のフィジカルの部分は、どこよりも激しいのではないかと考えている。

第6節 連盟の選手育成強化

第1項 連盟の選手育成

連盟の選手育成が重要とされる中で、育成体制が整っているという自負がある。19歳以下の年代でも、U-13、15、17、19の各年代の代表国際試合がある。各年代で専門家を集めてチーム作りを行い、それぞれの年代で成果を出し、自然といい選手が次々と出てくる組織作りをしている。それぞれのカテゴリーの代表がシニア代表のアシスタントコーチであるトカチュエル氏（アンダーカテゴリー・ヘッドコーチ兼任）のもとで継続した活動を行い、ラマス代表ヘッドコーチが全体を統括するという体制になっている。

その背景には、アルゼンチンバスケットボール連盟会長のヘルマス・ヴァッカロ氏とそれぞれの州連盟の会長が入っている委員会で、アルゼンチン代表ヘッドコーチを決め、アルゼンチンの代表選手育成の全体を担うという構造がある。

第2項 危機感から生み出された育成思案

トカチュエル氏は、1997年よりアルゼンチンシニア代表のアシスタントコーチをしており、2007年から、アルゼンチンバスケットボールの世代交代を目的に、育成プロジェクトの構築責任者、運営の最高責任者に抜擢された。その育成プロジェクトとは、選手の育成、選手のセレクション、代表選手育成、コーチ・審判育成の4つのプログラムから成り立っている。

1つ目は、選手の試合での育成である。アルゼンチン国内クラブ選手権出場の権利を得るための試合をディビジョンに分けリーグ戦化し、よりリーグ、大会が競争力あるゲームが行われるように工夫している。その競争力あるゲームによっていいチーム、選手を育成しようという狙いがある。

2つ目の育成プログラムは、2つのクラブトーナメント大会を行い、この2つのトーナメントをベースに、州選抜大会の試合で開催することで、いい選手を発掘するという方法である。2つのクラブトーナメントを行うこと目指す大会が増えると同時にチャンスが増え、競争力が生まれることを期待している。また、州選抜では、このトーナメントと州の中で目立った活躍をした選手を、州の連盟がそれぞれ推薦し選手を選抜する。そして、アルゼンチン国内でそれ

それぞれの州ごとで争わせるという形である。その中でいい選手をアンダーカテゴリーの代表スタッフがセクションし、招集を掛け集中的にキャンプを行うという育成方法である。最終的にこのキャンプの中からアンダーカテゴリー代表選手を選ぶという道順で育成プログラムが成り上がっている。

3つ目は、2007年から毎年行われている「身長」発掘プログラムがアルゼンチンオリジナルプログラムである。2004年アテネオリンピックで金メダルを取った後の危機感の現れ、と言え5年目のプログラムである。表15は、アテネオリンピックのアルゼンチン代表メンバーを示しているが、ゴールデンエイジの世代に頼る強化・育成ではなく、今後の世界での舞台でアルゼンチンバスケットボールが活躍するために必要だとトルカチェル氏は語る。

表 15 アテネオリンピック・アルゼンチン代表メンバー

2004 Olympic Games: finished 1st among 12 teams					
Position	#	Name	Age – DOB	Ht.	Club
PG	4	Sánchez, Juan Ignacio	27 – April 8, 1977	1.93	Etosa Alicante*
SG	5	Ginóbili, Emanuel	27 – July 28, 1977	1.98	San Antonio Spurs*
PG	6	Montecchia, Alejandro	32 – January 1, 1972	1.82	Pamesa Valencia*
C	7	Oberto, Fabricio	29 – March 21, 1975	2.08	Pamesa Valencia*
SF	8	Herrmann, Walter	25 – June 26, 1979	2.03	Unicaja Málaga*
C	9	Fernández, Gabriel	27 – October 23, 1976	2.04	Fórum Valladolid*
SG	10	Sconochini, Hugo	33 – April 10, 1971	1.92	Olimpia Milano*
PF	11	Scola, Luis	24 – April 30, 1980	2.06	Tau Cerámica*
PF	12	Gutiérrez, Leonardo	26 – May 16, 1978	2.00	Obras Sanitarias*
SF	13	Nocioni, Andrés	24 – November 30, 1979	2.01	Tau Cerámica*
SF	14	Delfino, Carlos	21 – August 29, 1982	1.98	Skipper Bologna*
C	15	Wolkowyski, Rubén	30 – September 30, 1973	2.08	Olympiacos B.C.*
27.08				1.99	

1年に2回、3月と12月に12歳から16歳の身長の高い人を集めるというプログラムを実施しており、これはアルゼンチンの完全オリジナルのプログラムである。身長が高い選手をしっかりとしたプログラムを組み育成すると、アンダーカテゴリーの代表で活躍する選手になるという結果がでている。

世界基準になる身長をアテネオリンピック・優勝メンバーの構成を元に、表16のような「身長」発掘プログラムの基準が設定された。表15のブルーで示されたアルゼンチン代表メンバーがこの「身長」発掘プログラムの対象でなる選手である。また、表17で示した「身長」発掘プログラムの基準サイズは、12歳で185センチ以上、13歳で188センチ以上、14歳で193センチ以上という基準で、13歳、14歳の年代が、身長が伸びる時期となり人数が多くなる。しかし、このプログラムでは、例えば13歳の時に188センチあったとしても、14歳の時に193センチに達していなければ、参加することはできない。

表 16 「身長」発掘プログラムの基準サイズ表

年齢	12	13	14	15	16
「身長」発掘プログラム 基準サイズ(cm)	185	188	193	198	201

つまりあくまで身長での発掘プログラムであり、このプログラムに入り続けている選手は、より世界基準の身長に近づいている選手と言える。高身長者が少ないアルゼンチンでは、このようなプログラムを持つことで世界に対抗する施策を早くから取り入れ、アルゼンチン全土でもれの無い状況で育成がされるよう考えられている。

今年は、12月12日実施予定で、現在50名の登録選手がいる。この集められた選手達で7日間の合宿を行い、この間は代表のセクションとは違い、将来性のために刺激を与えるという特徴があり、ゲームなどを通してフィジカルチェックを行い、それぞれ何が足りないのか、またどのようなセンス持っているのかなどをチェックする。そしてそれをもとに、それぞれの選手のための年間育成プログラムを作り、そのプログラムを各クラブへ渡して実施してもらう。定期的にCABBの担当者がプログラム遂行度合いや、選手の成長をチェックしている。そして、栄養学、心理学、怪我予防トレーニングなど、バスケットボールに必要なあらゆる講義を練習前後に入れ知識の教養も行う。1日に2～3時間のプログラムを午前、午後の2部で行う。このプログラムに指導者育成としての考えも含め、各エリアから8名の若手コーチ、そして2～3人のフィジカルコーチ、そして代表コーチなどコーチを招待して成り立っている。

そして、4つ目1つの発掘プログラムが、優秀な選手を探すプログラムである。6月から11月にかけて、10地区の12歳から16歳の選手約40名を集め、3日間の合宿を行う。この時は、8名のCABBスタッフと、他の地区から5名のコーチを招待して行われ、フィジカルテスト、ゲームを行う。「身長」の発掘プログラム同様、1日に2～3時間のプログラムを午前、午後の2部で行い、

栄養学、心理学、怪我予防トレーニングなど、バスケットボールに必要なあらゆる講義を練習前後に入れ知識の教養も行う。

第3項 ゴールデン世代の台頭

急激にアルゼンチンが強くなった要因の一つに、同じ時期に、4人の格別に高いレベルの選手が異なるポジションで現れたということが言える。また他にも20人の凄い選手が同時期に出てきたということである。きっかけはリーグ創立にあるのかもしれないが、現在、その20人に追いつくグループはまだ出てきてはいない。偶発的に生まれたのかと問われれば、そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。そして、タレントが同じ時期に生まれたことを、ラマス代表ヘッドコーチは次のように述べている。「奇跡とまでは言えない。なぜなら、彼らは鏡を使うようにモデルにできる選手が彼ら以前にいたから」と、ラマス氏は、また、選手とは、『3つの状況から生み出される』と考えている。一つ目が、その選手のタレント性。二つ目が、トレーニング。三つ目が競争の中での成長力であると話す。

第4項 アルゼンチン代表のコンセプト

アルゼンチンでは子供から大人まで、攻撃的な面でも、守備的な面でも、長い間同じシステムでやってきたことが挙げられる。例えば攻撃面では、2002年のブラジルのルーバン・マニアノヘッドコーチの時から、パスして走るといった基本のコンセプトが土台となり、プラスフレックスとのコンビネーションを使い始めた。守備面では力強くいくというコンセプトを持っており、これが現在のアルゼンチンバスケットボールのスタイルとなっている。世界で戦うために、2002年より10年かけて信じてずっとこのコンセプトを一貫してきている。

第5項 現在のアルゼンチン代表強化

表 17 は 2011 年の代表メンバーを示しているが、現在のバスケットボール男子アルゼンチン代表は、2011 年に行われたオリンピックアメリカ大陸予選で見事に金メダルを取ったチームである。年齢的にも最高の選手達が揃っており、その選手達を少しでも伸ばしていこうとしているが、来年の南米カップ、ロンドンオリンピックを見据えて、18 歳から 25 歳の 3、4 人の若い選手の加入も考えている。

このチームが、世界の高いフィジカルにもう今の代表のメンバー構成ではもたないといとペレツ氏いう。過密日程に加え、33 歳の平均年齢では、現代のバスケットボールのフィジカル戦いに保たない。また、世界のバスケットボールで 3 大会オリンピックに同じ選手達が出場し好成績を残したチームはないと付け加えた。

表 17 2011 年度のアルゼンチン男子代表

Argentina National Basketball Team Roster for the 2011 FIBA Americas Championship (August 30-September 11, 2011)							
Pos.	#	Players Name	Age - DOB	Ht.	Club	Club nat.	Coach(es)
PF	4	Scola, Luis	31 - April 30, 1980	2.07	Houston Rockets	アメリカ	Head coach
SG	5	Ginóbili, Emanuel	34 - July 28, 1977	1.98	San Antonio Spurs	アメリカ	Julio Lamas
PG	6	Sánchez, Juan Ignacio	34 - May 8, 1977	1.93	Weber Bahía Estudiantes*	アルゼンチン	Assistant coach(es)
C	7	Oberto, Fabricio	36 - March 21, 1975	2.08	Unattached*	引退	Gonzalo García
PG	8	Prigioni, Pablo	34 - May 17, 1977	1.86	Real Madrid*	スペイン	Néstor García
PF	9	Gutiérrez, Leonardo	33 - May 16, 1978	2.01	Peñarol (MdP)*	アルゼンチン	
SF	10	Delfino, Carlos	29 - August 29, 1982	1.98	Milwaukee Bucks	アメリカ	
SG	11	Quinteros, Paolo	32 - January 15, 1979	1.88	CAI Zaragoza*	スペイン	
C	12	Leiva, Martín	31 - April 23, 1980	2.10	Peñarol (MdP)*	アルゼンチン	
SF	13	Nocioni, Andrés	31 - November 30, 1979	2.01	Philadelphia 76ers	アメリカ	
SF	14	Jasen, Hernán	33 - February 4, 1978	1.99	Asefa Estudiantes*	スペイン	
PF	15	Kammerichs, Federico	31 - June 21, 1980	2.05	Regatas Corrientes	アルゼンチン	
32.4				2.00			

すでにメディアにも伝えられ、ロンドンオリンピック後のアルゼンチン代表チームは、何人かを残して一新される。表 18 は強化の際のサイクルを示しているが、ラマス氏が率いた 1998 年の世界選手権以降に活躍したゴールデンエイジの選手達の世代交代の時期である。この世代交代の強化策は、サイクルで考えられているのが特徴的だ。これは、長期戦略の一部でアルゼンチンバスケットボール連盟ヴァッカロ会長を中心に、またラマス代表ヘッドコーチ手腕で、このサイクルの移行を任せられているということは偶然ではない。また世界大会ごとのチームの年代幅が狭いことを見ると「一貫指導」でアンダーカテゴリーの代表から継続してからチームが構成されている。

表 19 は年代別の平均身長を示しているが、平均身長については、アルゼンチンのもっている素材でどのようにして世界で勝つかを考えると、このようなメンバー構成になり、ポジションと身長のバランスをどうすればいいかがはっきりしている。

表 18 アルゼンチン代表の強化サイクル

	2011	2010	2008	2006	2004	2002	1998	1996
Scola, Luis	○(31)	○(30)	○(28)	○(26)	○(24)	○(22)		
Ginóbili, Emanuel	○(34)		○(31)	○(29)	○(27)	○(25)	○(21)	
Sánchez, Juan Ignacio	○(34)			○(29)	○(27)	○(25)	○(21)	
Oberto, Fabricio	○(36)	○(35)	○(33)	○(31)	○(29)	○(27)	○(23)	○(21)
Prigioni, Pablo	○(34)	○(33)	○(31)	○(29)				
Gutiérrez, Leonardo	○(33)	○(32)	○(30)	○(28)	○(26)	○(24)		
Delfino, Carlos	○(29)	○(27)	○(25)	○(23)	○(21)			
Quinteros, Paolo	○(32)	○(31)	○(29)					
Leiva, Martín	○(31)							
Nocioni, Andrés	○(31)		○(28)	○(26)	○(24)	○(22)		
Jasen, Hernán	○(33)	○(32)						
Kammerichs, Federico	○(31)	○(30)	○(28)					
González, Román		○(32)	○(30)					
Gutiérrez, Juan Pedro		○(26)	○(24)					
Cequeira, Luis		○(25)						
Mata, Marcos		○(24)						
Porta, Antonio			○(24)					
Herrmann, Walter				○(27)	○(25)			
Fernández, Gabriel				○(29)	○(27)	○(25)		
Farabello, Daniel				○(32)				○(22)
Wolkowyski, Rubén				○(32)	○(30)	○(28)	○(24)	○(22)
Montecchia, Alejandro					○(32)	○(30)	○(26)	
Sconochini, Hugo					○(33)	○(31)	○(27)	
Victoriano, Lucas						○(24)		
Palladino, Leandro						○(26)		
Nicola, Marcelo							○(27)	○(25)
de la Fuente, Esteban							○(29)	○(27)
Milanesio, Marcelo							○(33)	○(31)
Espil, Juan							○(30)	○(28)
Osella, Diego							○(28)	○(26)
Simoni, Patricio							○(26)	
Villar, Luis								○(29)
Michel, Ernesto								○(25)
Racca, Jorge								○(24)
Pérez, Esteban								○(27)

代表選手の選出は、基本的にはヘッドコーチ中心にスタッフ全員で 15 名を選ぶ。特徴としては、代表へ選手を送り出すこと、代表選手だけが人が出た時に突然の召集をすることなどに対して、LNB 全てのチームが協力的で、戦術に対しての批判があったとしても、アルゼンチン代表を応援するとスタンスがはっきりしている。そして、始めから候補選手などの余計な選手を抱えず、代表活動開始からユニットを 15 名と考えている。もし、怪我人が出たとしてもその中から補充し、15 名から 12 名を選出し大会に臨んでいる。今まで、15 名の枠外から選手を招集したことがないというのだ。

また、練習場所は、床の良さと、警備の良さなどから、ウニョアレイという地域で行われ、十分にスター選手達への配慮がされている。1 日の練習は午前と午後の 2 回で構成されており、4 日練習して 1 日休むというサイクルをとっている。1 日の流れは、8 時半にスタッフが集まってミーティングを行い、11 時から練習が始まる。午前中の練習は 2 時間で、1 つの事を 5 分やって、8 分違うことやり、10 分違うことやって、20 分ゲームをやる。そして午後 6 時から始まり、朝の様子を見て考え、実際の状況に見合った練習をもっと入れるべきなのかなど調整する。午後の練習の強度は、本当の試合並みに激しい。

表 19 大会ごとの平均年齢と平均身長

大会名と成績	平均年齢	平均身長
1996 Olympic Games: finished 9th among 12 teams	27.6	200.3
1998 World Championship: finished 8th among 16 teams	24.2	197.9
2002 World Championship: finished 2nd among 16 teams	25.8	198.1
2004 Olympic Games: finished 1st among 12 teams	27.1	199.4
2006 World Championship: finished 4th among 24 teams	28.4	200.0
2008 Olympic Games: finished 3rd among 12 teams	28.4	200.0
2010 World Championship: finished 5th among 24 teams	29.8	199.0
2011 FIBA Americas Championship (August 30-September 11, 2011)	32.4	200.0

第 6 項 フィジカルコンタクトの世界基準化

アルゼンチンの判定基準は、世界基準に合わせている。30 年以上の審判のキャリアを持つチェアヴェニル氏は、今アルゼンチン国内では、一番フィジカル的に強いプレーをさせていると話しており、むしろコンタクトプレーを推奨していると語る。ヨーロッパ他強豪国が世界の舞台でとても強いフィジカルを持ってプレーしており、バスケットボールは格闘技の要素が高いと理解している。子供たちはトップのリーグを見て、どういうプレーをすべきというのを目のあたりにしている。つまりフィジカルコンタクトが必然的なものだとして理解している。若い世代をジャッジする審判がコンタクトプレーを許しているのは、当たり前のことだとしている。

そして、高いレベルを保つため、リーグが始まる前に審判とコーチが会議をし、ルールが変わった時も、どのような基準を持つかなどが話し合われる。また、大きなミスをした場合、数試合でジャッジできない罰則もある。とても厳しく委員会でチェックされている。その委員会では、試合が終わった後に、録画されたフィルムが審判委員会に渡され、直後にチェックする。ガルシア氏は、自身が経験してきたウルグアイ、メキシコ、ブラジル、ベネズエラでは、国内と国際大会では審査基準に差があるというが、アルゼンチンの審判は世界との基準の差がなく非常に高いレベルであると証言している。

第 7 節 連盟のコーチ養成

第 1 項 高い水準の指導者ライセンス

表 20 は ENEBA コーチライセンスについて示しているが、「プランデカパシダ」という国内のコーチ育成のプログラムである。コーチの学校があり、ENEBA と呼ばれている。アルゼンチンのバスケットボールクラブでコーチするには、ライセンスが必要で、3 つのレベルの指導者ライセンスに分かれている。レベル 1 がミニから 13 歳、レベル 2 がアンダー15、17、19 と、各地域選抜、レベル 3 がリーグのヘッドコーチ、国際大会と分かれ、ランセンスに応じてコーチができる。毎年 1 回、3 日間のライセンス更新クリニックがあり、こちらは参加義務となっている。この更新クリニックは、各地で開催され、他国からのコーチを講師で迎えより高いレベルでの指導を勉強することになる。その際の更新料は、約 200US ドルで、各自が自費で支払っている。もう 1 つの指導者育成のプログラムとして、ライセンスのレベルを上げるためのものである。これは、年間を通しての講義があり、試験を受けて合格すると上のレベルへいける。

表 20 ENEBA コーチライセンス

ENEBAコーチライセンス	
Level 1	Mini 13歳以下
Level 2	19歳以下
Level 3	Liga/国際試合

第2項 アルゼンチン代表とアンダー代表のスタッフの配置

代表とアンダーカテゴリー代表のプログラムが計画的に同じスタッフにより強化・育成されている。ユース年代の育成全てを統括している人であり、育成プログラムを作り、全国で、スカウティングもし、2004 年アルゼンチンがアテネオリンピックで金メダルを獲ったときはアシスタントコーチを務めていたエンリケ・トルカチュエル氏が特徴的なポジションにいる。15 年もの間、シニア代表のアシスタントコーチを務め、現在も代表アシスタントコーチであり、2011 年に開かれた U19 の世界選手権でアルゼンチン代表のヘッドコーチを務め、4 位という結果を残している。代表ヘッドコーチのラマス氏は、タレント性のある選手と言うのは、偶発的に生まれてくるが、大事なはその選手達をどのように上手く活用するかということにある。育成の年代には、とても若くて素晴らしいコーチが多く活躍している。コーチたちは、育成の強化に対して、とても力を注いでいる。この育成自体が、代表全体プログラムであるとしている。そのトルカチュエル氏がアルゼンチンバスケットボールの世代交代とさらなる強化を目的に、育成プロジェクトの構築責任者、連盟の強化を担当する最高責任者に配置されている。

第8節 連盟の審判養成

第1項 講習会の実施

表 21 は ENEBA 審判ライセンスについて示しているが、「プランデカパシダ」という国内の審判育成のプログラムである。審判の学校があり EAABA と呼ばれている。そして審判も 3 つレベルがあり、ナショナルがプロリーグ、フェデラティーボが州ごと、アソシアティーボが地域ごとに分かれている。審判の場合、毎年 3 日間アルゼンチン全土の審判が集まりクリニックを行う。毎年参加義務があり、もう 1 つ、州ごとで行っている 2 つのクリニックを受ける必要がある。またもう一つの特徴としては、12 歳までは友情的なものを深めることに焦点を置き、楽しむバスケットボールをさせることを重要視している。そして、審判には、ミニのレベルをレフリーする時には、点数は付けない。また 13 歳以上からルールを関連付けてプレーさせているため、レフリングも厳格になってくるし、審判に対しても要求が高くなる。

表 21 ENEBA 審判ライセンス

ENEBA審判ライセンス	
ナショナル	プロリーグ (Fiba国際レフリー)
フェデラティーボ	州
アソシアティーボ	地域

第2項 「強化の一貫」としての審判のジャッジ

育成プロジェクトとは、選手の育成、選手のセレクション、代表選手育成、コーチ・審判育成の4つのプログラムから成り立っている。育成・強化の柱であるトルカチェル氏は、その中で、レベル、リーグ、大会、国によって笛を吹く基準を変えることのないように、審判の育成の現場で指摘している。さらにアルゼンチンの審判のジャッジは、フィジカルコンタクトを推奨している部分があり、一本筋道を立てている。それは、アルゼンチンで吹かれているジャッジで育った選手が結果を出し、世界でプレーする。そして代表に集まって、世界と戦う。この部分のラインをしっかりとっておけば、次また新しい年代が入って来ても育成強化は成功すると、審判部専務理事のチェアヴェニル氏は言及した。

第3項 ジャッジの世界基準化

アルゼンチン全体にその審判の指導が行き渡るように、毎年リーグ終了後、7月か8月に、ブエノスアイレスのナショナルセンターでアルゼンチン全土の審判が集まり、3日間のクリニックを行う。審判は、このクリニックへの参加が義務化されている。その際に、30個の質問の筆記試験とフィジカルチェックを行い、審判のレベルを図っている。この3日間を通して、レベルや、リーグ、大会、国によって笛を吹く基準を変えることのない審判の育成が行われる。

世界基準のジャッジをアルゼンチンバスケットボールで展開するため、審判を指導するインストラクターが存在し、審判を養成する。そのインストラクターは、大学の中に在籍し、養成プログラムを持っていて、レフリーに指導している。インストラクターを統括しているのがチェアヴェニル氏である。アルゼンチンの審判は、バスケットボール界における役割や権限をはっきりさせるための工夫を怠っていない。

ルールが変わった時など、審判とコーチ連盟との話し合いがあり、意見交換をし、試合中もその時々で、指導者側からの抗議があった場合に、審判が指導者に対しルールをしっかりと守ってもらうよう話をできる立場を保っている。世界の大会においては、国によってのレベル、認識の違いはあるので、その時々で審判が集まり、世界基準をどのように笛を吹くかの話し合いが行われている。

第4項 審判と指導者の相互作用

エラー！参照元が見つかりません。は審判と指導者クリニックの相互作用について示しているが、育成プログラム、つまり4つの育成プログラムを各カテゴリーに相互に作用するため、トルカチェル氏がプロジェクトのトップになって、各カテゴリーの担当者と常にコミュニケーションを取り、アルゼンチンバスケットボールの育成部門をマネジメントしている。その際、審判と指導者の行き来が非常に重要だとトルカチェル氏は語る。シニア代表ヘッドコーチを呼ぶなどし、世界大会で実際に感じ得た指導者側から見た審判の様子、国内リーグとの差異などの話し合いも行われる。指導者のクリニックの際も同様で、レベルの高い国際審判を呼び、審判側から見た世界大会の指導者の振る舞いや世界大会で注意されていた部分などの報告、話し合いが行われる。審判と指導者の間でも判定基準が互いに理解するようにしている。

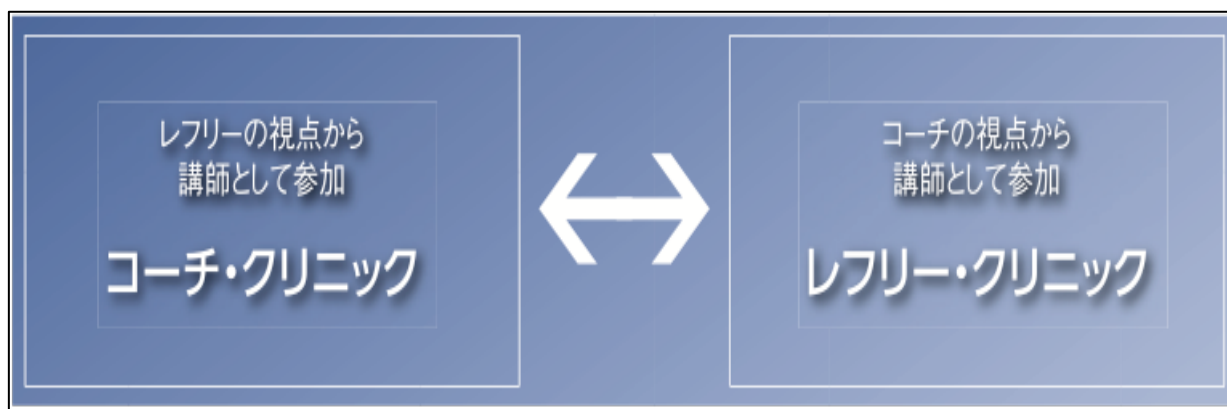


図 2 審判と指導者クリニックの相互作用

第5章 クラブのジュニア選手、指導者に対するアンケート調査結果

本章では、アルゼンチンバスケットボールのクラブのジュニア選手に関して、バスケットボールを始めた経緯、練習量、練習内容、指導者、練習に対する意識などに関するアンケート調査結果について記述する。

第1節 クラブのジュニア選手に対してのアンケート調査

前述のとおり、アルゼンチンバスケットボール・クラブのジュニア選手 69 名に対して、バスケットボールを始めた経緯、練習量、練習に対する意識などについてアンケート調査を実施したが、本節ではその結果を記述する。

1) 回答者の特性、2) バスケットボールに関する意識、3) 練習内容及び環境

・アンケートの調査対象

本調査では、アルゼンチンバスケットボールのクラブに所属している男子の選手を対象とし、質問用紙を配布してアンケート調査を実施した。調査したクラブは以下である。

1. Colegiales
2. BOCA JUNIORS
3. OBRAS Sanitarias
4. Argentinos Juniors

・アンケート実施日時：2011 年 11 月 4 日（金）～11 月 15 日（月）

・アンケート実施方法：現地アルゼンチン・ブエノスアイレスでバスケットボールのクラブ・男子選手 150 枚の質問用紙をクラブのコーチに渡し回収をお願いしたケースと、直接選手に配布してアンケート調査を実施及び回収した。

調査用紙配布数：アルゼンチンバスケットボールのクラブ・男子選手 150 枚

合計回収数：アルゼンチンバスケットボールのクラブ・男子選手 69 枚(回収率 46%)

第1項 回答者の年齢

本アンケート調査の回答者属性は以下の通りである。

図 3 は、回答者属性の年齢構成である。アルゼンチンバスケットボール・クラブの中学生年代の選手が 49%、高校生年代が 39%、19 歳が 12%であった。

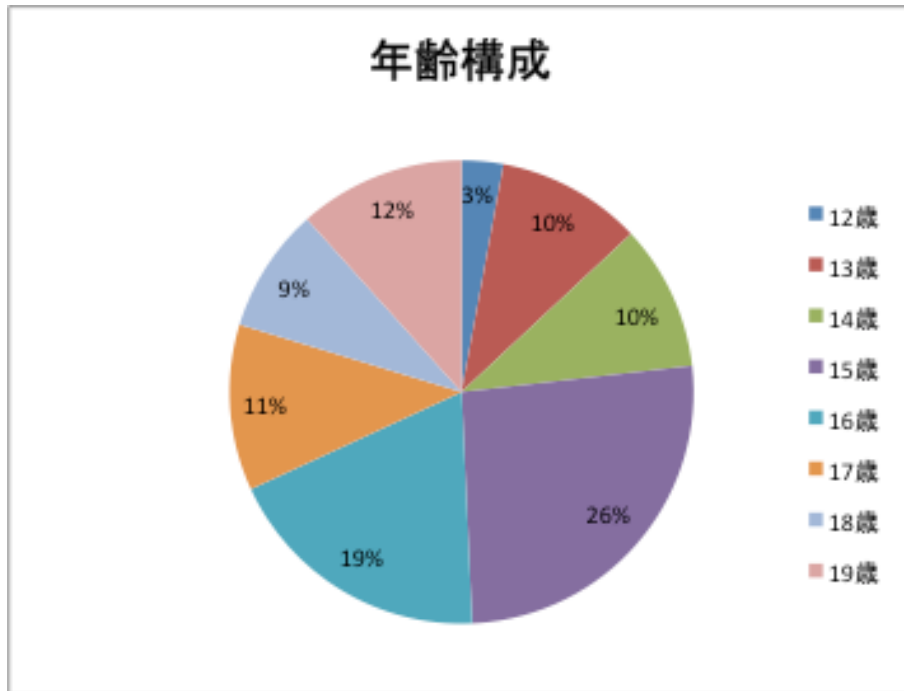


図 3 年齢構成

第2項 バスケットボールを始めた年齢

本項では、アルゼンチンバスケットボールを始めた時期や理由、意識に関する回答結果を分析する。図 4 は、アルゼンチンバスケットボールのクラブでバスケットボールを始めた年齢である。「小学生未満」でバスケットボールを始めている選手が 20%、「小学生」からバスケットボールを始めている選手が 72%いることがわかった。「そして、「中学生」で始めた選手は 7%いた。

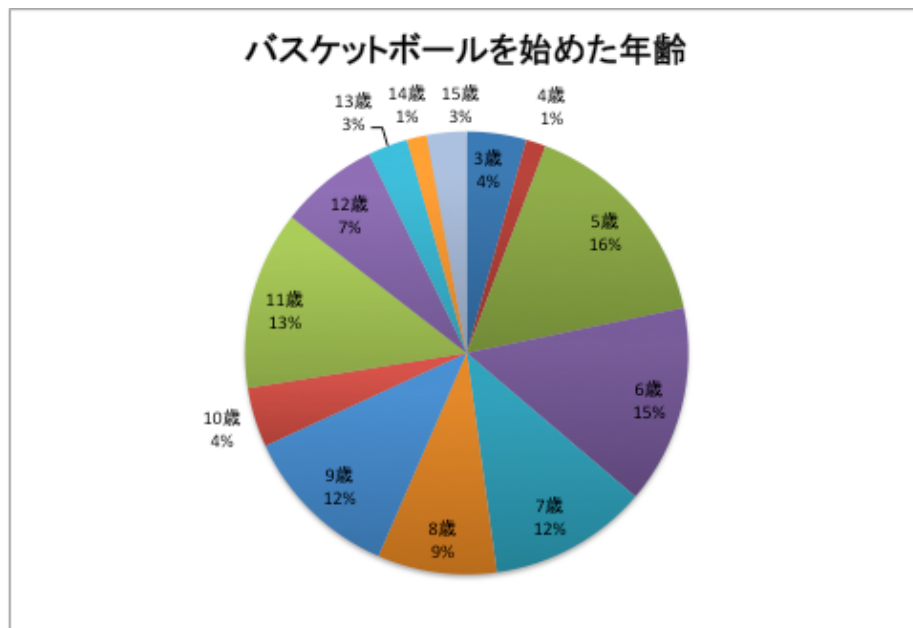


図 4 バスケットボールを始めた年齢

第3項 バスケットボールを始めた理由

図 5 より、バスケットボールを始めた理由はアルゼンチン選手の 21%の選手が「親の勧め」、

「兄弟がやっていたから」は 16%、「友達がやっていたから」は 18%、「憧れのプロの影響」が 6%いることが明らかになった。

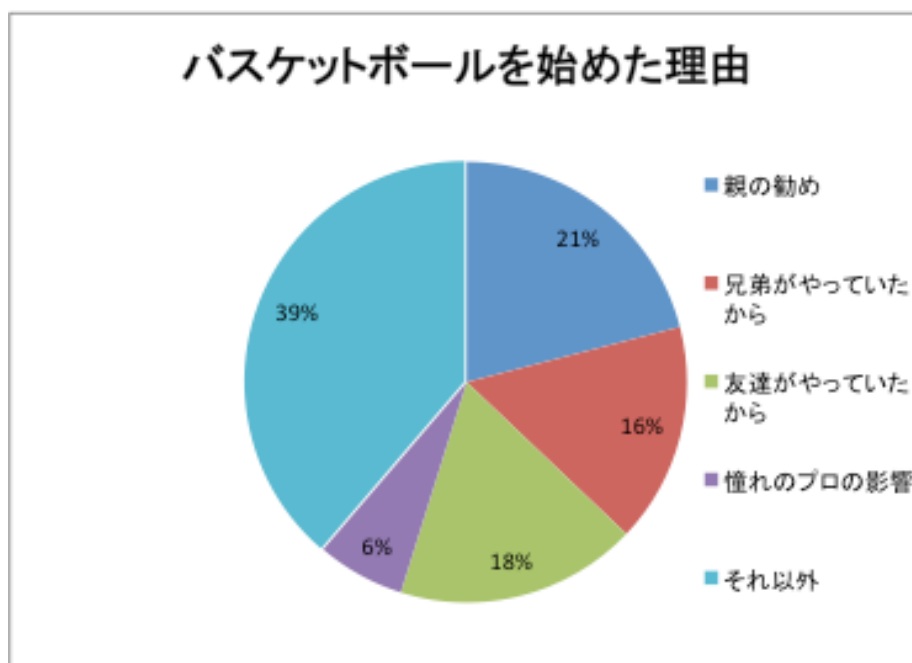


図 5 バスケットボールを始めた理由

第4項 バスケットボール以外の習い事

図 6 は、バスケットボール以外の習い事の調査結果を示しているが、52%のジュニア選手がバスケットボール以外の習い事を行っており、最も多かったものは「サッカー」の 31%であった。次のスポーツでは、「水泳」の 8%「テニス」の 5%であった。

そして、学習塾に通っている選手は 8%であったことが明らかになった。

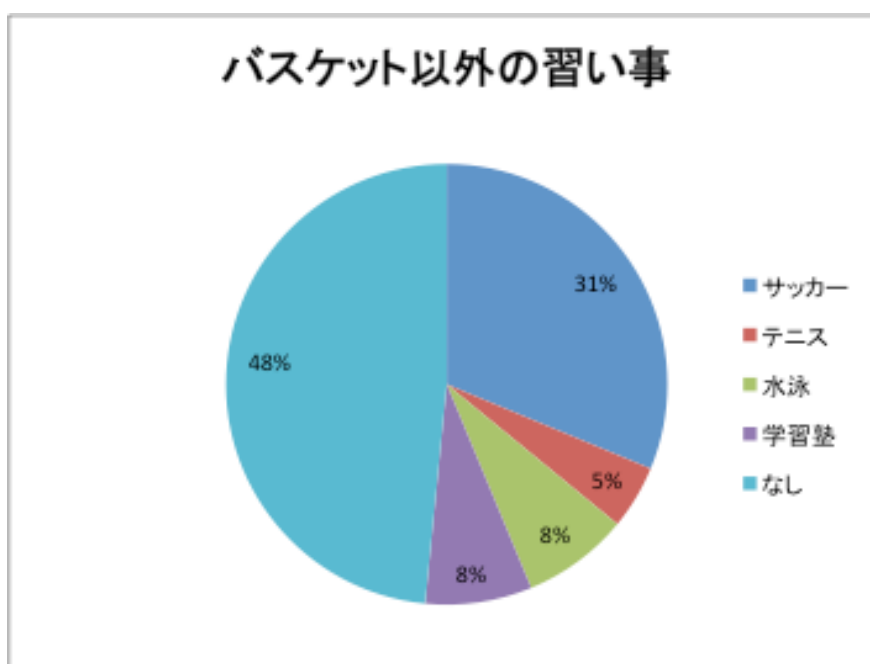


図 6 バスケットボール以外の習い事

第5項 将来の夢

図7は、将来の夢に関する調査結果を示しているが、83%が「プロバスケットボール選手」志望だったことがわかった。

また、サラリーマンが5%、1%が「バスケットボール以外のスポーツ選手」だった。そして11%の選手は「その他」と回答した。

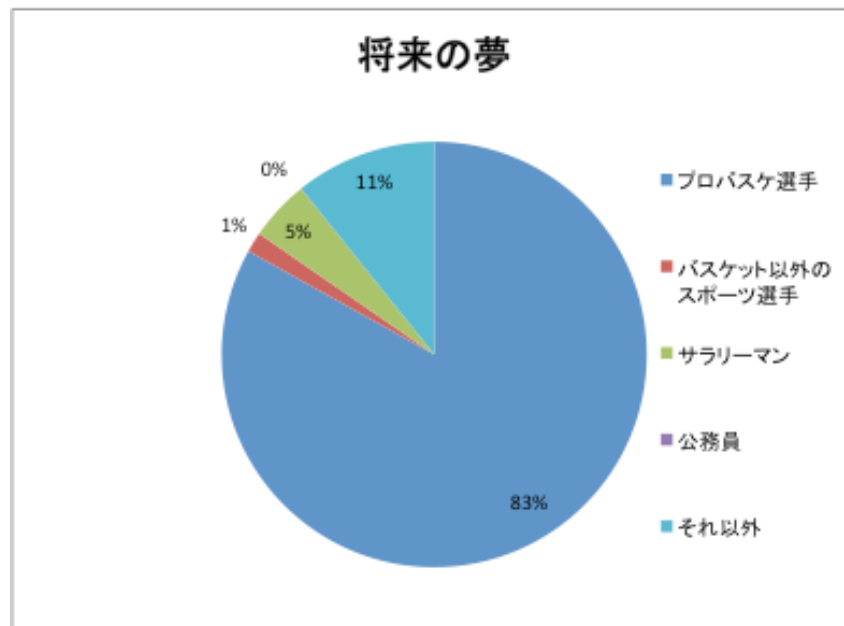


図7 ジュニア選手の将来の夢

第6項 1週間の練習量

図8は1週間の練習量を示しているが、小学生未満の選手は、週に2～3回練習していることが明らかになった。小学生の練習会数が、最も多かったのが1週間の練習回数が「3回」であった。

一方、中学生から高校になるにつれて、週に「4～5回」と回答した割合が徐々に増加していることがわかる。そして、毎日練習している選手は中学生から高校生にかけて徐々に増えていたことが明らかになった。

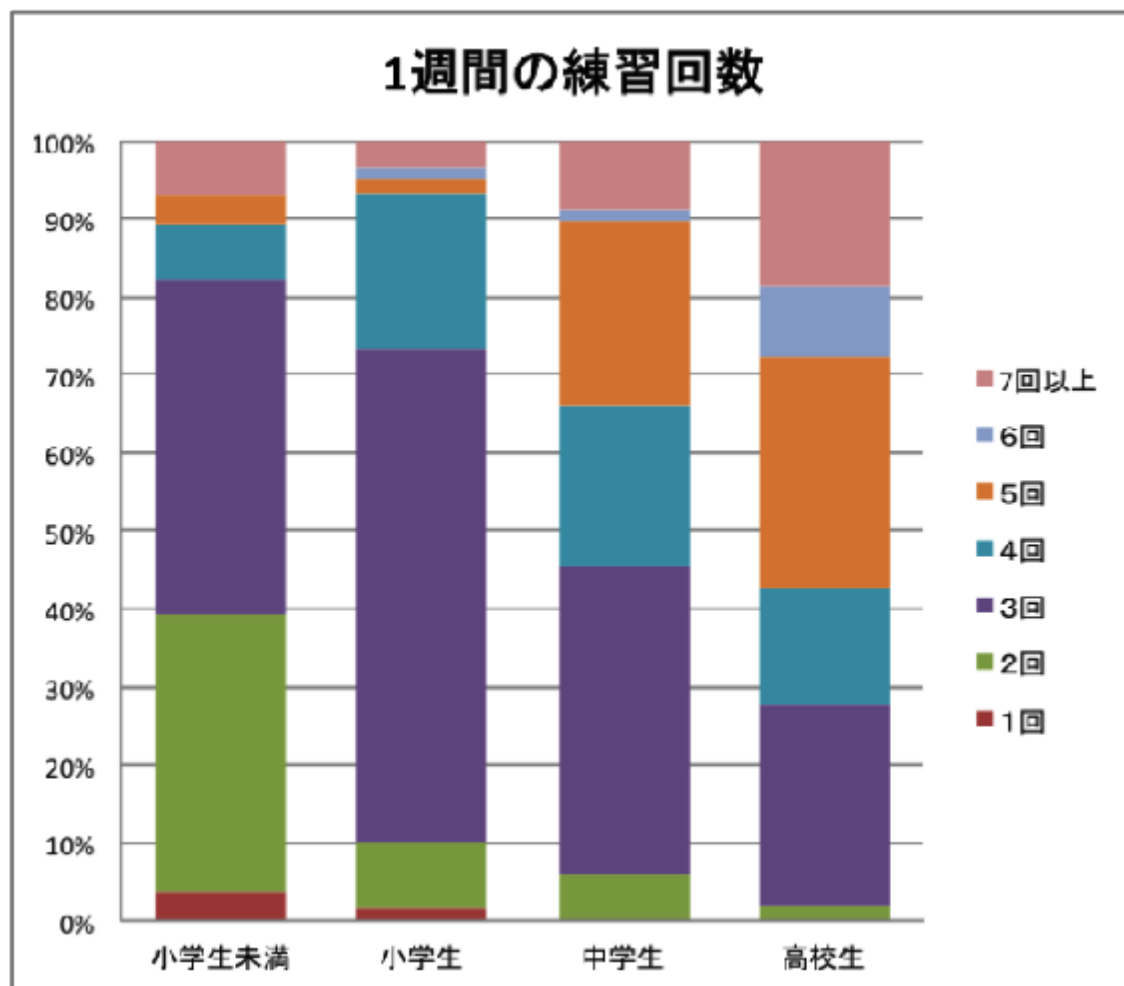


図 8 1 週間の練習回数

第 7 項 1 回の練習時間

図 9 は 1 回の練習時間の調査結果を示しているが、小学生の時から 1 時間以上 2 時間未満と 2 時間以上 3 時間未満が約 80%を占めていることが明らかとなった。そして、小学生から高校生になるにつれて、次第に練習時間が増えていくことが伺える。また、小学生未満は、時間が短い時間での練習に限られ、高校生は、2 時間以上の練習が 70%を超えていることが明らかになった。

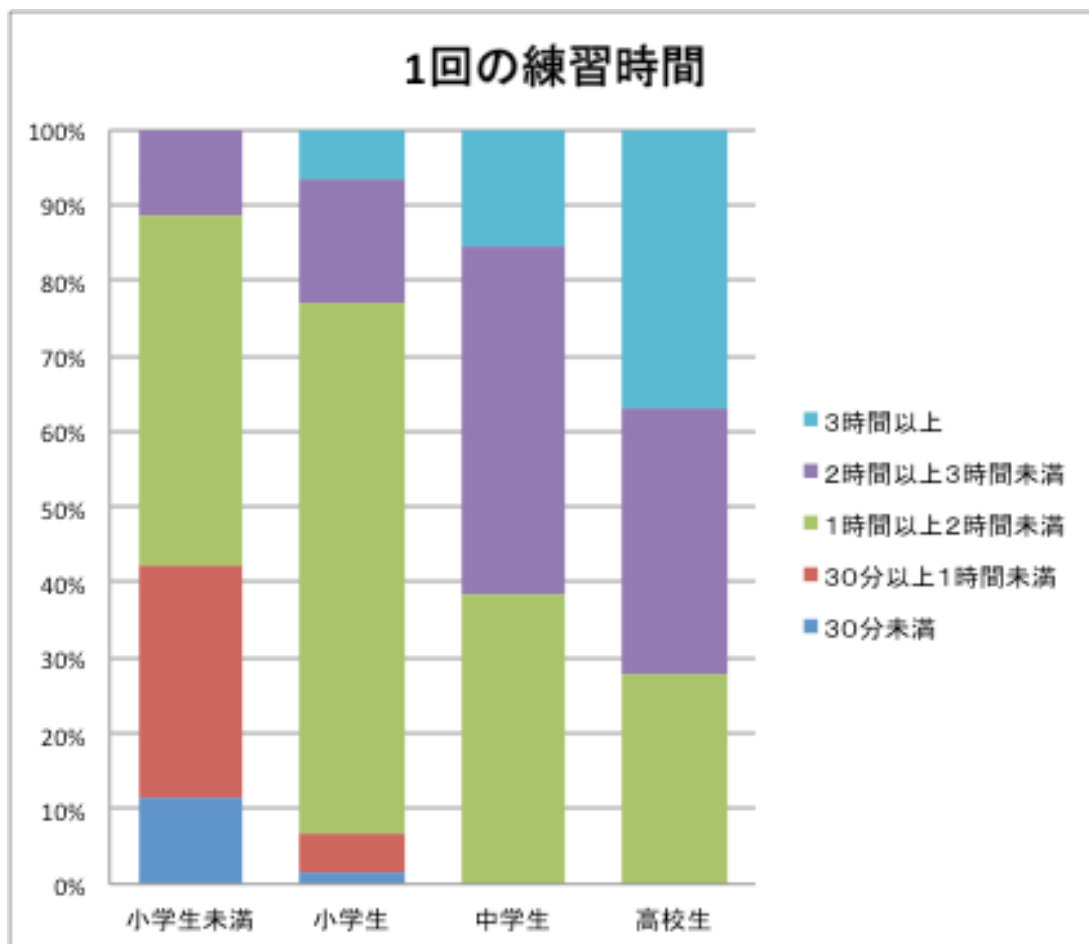


図 9 1回の練習時間

第8項 1ヶ月の試合回数

図 10 は 1 ヶ月の試合回数を示しているが、小学生未満の時から約 70%を超える選手が 1 カ月に 3 回以上 9 試合している事がわかった。また、年齢が上がるにつれて試合数が増えていくことがわかるが、大きな差異がみられない。

また、小学生から 7～9 試合以上する割合が 20%を超え、高校生まで徐々に増えて約 30%増えていることがわかった。

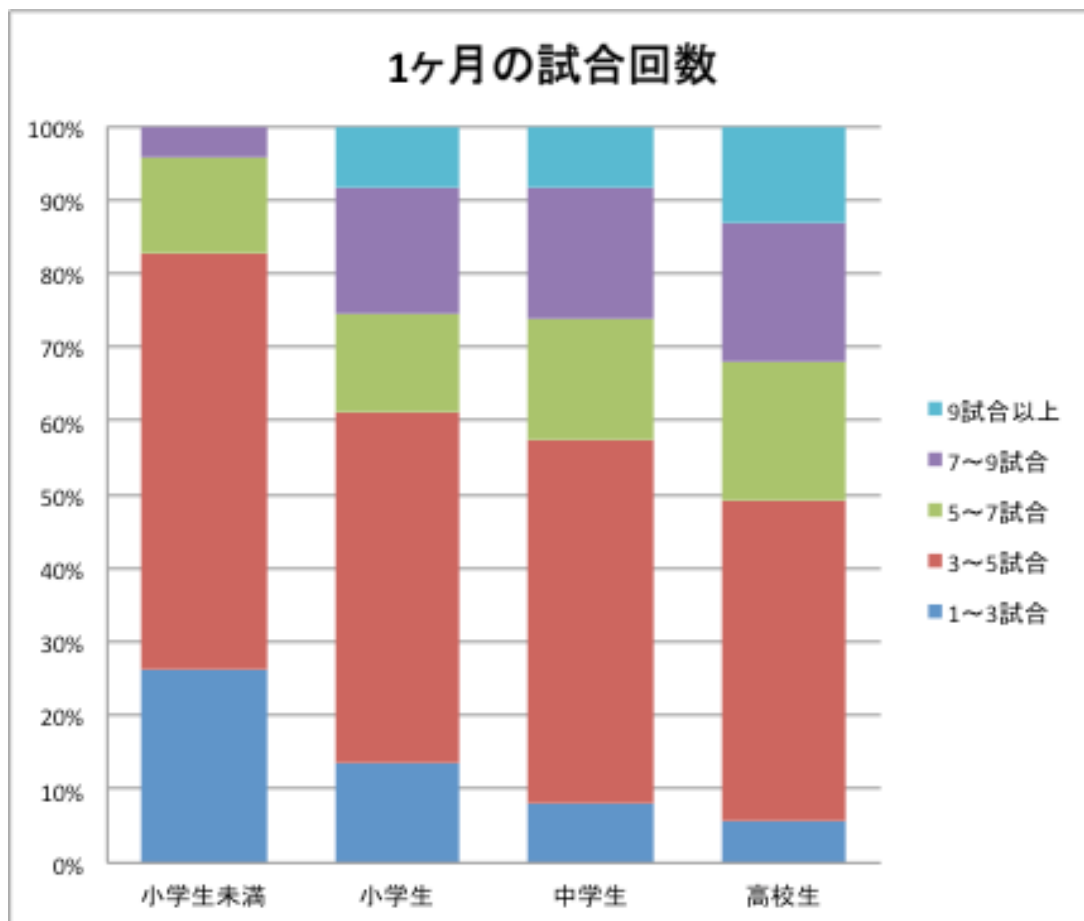


図 10 1ヶ月の試合回数

第9項 練習の取り組み方についての意識

図 11 は練習の取り組み方に対する意識についての調査結果を示しているが、ジュニア選手は、小学生未満の時、約 40%の選手が練習に対して「非常に自主的」であったことがわかった。また、小学生の時「非常に自主的」に練習をした選手が 80%いた。また、「非常に強制的」に練習をさせられたと回答した選手はいなかった。中学生になると「非常に自主的」は 85%に増え、「まあまあ自主的」と合わせ 90%を超えた。高校生は、中学生同様に「非常に自主的」が約 85%いることがわかった。約 10 が「非常に強制的」から「まあまあ強制的」と答えた。

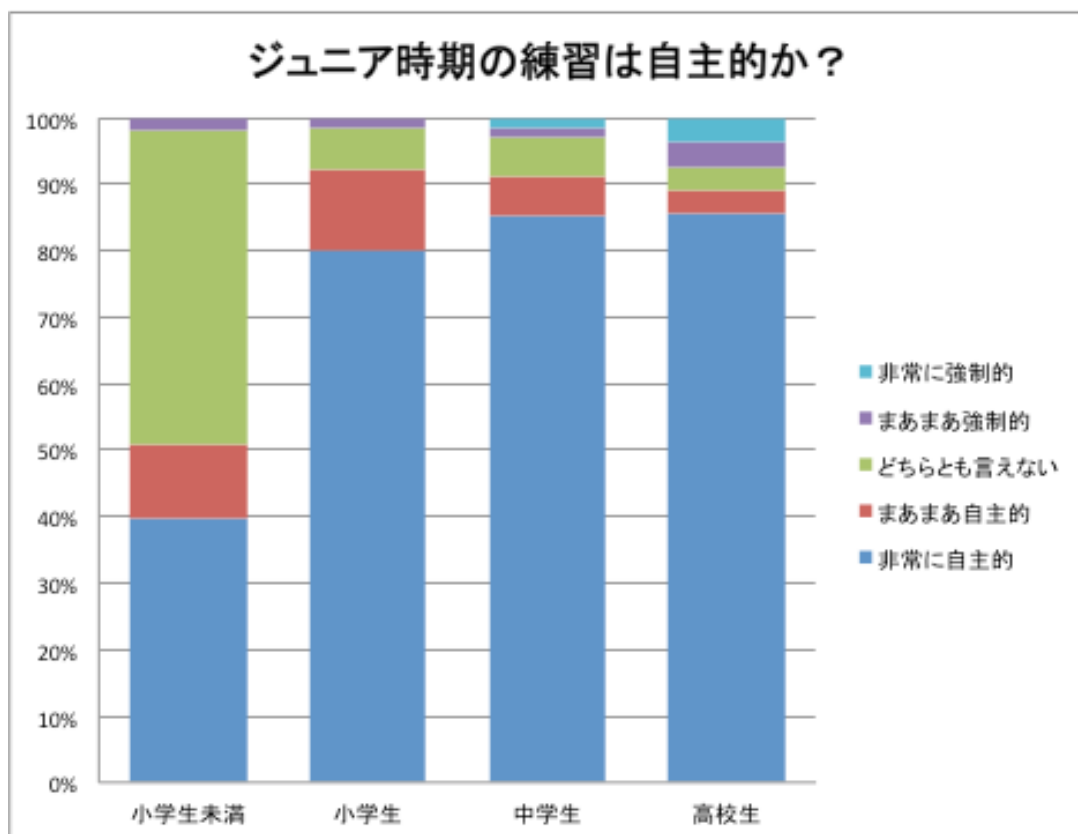


図 11 練習は自主的か

第 2 節 アルゼンチンの指導者に対するアンケート調査結果

本節では、アルゼンチンバスケットボールのコーチ 9 名に対して行ったアンケート調査結果を記述する。

・アンケートの調査対象

本調査では、アルゼンチンバスケットボールの指導者を対象とし、質問用紙を配布してアンケート調査を実施した。

・アンケート実施日時：2011 年 11 月 4 日（金）～11 月 15 日（月）

・アンケート実施方法：現地アルゼンチン・ブエノスアイレスで直接指導者に対し、説明をした上でアンケート調査を実施及び回収した。また、アルゼンチン現地調査にてアンケート調査を実施及び回収した。

クラブでの年代別の指導方法について、アルゼンチンバスケットボールのコーチにアンケート調査を行った。一貫指導を行っているアルゼンチンバスケットボールのクラブで 9 つのアンダーカテゴリーでどのようなことを重要視してコーチングされているかの意識についてアンケート項目は以下の通りである。バスケットボール選手向上に必要である 8 個の要素を定め、5 段階で重要性を評価してもらった。

1) 技術、2) 戦術、3) 筋力トレーニング、4) 判断力、5) アジリティー、6) 反応、7) 空間認識力、8) 調整力

第 1 項 回答者

表 22 は、アンケート調査の回答者を示している。

表 22 アンケート回答者

a.	エンリケ・カachel	育成統括責任者、U19代表ヘッドコーチ、シニア代表アシスタントコーチ
b.	ゴンザレル・ガレルオ	ブエノスアイレス育成担当
c.	ロナルド・ゴドバ	ボカジュニアズ U19育成担当
d.	ネストロ・ガルシア	シニア代表アシスタントコーチ
e.	デビッド・パオリ	キャピタル・フェデラル地域育成担当コーチ
f.	マルセロ・トラビニック	オブラス U15コーチ
g.	ジュリオ・ラマス	オブラス・ヘッドコーチ、シニア代表ヘッドコーチ
h.	ニコラス・ガリノ	ユレヒアレス・クラブ育成コーチ
i.	ディエゴ・パデル	ボカジュニアズ・アシスタントコーチ

第2項 「mini」に対する指導方針

本項では、アルゼンチンバスケットボールのコーチの意識に関する回答結果を分析する。図の a. は、育成統括責任者の考えているアルゼンチンバスケットボールでのコーチングの指標であり、太線でしめしている。図 12 は、ミニのカテゴリーに対してのコーチングの重要性を示したものである。ミニのカテゴリーのコーチングについてのレベルでは筋力トレーニングは、重要視されていない。技術、調整力は非常に重要視されている。また、戦術、判断力が重要ではないとしているコーチが存在する。しかし、必要であるというコーチもいる。さらに空間認識能力と反応は高いもののばらつきがあった。

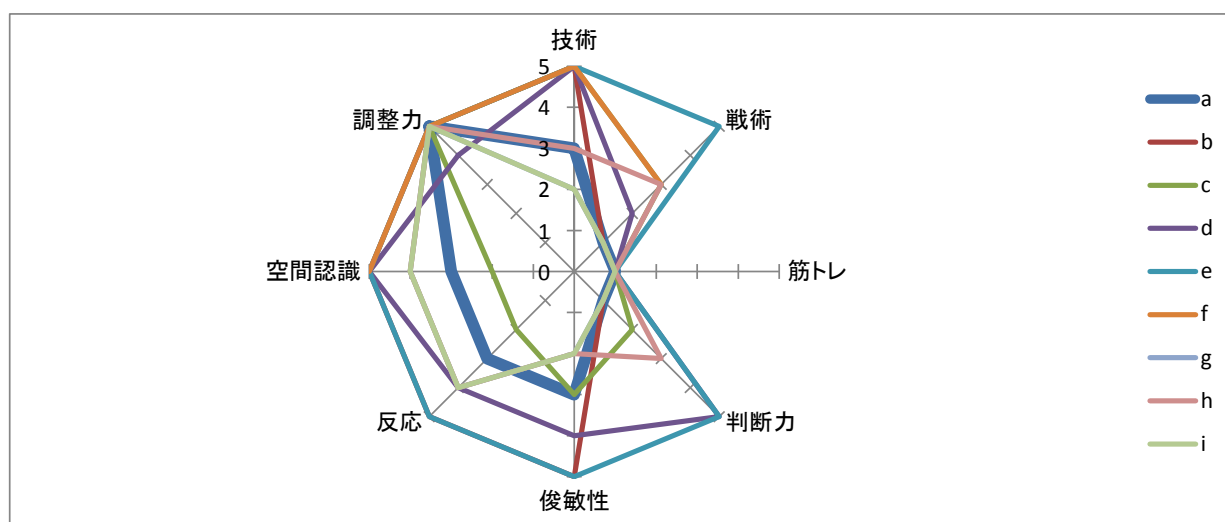


図 12 ミニのカテゴリーに対しての重要性

第3項 U-13 に対する指導方針

図 13 より、U13 のカテゴリーでは、筋力トレーニングを重要視しないとしているコーチと 3 レベルで重要であると答えているコーチに分かれた。技術、調整力は非常に重要視されている。また、戦術、判断力、俊敏性、反応が重要とされているが、ばらつきがあった。

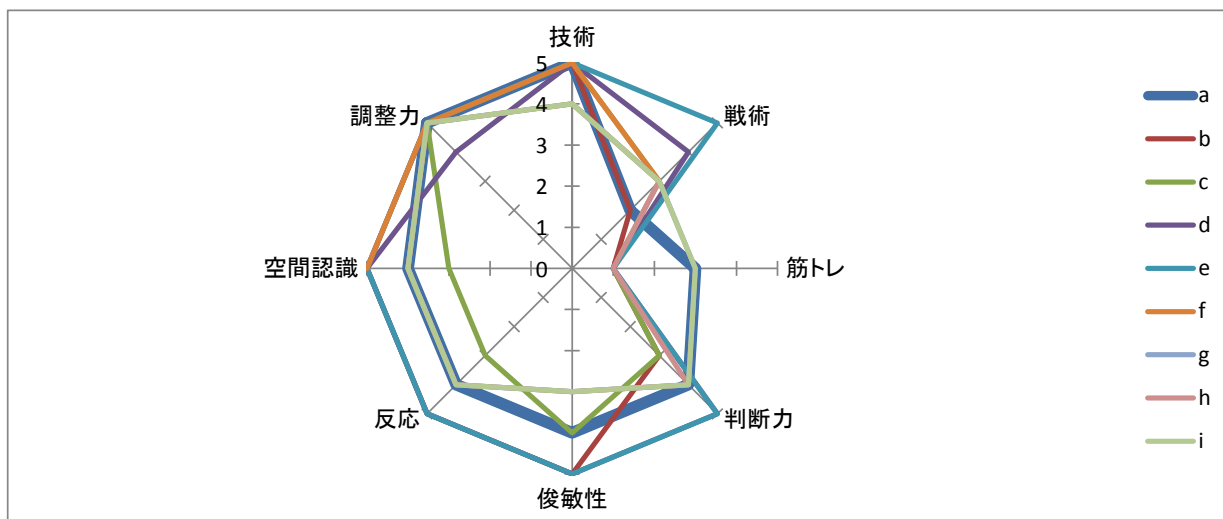


図 13 U13 のカテゴリーに対しての重要性

第 4 項 U-15 に対する指導方針

図 14 より、U15 のカテゴリーでは、筋力トレーニングの重要性を答えるコーチがいるがばらつきがあった。技術は非常に重要視されている。また、調整力、空間認識力が 4 のレベルで重要であるということが明らかになった。戦術、判断力、俊敏性、反応がその次に重要とされていることが明らかになった。

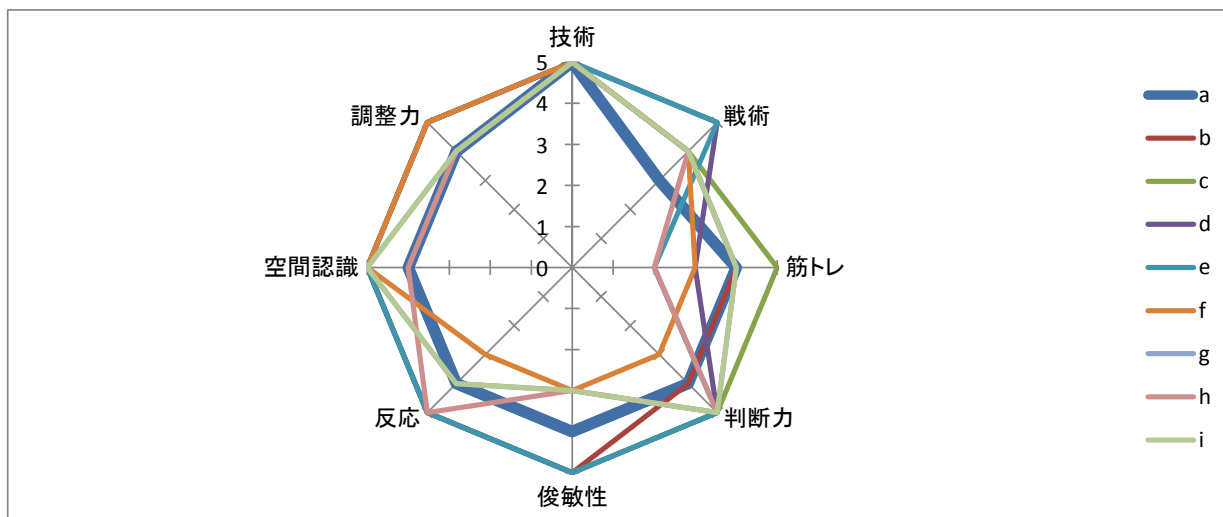


図 14 U15 のカテゴリーに対しての重要性

第 5 項 U-17 に対する指導方針

図 15 より、U17 のカテゴリーでは、俊敏性以外は、すべて 4 レベル以上で重要であることが明らかになった。戦術、技術が非常に重要視されている。また、調整力、空間認識力、判断力、俊敏性、反応は、その次の群として重要視されている。

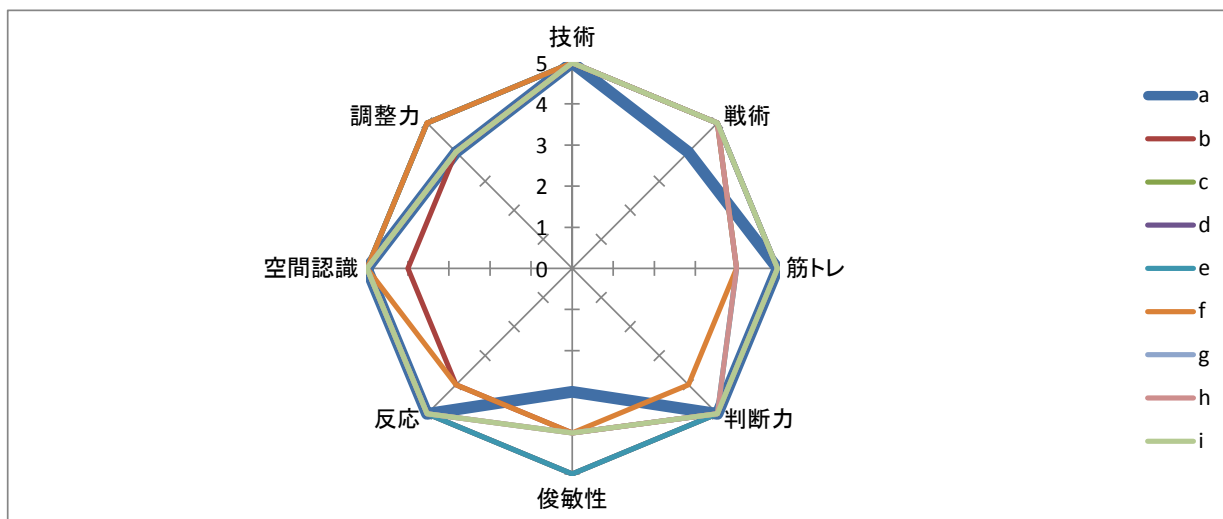


図 15 U17 のカテゴリーに対しての重要性

第 6 項 U-19 に対する指導方針

図 16 より、U19 のカテゴリーでは、技術、戦術、筋力トレーニング、判断力のすべてが、5 のレベルで重要であるということが明らかになった。空間認識力と反応が次に重用しされ、また、調整力、判断力がその次の群として重要視されていることがわかった。

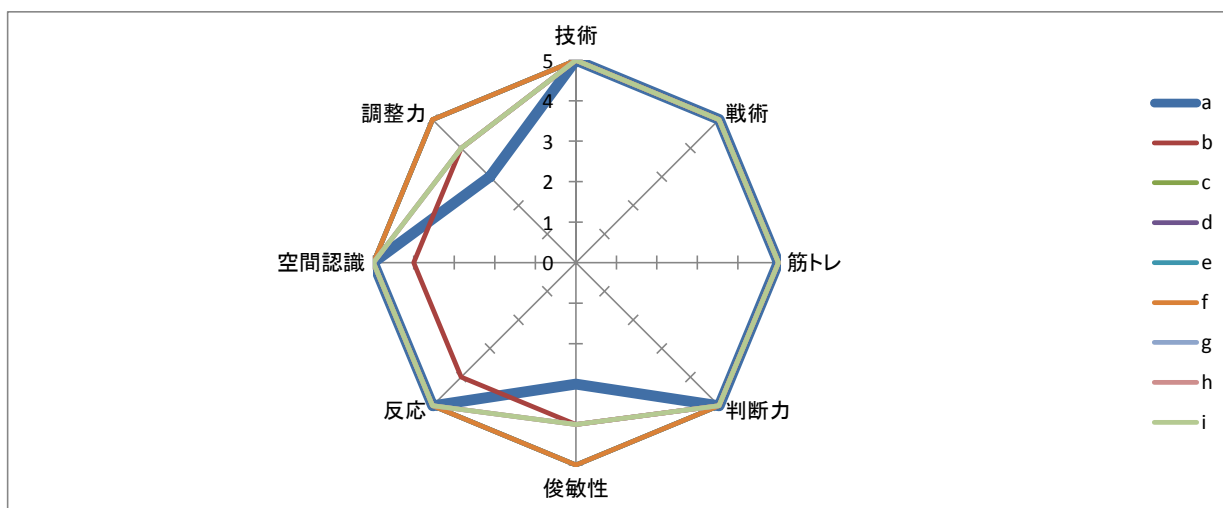


図 16 U19 のカテゴリーに対しての重要性

第 7 項 トップに対する指導方針

図 17 より、U21、23、Top のカテゴリーでは、技術、戦術、筋力トレーニング、判断力、俊敏性、反応、空間認識力、調整力のすべてが 5 のレベルで重要であるということが明らかになった。

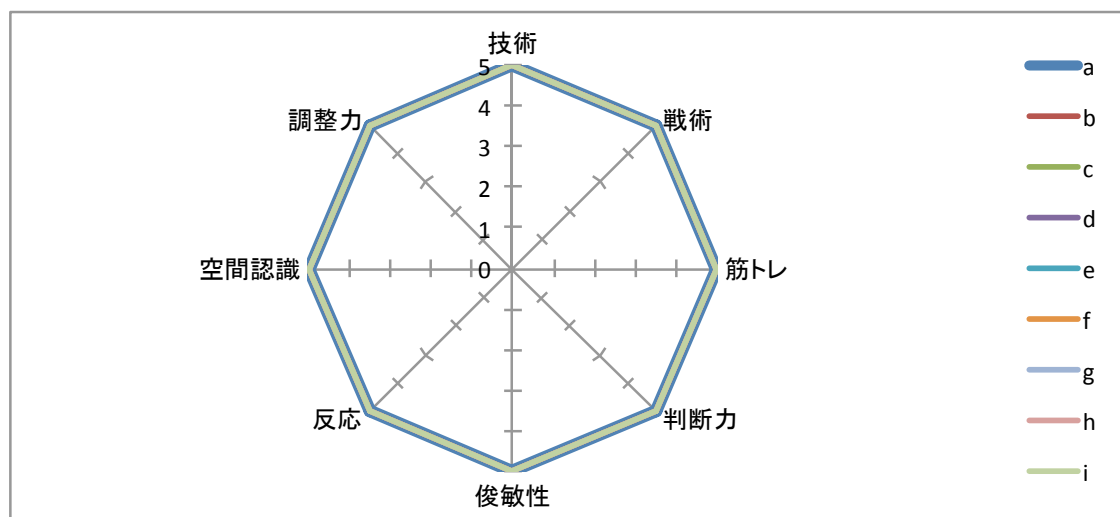


図 17 U21, 23, Top のカテゴリに対しての重要性

第 8 項 年代別指導方針

図 18 は、アルゼンチンバスケットボールのコーチの意識に関する回答結果の平均を示した図である。全ての要素でカテゴリの年代が上がるごとに上昇していることが明らかになった。筋力トレーニングは、15 歳から重要性を求められている。技術、空間認識力、調整力は、ミニのときから必要とされている。また戦術、判断力は、徐々に重要視されていることが明らかとなった。

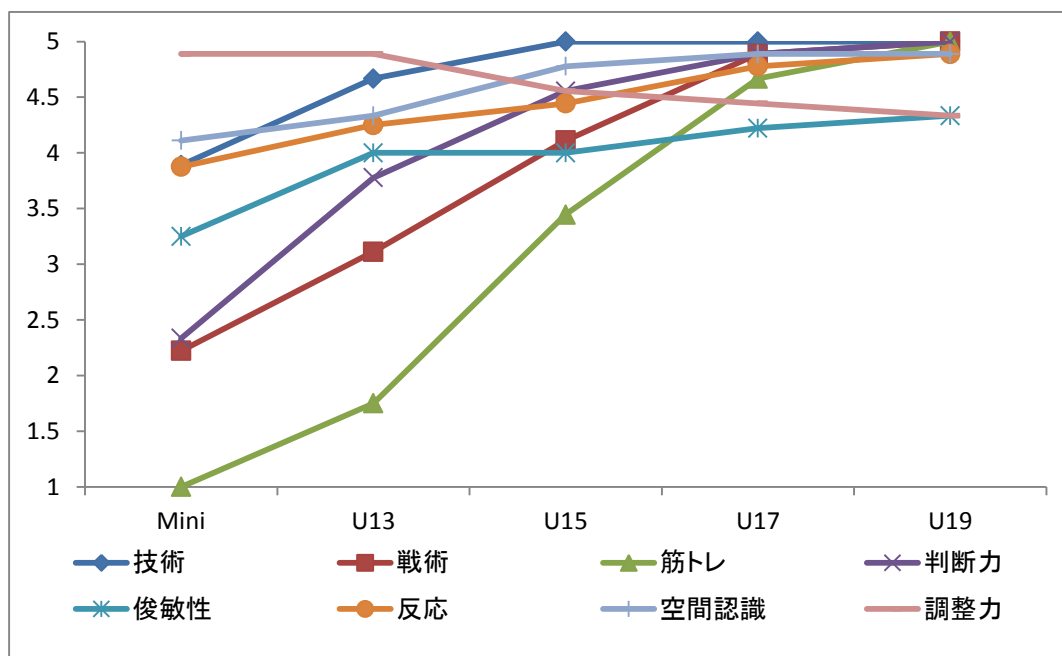


図 18 コーチの意識平均図

第6章 アルゼンチンバスケットボールの成功要因

第1節 アルゼンチンバスケットボールの成功構造

表 23、表 24 は、インタビュー結果を基に、施策を行う「クラブ」、「リーグ」、「連盟」の 3 主体を横軸に、施策の影響を受ける「選手」、「コーチ」、「審判」、「環境/マネジメント」の 4 要因を縦軸にとり、アルゼンチンの成功構造を整理した。また、選手に対しての施策を「フィジカル」、「発掘」、「テクニク」、「戦術」、「メンタル」、「プログラム」に整理した。

クラブでは、選手を年代別で育成し、飛び級制度など優秀な選手を輩出できる仕組みを設けていた。さらに、世界の中で比較的体格が劣るため、15 歳からフィジカルトレーニングの強化に力を入れていた。また、選手の競技力を高めるためにリーグが創設されたが、リーグは 8 カテゴリーに分けられ、どのカテゴリーに所属する選手に対しても試合数が確保されるようリーグが成り立っていた。さらに、リーグは優秀な選手輩出のため 19 歳以下の選手の登録を 3 名に定める制度を導入している。また、連盟とリーグは連携して審判の講習会を開催し、リーグにおいて世界基準のジャッチが行われるよう努めている。連盟は、選手の育成、強化のために、優秀な選手を国中から集めるプログラムと身長が基準値よりも高い選手を集めるプログラムを併せて実施し、世界で通用する可能性のある選手を漏れ無く発掘する施策を行っていた。

表 23 成功構造①

成功構造		クラブ	リーグ		連盟
			トップ	ユース	
選手	フィジカル	国レベルで体格的に世界で劣っていることを共通認識している。			
		筋トレ開始時期 :15歳になる歳からフィジカルコーチによるトレーニングが始められる。	外国人枠 (League A 3名) (League A 1名)にして、国内での競争力、枠組み争いを激しくしている。	全てのカテゴリーでゲームでのフィジカルコンタクトを推奨されている。	筋トレ開始時期 :14歳を始めるべきであると考える。
	発掘	大きなクラブでは、15～19歳の中でトライアウトを実施される。	-	・トップチームとは、戦術が違わず3人目のアシスタントコーチが情報交換をした中で、プレーを導き出している。	・身長」発掘プログラム ・質」発掘プログラム
		-	-	-	・ゴールデン世代の台頭
		-	-	-	連盟主体のクラブトーナメントから選手の発掘を行う。
		-	-	-	州選抜のトーナメントから選手発掘を行う。
	テクニク	飛び級によるエリート教育を行っている。質、量、強度が必然的に上がる。	・LNBのクラブが行う高い戦意識のある70試合の試合数が行われる。	・カテゴリー別の年齢を考えた指導がされている。	-
		・パッシングゲームがアルゼンチンの特有であるということを念頭に置き、チームでバスケットボールを構成することが勝利の道であると感じ、そのためのテクニクが構築されている。	-	-	・1996年からの世界での戦い
		・技術より先に空間認識力が重要視され、各々の選手が状況を判断するバスケットボールが存在している。	-	-	-
	戦術	・U15-19の練習では、1ヶ月に4000通りのシチュエーションをつくり、バスケットボールIQを高め、空間認識力をつけ、パス力をアップさせている。	・LNBでは、年間約70試合の試合数が行われ、多くの対戦チーム (League A :16チーム)との戦いで多様な戦術が必要になる。	・年間の試合数は、12歳のミニまでが40試合、それ以降約80ゲームが組まれている。	・2004年金メダルで世界を驚かしたフレックスオフェンスをどう使ったかが国内に大きな影響を与えた。
メンタル	経済的に豊ではないという認識から、スポーツ選手が這い上がる意志、戦意識が高くなる環境。				
	-	-	・メンタルサポートは、サッカーのような専門スタッフはまだついていない。	-	
プログラム	・15歳になる年に12名に絞られる。それまでの、ミニは2チーム存在しているケースがあり、トライアウトで選手が付け加えられた上でセレクションされる。	-	-	-	
	・U15からU21までの選手48名のうち、15名を保有選手としている。	・19歳以下の選手をトップチームに3名登録しなければならない。	-	4つの発掘プログラムから、最終的にアンダーカテゴリーの代表を選ぶという道筋がある。	

表 24 成功構造②

成功構造	クラブ	リーグ	連盟
コーチ	一人のコーチが面倒見れる人数が12名と決まっている。 ・ヘッドコーチの役割と責任が大きい。	・外国人がリーグのヘッドコーチになるための資格が存在する。 ・プロリーグ設立の意図（クラブ、コーチのレベルを上げる、一番いい選手を見つける）	・ライセンス取得養成は、大学で行われる。 -
	若手ヘッドコーチの育成を抜擢される。	・LNBのクラブが行う高い戦い意識のある70試合の試合数が行われる。	-
	・10年間で熟練した選手を作り出すという責任があるとされている。その後優秀な選手が欧米に行くという流れがある。	・若手ヘッドコーチが抜擢される風潮がある。プロリーグにしたことによって、若いコーチが雇われた。	・ライセンス継続研修は、外国人コーチを招から、育成プロジェクトの一貫として行われる。
	・海外修行（自費）に行き、世界での争いに勝利するため学びを得る。育成コーチが見聞を広めるため積極的に海外に出て行く傾向がある。	・海外派遣（自費）ライセンス継続研修で教わったコーチとのコネクションでネットワークを確立し、レベルアップを図っている。	・コーチ間のネットワーク化が、育成プロジェクトの相互関係により確立されている。
	・小さいクラブでの育成コーチには、1ヶ月約400ペソ（約7,500円）が支払われている。	・LNBのトップチームは、完全にプロコーチである。	・代表コーチ選出方法（会長が任命権を持ち、州の理事の集まりで承認される）
	・大きなクラブは、専任で雇われていて長く育成を任されている。	・南アメリカ、アメリカ大陸でのクラブ選手権でアルゼンチンの強さを証明し、コーチのレベルが高いことがアルゼンチンコーチ達の励みになっている。	・代表コーチスタッフが、アルゼンチンの育成プロジェクトの総括を行い、一体感を持たせている。
	・3番目のアシスタントコーチを育成コーチが兼任するシステムになっている。	-	-
	・カテゴリーを兼任してトップコーチから学び、コミュニケーションを密に取れる環境がある。	・育成プロジェクト審判とコーチとのコミュニケーションが重要であると考えが浸透しており、コーチクリニックに国際審判を派遣し、判断基準を話し合い、アルゼンチンバスケットボール育成強化を話し合い、審判クリニックにも同様に世界での戦ったコーチがフィジカルコンタクトの基準等について話す場を作っている。	
審判	-	アルゼンチンの審判のジャッジは、フィジカルコンタクトを推奨している部分がある。それは、世界で行われていることで、アルゼンチンだけではない。「世界には1つのルール」・世界基準でのジャッジが、国内リーグ、全てのカテゴリーで展開されることを重要視している。	
	-	・世界基準でのジャッジが、国内リーグ、全てのカテゴリーで展開されることを重要視している。	・審判のジャッジは、強化の一貫」である。
	-	・審判のジャッジを採点する仕組みとフィルムにて再度検証される。	・ライセンス取得養成は、大学で行われる。
	-	・連盟とリーグが協力して、リーグの終了後、アルゼンチン全土の審判が集まりクリニック、フィジカルテストを行い、レベルアップを図っている。	
	-	・大きなジャッジミスは、罰則で欠場処分される。	-
環境 / マネジメント	・サッカーのクラブシステムを真似る状況で活用し、強化・育成を果たした。		
	・8つに分類した年齢別のクラブ育成がある。	-	・ポジションと身長のパランスがどのようにすれば、世界に勝てるかの構成を確立した。
	・LNBのカテゴリーは、人数に応じてチーム数を増やす。	・入れ替え戦制度がリーグの基本的な競争原理を生み出している。	・代表の1996年からの世界での戦いで、世代ごとの一貫指導が身を結ぶということを認識している。
	・オープンな会員制度	・世界進出。ボスマンルールの変更で20歳を超えた選手が、二重国籍もった選手がヨーロッパでのプレーをするチャンスが増えた。	・年齢別にゴール、ボールを変えている。
	・メディカルトレーナー、ドクター、フィジカルコーチがコーチに同行している状況を作り出している。	・1200のクラブで、LNBが構成され、Liga-A (16team)、TNA (22team)がプロ、Liga-B (55team)、Liga-C (約1,100) ている。	・15人のユニットを作り、大会ごとの強化の準備をする。
	・クラブは、運営形態が違うものの、政治的介入がなく首脳陣で独自の運営が出来、コーチ陣も首脳陣で決める。	-	-
	・毎日バスケットボールが出来る環境がある。	-	-
	・引き抜きがあった場合、クラブに85%と州連盟15%入る仕組みがある。	-	-

第2節 成功要因

本節では、前節の施策のまとめから導き出される成功要因について記述する。

前述のとおり、アルゼンチンバスケットボールの世界での活躍は顕著であるが、その成功は、もちろん監督やドクターの存在等多くの要因が考えられるが、選手の強化なくしてはあり得なかったと言える。つまり、選手を「クラブ」、「リーグ」、「連盟」が如何に強化したか、すなわち、それらの強化施策がその成功要因とすることができる。

以上のように考えると以下の3つの要因をあげることができる。

1. 「クラブ」「リーグ」「連盟」のベクトルが世界へ
2. 「自前」の強化・育成システム
3. 育成発掘プログラム

以下ではこの3要因について記述していく。

第1項 「クラブ」「リーグ」「連盟」のベクトルが世界へ

まず、アルゼンチンバスケットボールの成功要因の1つは、優秀な選手を見つけ世界での戦いにおいて代表を強くするという理念のもと、「リーグ」、「クラブ」、「連盟」が一体化し、ベクトルが合っていることが考えられる。図19はその関係性について示している。

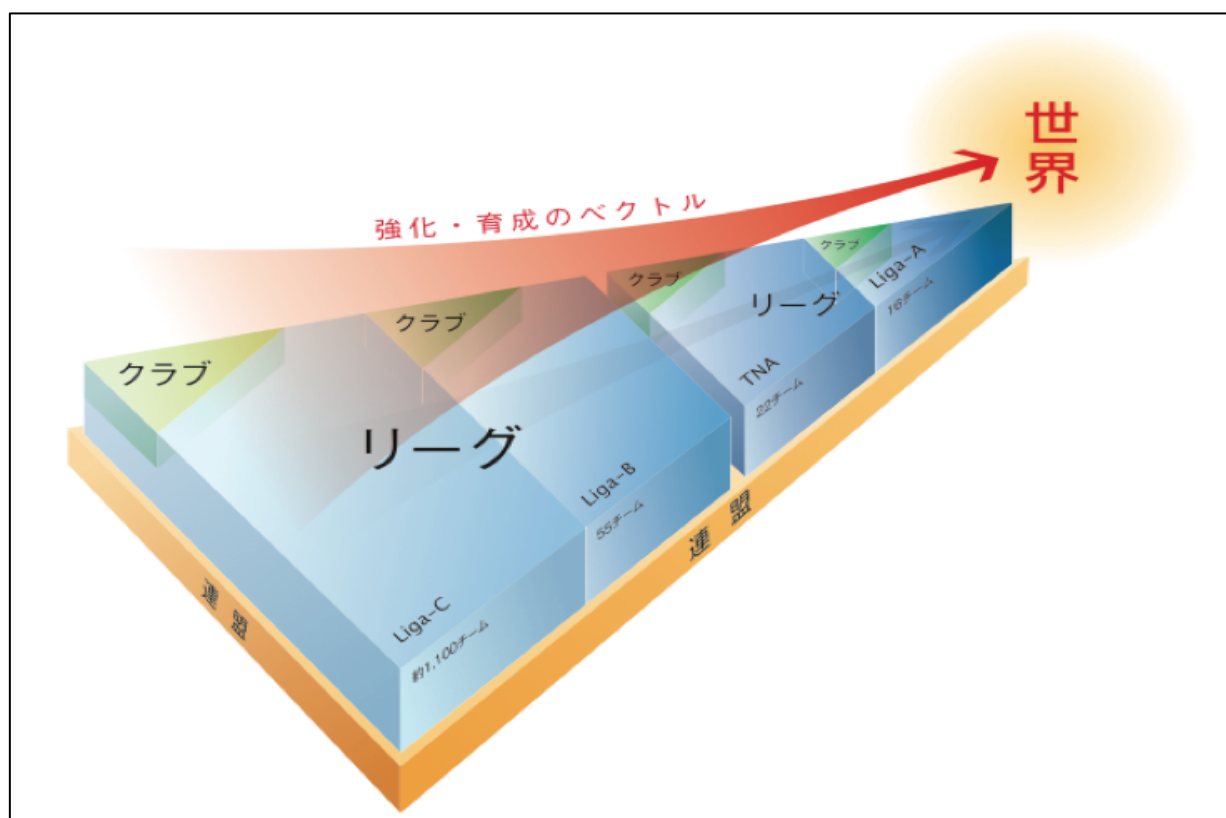


図19 「クラブ」「リーグ」「連盟」の強化・育成のベクトル

アルゼンチンコーチのレベルを世界基準化

LNB リーグに外国人ヘッドコーチを採用するときには以下の5つの条件がある。

- (1)N B Aでの指揮経験
- (2)アメリカの大学で指揮経験
- (3)他国の代表ヘッドコーチを指揮経験
- (4)世界的なライセンスの保有
- (5)他国のクラブで優勝経験

以上のような厳しい条件にも関わらず、リーガ A の 16 チームのコーチがどのクラブもアルゼンチン人のコーチを採用している。これこそ、アルゼンチンバスケットボールが強くなった理由でもある。LNB リーガ A のヘッドコーチが全員アルゼンチン人ということから象徴されるように、アルゼンチンの指導者達は、リーダーシップ、実力、権限があるということは、もちろん、他国の優秀なコーチに匹敵するべき存在でなければならないのである。指導者達は常に学ぶ姿勢を忘れておらず、時間があつたらヨーロッパに自分のお金で講習を受けに行くなど、休みなくバスケットボールの勉強をしている。その結果、レベルの高い、そして“我が強い”選手達もコントロールする力を持っているアルゼンチン人コーチが、意図的ではなく自然に選ばれている。この施策は、コーチ自体が会議をし、1990 年後半にイタリアのリーグを参考に決定した。ハードルを高くし、他国を意識しアルゼンチンバスケットボールが世界を意識することは、全員が高い意志、志を持っている証であり、指導者がレベルアップするためのものだ。

「フィジカルコンタクト」に対する共通の認識

選手、コーチ、レフリー、それぞれが「世界進出」したことで世界基準のフィジカルコンタクトとその重要性を知り、「フィジカルコンタクトの世界基準化」に取り組んだ。

15 歳から始める「フィジカルトレーニング」と「選手のセレクション」を取り入れ、アルゼンチンバスケットボールの強化・育成を行っている。フィジカルコンタクトで負けない世界基準の選手、熟練した選手を早くから作り出すための施策であり、また特有の分岐点であると考えられる。ほとんどのクラブがこの特有の分岐点に乗っ取った体制で強化・育成を行っているが、クラブ・ボカジュニアズでは、独自の考え方をもち、1 歳遅い 16 歳になる年から器具を使った筋力トレーニングを行い、それまでは自体重でのトレーニングを行うという考え方をもっている。また連盟の育成総括のトカチュエル氏は、世界がよりフィジカルゲームになっていることから、14 歳でのフィジカルトレーニングをスタートさせたいというプランの証言であった。このことから育成年代から脱皮を早める狙いと世界のフィジカルコンタクトに勝つために必要不可欠な方法をクラブ、連盟の中でも意見の相違があるが、こだわりの中でアルゼンチンバスケットボールが体格で劣っていることをここまで意識して強化・育成している現れではないかと考えている。

審判とコーチの相互作用

審判のクリニックに海外のレフリー呼び、海外経験のある自国コーチを呼び「ジャッジの世界基準」を話し合う場を設け、また、コーチクリニックに海外コーチを呼び、海外経験のあるレフリーを呼ぶという審判とコーチの相互関係を利用したレベルアップ方法の施策を投入させ世界での戦いの準備を進めてきたことが成功要因であると考えられる。

審判ジャッチの世界基準化

多くのアルゼンチンの審判が世界との水準を学び、フィジカルコンタクトを推奨しているのは、アルゼンチン国内で吹かれているジャッジで選手が育つと考えているためである。すべてのレベルのゲームでのフィジカルコンタクトは、小さい選手、弱い選手に関わらず、また倒れようが、コンタクトに対するジャッジの基準は保たれている。国内で結果を出した選手が、世界でプレーし、そして、代表に集まって、世界と戦うという筋道がある。

第2項 「自前」の強化・育成システム

アルゼンチンバスケットボールの成功要因として次に、「自前」の強化・育成システムをあげることができる。「自前」とは、それぞれのクラブが選手の強化・育成システムを保有していること、または、アンダーカテゴリーに所属するユースの選手達を指している。

「自前」の強化・育成システムには大きく3つの特徴、施策があるが本項ではその3つについて記述していく。

クラブ内での「一貫エリート教育」

クラブでは、8つのカテゴリーを設け「一貫指導」を行い、育成専門のコーチが兼任する状況の中、特出した選手を「飛び級」させる育成方法を行っていた。

「飛び級」選手は基本的には「飛び級」カテゴリーと自身が本来所属するカテゴリーの両練習に参加する。これにより、飛び級選手は本来よりも上のカテゴリーの選手と共に練習するだけでなく、本来のカテゴリーの練習にも参加するため、練習、試合からより高いレベルの「質」、「強度」、「量」を得ることができる。

従って、「一貫エリート教育」は、優秀な選手を輩出するシステムとして機能している。

育成選手をトップリーグへ参戦

リーグは、トップチームに19歳以下の選手を3名登録しなくてはならないというルールを設けている。これは、リーグによる19歳以下の選手をより早い段階でトップ選手になることを促すことのできる施策であり、いち早く19歳以下の選手にトップリーグを経験させ、世界で活躍できる早期熟練選手の育成を目論んだものである。

この施策の影響により、クラブは自前の19歳以下の選手を3名トップリーグのメンバーに登録しなければいけない、そのため、19歳以下の選手に対してトップリーグで通用するプレーを身につけさせるような育成、強化をする必要がある。従って、このことは早期にエリート教育の必要性を生じさせ、優秀な選手を輩出するシステムとして機能している。

アルゼンチン式強化・育成システム

アルゼンチンバスケットボールは、サッカークラブのような強化・育成システムを行っていた。つまり、アメリカ発祥であるバスケットボール競技において、ヨーロッパサッカークラブのように「自前育成」を取り入れ、強化を成功させていると言える。

表25はユニバーシアードの戦績一覧を示しているが、アルゼンチンでは優秀な選手がトップリーグに参加するため、好成績を残せていない。アルゼンチンにおいては、ユニバーシアードに参加する年代は、トップ選手として扱われる。

表 25 ユニバーシアードの戦績

Games	Gold	Silver	Bronze
1959	Soviet Union	Italy	Czechoslovakia
1961	Soviet Union	Bulgaria	Czechoslovakia
1963	Brazil	Cuba	Peru
1965	United States	Soviet Union	Hungary
1967	United States	Korea	Brazil
1970	Soviet Union	United States	Cuba
1973	United States	Soviet Union	Brazil
1977	United States	Soviet Union	Czechoslovakia
1979	United States	Yugoslavia	Cuba
1981	United States	Soviet Union	Yugoslavia
1983	Canada	Yugoslavia	United States
1985	Soviet Union	United States	Canada
1987	Yugoslavia	United States	Spain
1989	United States	Soviet Union	West Germany
1991	United States	Canada	Soviet Union
1993	United States	Canada	China
1995	United States	Japan	Canada
1997	United States	Canada	Brazil
1999	United States	FR Yugoslavia	Spain
2001	FR Yugoslavia	China	United States
2003	Serbia and Montenegro	Russia	Canada
2005	United States	Ukraine	Serbia and Montenegro
2007	Lithuania	Serbia	Canada
2009	Serbia	Russia	United States
2011	Serbia	Canada	Lithuania

第3項 育成発掘プログラム

アルゼンチンバスケットボールが成功している要因の一つとして、世界基準と国内の現状との差に危機感を抱き、必要なプログラムを積極的に取り入れていることが挙げられる。そのプログラムは大きく選手に関しては3つ、審判、コーチに関してはそれぞれ1つあげることができるが、本項ではその施策について記述する。

「身長」発掘プログラム

表 20 は、「身長」プログラムの基準値を示し、参考としてアルゼンチンと日本両国の年齢別平均身長を同様に示しているが、2007 年から「身長」発掘プログラムを行なっている。

これは、アルゼンチンの完全オリジナルのプログラムであり、「身長」で選んだ選手を世界基準のプログラムで育成することで選手の世界基準化を目的としている。

世界で戦うためには、この「身長」を意識した育成が非常に重要であり、アルゼンチンバスケットボールは日本の平均身長と同程度にも関わらず世界を意識した基準値を設け、世界に通用する高さを持つ選手を育成している。バスケットボールにおいて「高さ」は「技術」よりも重要であるとも言え、世界に通用する選手を強化、育成する際に非常に重要なテーマとなる。

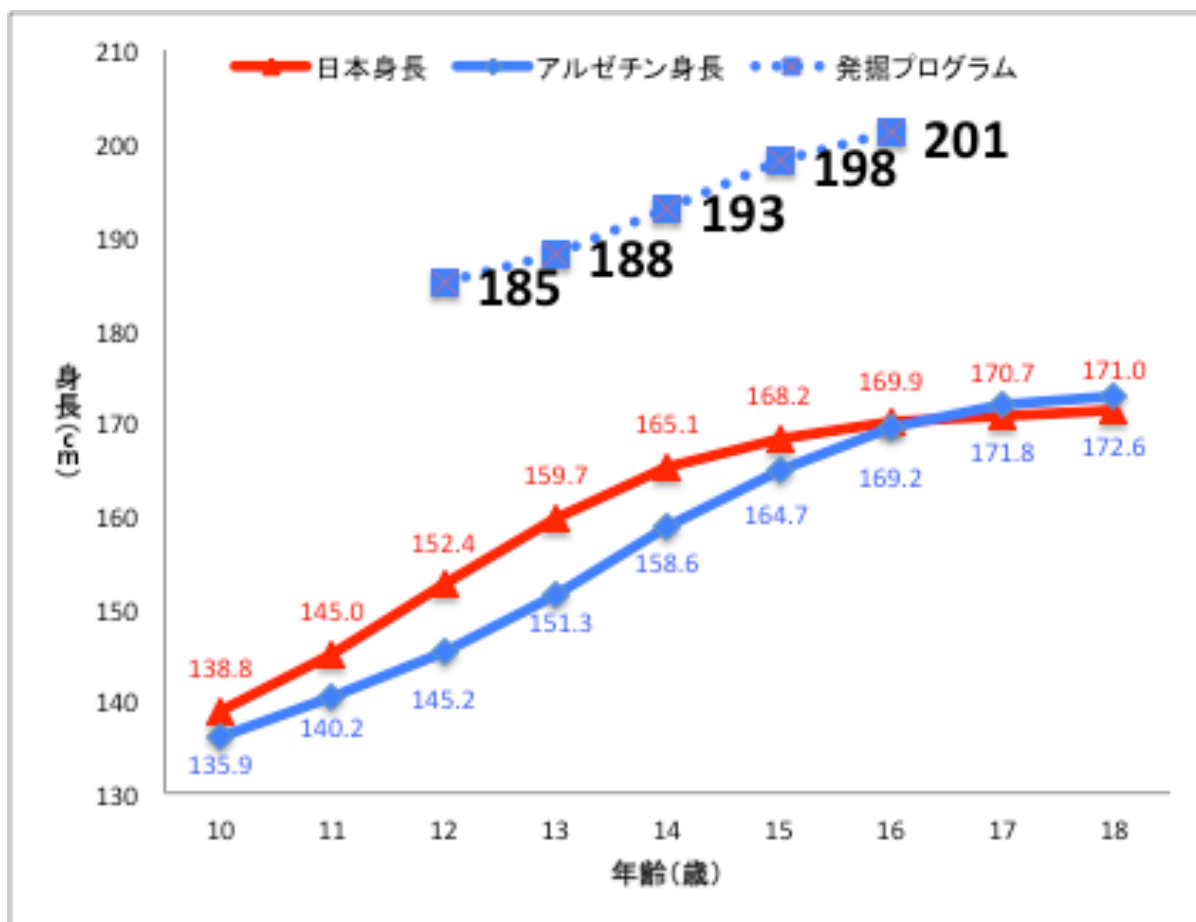


図 20 国民の平均身長と「身長」発掘プログラムのサイズ基準値の比較

「質」発掘プログラム

「身長」で漏れている選手、強豪クラブに所属していない逸材を発掘するプログラムとして行われている。前述の「身長」発掘プログラムと併用することで、国土の広いアルゼンチンにおいても漏れなくタレント発掘を実現させることができる。

これらの「身長」、「質」の両方の発掘プログラムを一色単にしてしまえば、大きい選手の筋力の無さや技術の遅れなどばかりが目立ち、将来ある世界基準の選手をないがしろにしてしまう可能性がある。この危機感から生まれた育成発掘プログラムは、アルゼンチンバスケットボールの工夫の賜物であり、継続した強化・育成による成功の鍵は、今何が必要なのか探り、プログラムの発案、試行してきたアルゼンチンバスケットボールの成功要因とも考えられるべきであろう。

リーグ戦文化と州選抜制度

上記の2つの施策の他、アルゼンチンには州選抜制度があり、以上の3つの施策を用いて選手の育成、強化を行なっている。

アルゼンチンにはリーグ戦文化が根付いており、全国規模のリーグ戦が行われている。まず、全国のクラブを 20 クラブごとに分け地域リーグ戦を行い、その後、上位リーグ戦が行われ、さらに、その後、トーナメントが行われ優勝クラブを決定する。

このリーグ戦文化は、選手、コーチ、審判に多くの試合を経験させるだけでなく、人材発掘の場にもなっている。

上記のリーグ戦で勝利したクラブのヘッドコーチが選抜チームの監督を務めるが、州選抜制度がある。これは、上記のリーグ戦で優秀なプレーをした選手が選抜されるシステムである。

図 21 のように、「身長」、「質」プログラムと併せて実施することで、世界で通用する可能性のある選手を漏れ無く発掘する施策を行なっていると言える。

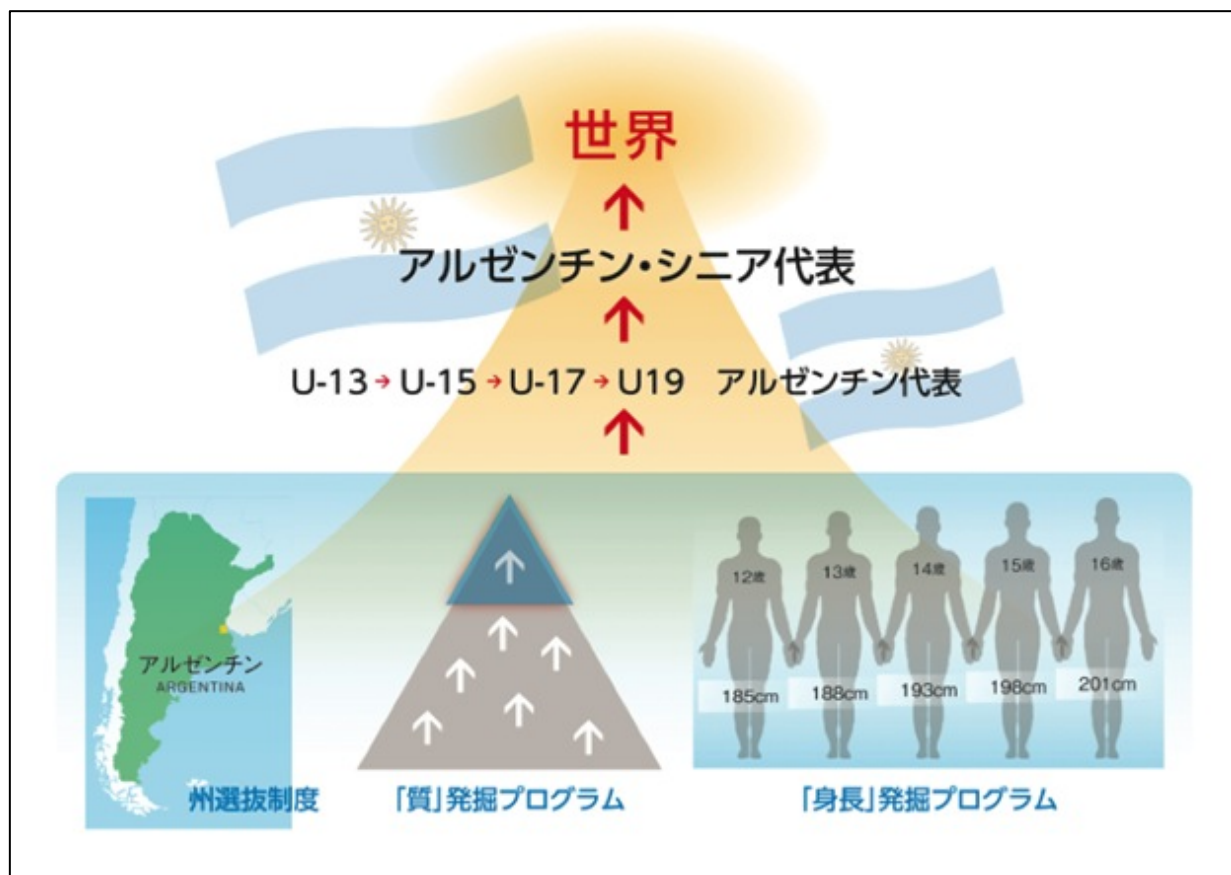


図 21 アルゼンチンの選手発掘システム

審判ライセンス制度

審判のレベルには 3 段階あり、ナショナルがプロリーグ、フェデラティーボが州、アソシアティーボが地域と 3 つに分かれている。審判の場合、毎年 3 日間アルゼンチン全土の審判が集まりクリニックを行う。毎年参加義務があり、もう 1 つ、州ごとで行っている 2 つのクリニックを受ける必要がある。

コーチのライセンス制度

アルゼンチンのバスケットボールクラブでコーチするには、ライセンスが必要で、3 つのレベルの指導者ライセンスに分かれている。レベル 1 がミニから 13 歳、レベル 2 がアンダー15、17、19 と、各地域選抜、レベル 3 がリーグのヘッドコーチ、国際大会と分かれ、ライセンスに応じてコーチができる。毎年 1 回、3 日間のライセンス更新クリニックがあり、こちらは参加義務となっている。この更新クリニックは、各地で開催され、他国からのコーチを講師で迎

えより高いレベルでの指導を勉強することになる。その際の更新料は、約 200US ドルで、各自が自費で支払っている。もう 1 つの指導者育成のプログラムとして、ライセンスのレベルを上げるためのものである。これは、年間を通しての講義があり、試験を受けて合格すると上のレベルへいける。

第7章 結論

本研究は、アルゼンチン男子バスケットボール代表の成功要因を明らかにしたものである。

第1章では、背景と目的を述べた。近年、バスケットボールアルゼンチン男子代表の世界大会における活躍は著しい。44年ぶりに1996年アトランタオリンピックに出場すると、その後、2002年世界選手権では準優勝、2004年アテネオリンピックでは優勝を果たした。また、アンダーカテゴリーの世界大会の戦績も加味されているFIBAランキング（2011年11月）においては3位に入っている。日本と同程度の平均身長でありながら、アルゼンチンは日本も経験している約40年のオリンピック不出場から抜け出し、さらには、世界大会で好成績を残し続けている。そこで本研究では、男子バスケットボールアルゼンチン代表の成功要因を明らかにすることを目的とする。

第2章では、研究手法を記述した。本研究では、まず、アルゼンチン現地でインタビュー調査を行った。育成統括の責任者、代表ヘッドコーチ、そして、審判部専務理事など全16名のバスケットボール関係者に急成長した要因や育成・強化施策について調査を行った。次に、2つのアンケート調査を行った。クラブ所属のジュニア選手69名に対しては、バスケットボールに関する意識や練習内容及び環境について、クラブ育成に関わる指導者9名に対しては、年代別指導方法について調査を行った。

第3章では、16名に対するインタビュー調査結果についてその質問項目ごとに整理し、第4章では、そのインタビュー調査結果を「クラブ」、「リーグ」、「連盟」ごとの施策に分類し、まとめた。クラブでは、選手を年代別で育成し、飛び級制度など優秀な選手を輩出できる仕組みを設けていた。さらに、世界の中で比較的体格が劣るため、15歳からフィジカルトレーニングの強化に力を入れていた。また、選手の競技力を高めるためにリーグが創設されたが、リーグは8カテゴリーに分けられ、どのカテゴリーに所属する選手に対しても試合数が確保されるようリーグが成り立っていた。さらに、リーグは優秀な選手輩出のため19歳以下の選手の登録を3名に定める制度を導入している。また、連盟とリーグは連携して審判の講習会を開催し、リーグにおいて世界基準のジャッジが行われるよう努めている。連盟は、選手の育成、強化のために、優秀な選手を国中から集めるプログラムと独自に設けた基準値よりも高い身長の選手を集めるプログラム、そして、州選抜制度を併せて実施し、世界で通用する可能性のある選手を漏れ無く発掘する施策を行っていた。

第5章では、クラブのジュニア選手、指導者に対するアンケート調査結果を記述した。クラブのジュニア選手は練習量、試合数がコントロールされていたが、自主的に練習に取り組んでいることが分かった。指導者に対する調査では、指導方法に関して共通の認識があることが分かり、「mini」の世代では選手に求めることが少なく、年代が上がるにつれて、フィジカルや空間認識能力といったものが重要視されることが分かった。

第6章では、これまでの研究結果を基に、アルゼンチン男子バスケットボールの成功要因を考察した。まず、インタビュー結果を基に、施策を行う「クラブ」、「リーグ」、「連盟」の3主体を横軸に、施策の影響を受ける「選手」、「コーチ」、「審判」、「環境/マネジメント」の4要因を縦軸にとり、アルゼンチンの成功構造を整理した。そして、アルゼンチンバスケットボールの成功は、もちろん監督やドクターの存在等多くの要因が考えられるが、選手の強化なくしてはあり得なかったと言える。つまり、選手を「クラブ」、「リーグ」、「連盟」が如何に強化したか、すなわち、それらの強化施策がその成功要因とすることができるが、アルゼンチンが成功した要因をとして以下の3つをあげた。

1つ目は、「クラブ」、「リーグ」、「連盟」のベクトルが世界へ向かっていることである。アルゼンチンは「クラブ」、「リーグ」、「連盟」が一体化し、ベクトルが合っていると考えられる。リーグは、指導者を世界基準化するために、優秀な外国人指導者しか国内クラブに就任できないように条件を設けた。この制度は自国の指導者が他国の優秀なコーチに匹敵する存在になる

ための施策である。また、「フィジカルコンタクト」に対する認識も共通しており、クラブでは 15 歳からフィジカルトレーニングに注力している。さらに、国内で吹かれているジャッジで選手が育つと考えられているため国内リーグのジャッチは、審判とコーチの継続的な講習会のもと世界基準が保たれている。

2 つ目は、「自前」の選手育成強化である。「自前」とは、それぞれのクラブが選手の強化・育成システムを保有し、または、アンダーカテゴリーに所属するユースの選手達を指している。

クラブでは、8 つのカテゴリーを設け「一貫指導」を行い、育成専門のコーチが兼任する状況の中、特出した選手を「飛び級」させる育成方法を行っていた。また、トップチームに 19 歳以下の選手を 3 名登録しなくてはならないというルールを作り、世界で活躍できる選手の育成に注力していた。さらに、これらの、育成方式はサッカークラブと似た強化・育成システムであると言える。

3 つ目は、育成発掘プログラムである。従来の技術の優れた選手を発掘することに加えて、2007 年から「身長」発掘プログラムを行なっている。世界で戦うためには、この「身長」を意識した育成が非常に重要であり、アルゼンチンバスケットボールは日本の平均身長と同程度にも関わらず世界を意識した身長の基準値を設け、世界に通用する高さを持つ選手を強化、育成している。

本研究は、アルゼンチンバスケットボールのコート外で行われた施策、マネジメントの成功要因を明らかにした。大枠での戦略を考えていくための情報として本研究が日本バスケットボール界の発展のために少しでも貢献出来れば幸いである。

参考文献

- 1) 松原英輝, 入口豊, 中野尊志, 西田裕之, 中村泰介(2006)「フランスの性荘園サッカー選手育成システムに関する研究(Ⅰ)—若年層における選手育成システムの現状と特徴」, 大阪教育大学記要. IV, 教育科学, 51-70
- 2) 伊藤宏, 岸栄二, 有川秀之, 岡野進, 竹田憲司 (1989)「英国のジュニア選手の育成と選手発掘について」, スプリント研究. 9, p.47-56
- 3) 井上透(2010)「韓国におけるプロゴルファーの強化・育成に関する研究」
- 4) 三原学(2005) 早稲田大学大学院日本オリジナルバスケットボール論
- 5) 倉石平(2005)男子バスケットボール競技 アテネオリンピック報告
- 6) 市谷浩一郎、村上佳司、鳥一成、石川俊紀 (2005) バスケットボール競技における長身選手育成における一考察
- 7) Alejandro Perez and German Beder, El oro y el aro, Historia de la seleccion Argentina de basquet 1950-2010, 2011
- 8) Horacia Juan Segui, Competencia ano 1984, Organiza C.A.B.B 1984
- 9) Alejandro Perez, Basquetbol Del Cono Sur, Historia Del Campeonato Sudamericano (1930-2010) 2011
- 10) Eduardo de la Vega, La Gloria del basquetbol, Genealogia del Dream Team argentine, 2006
- 11) 最新のアルゼンチンの国民の平均身長
http://www.scielo.org.ar/scielo.php?pid=S0325-00752005000400007&script=sci_arttext
- 12) 調査結果は文部科学省の学校保健統計調査・運動能力調査より
<http://paro2day.blog122.fc2.com/blog-entry-9.html>
- 13) 主要国の人口推移 (2000～2010) 2010年11月
<http://www.un.org/esa/population/unpop.htm>
- 14) Basketball coaching & youth basketball
<http://thecrossovermovement.wordpress.com/>
- 15) Argentina Basketball Development
<http://thecrossovermovement.wordpress.com/2008/10/11/argentine-basketball-development/>
- 16) FIBA 国際バスケットボール連盟
<http://www.fiba.com/>
- 17) FIBA America ARGENTINA
<http://www.fibaamericas.com/federacion.asp?n=Argentina&f=ARG>
- 18) CABB (Confederation Argentina Basketball)
<http://www.cabb.com.ar/>
http://www.cabb.com.ar/noticia_ficha.php?id=5225

謝辞

本稿を執筆するにあたり、指導教員の平田竹男教授には構想の段階から様々な面において御指導を賜り、研究活動を支えて頂きました。また、地球の裏側へのアルゼンチン・ブエノスアイレスでの現地調査行きを決心させていただきましたこと重ねて教授のご指導に心より感謝の意を申し上げます。教授の温かく、時に厳しい御指導がなければ、本稿の完成のみならず、大学院修士課程において多くの事を学ぶことは不可能でありました。副査の中村好男教授、矢本成恒先生には、広い視点から多くの御指摘、御指導を賜り、深く感謝を申し上げます。本研究を行うにあたり、非常に多くの方々のご協力やお力添えのおかげで完成することができました。関わって下さった全ての方々に感謝の意を申し上げたいと思います。

そして、平田研究室の同期の井上義浩氏、金子柱憲氏、日下部大次郎氏、小池匠氏、佐藤真海氏、長塚智広氏、橋爪達也氏、松倉信裕氏、山田浩健氏にもいろいろ協力していただきました。同期の皆様にも1年間一緒に過ごし、この論文を書き上げるまでの苦労を共有できましたこと心より感謝しております。また、修士2年制の畔蒜洋平氏、兼清文彦氏、佐藤佑樹氏、鈴木直樹氏、間仁田康祐氏、原章展氏にも多く協力をいただきました。特に、鈴木直樹氏には最初から最後まで異なる視点からアドバイスを頂きました。また三澤翼氏にも協力頂きました。スペイン語の手助けを頂いた本学大学院生、田中いづみ氏にもご助力を頂きました。ここで深く感謝の意を述べさせていただきます。

さらに、筆者が平田教授の元で学ぶことを推薦して下さった平田研究室3期の佐々木達也氏に感謝しております。素晴らしい教授、仲間、そしてレベルの高いプログラムをご紹介頂いたことにもお礼を申し上げます。

そして、アルゼンチンバスケットボール連盟に身分保障、推薦状を書いて下さった、財団法人日本バスケットボール協会専務理事兼前強化本部長の樋口隆之氏にも深く感謝申し上げます。また、日本バスケットボール協会審判部・コミッショナーである佐々木潤氏には、現地とのパイプ役として、ホテルの手配から送迎までいただいたことは、忘れることのできない助けでありました。心より感謝申し上げます。アポイントがなかなか取れずに困っている部分を助けていただいた日本バスケットボール協会・国際部の服部智博氏、日本開催された世界選手権のスペイン代表通訳の仙台大学・岩瀬裕子氏には、幾度となくメールでのアポイントの対応をいただきました。心より感謝申し上げます。また、いろいろ相談に乗って下さった茨城大学の加藤敏弘准教授にも心より感謝申し上げます。

アルゼンチン・ブエノスアイレスの現地調査でボカジュニアズ・サッカークラブのクレメンテ会長をご紹介して頂いた北山朝徳氏には大きなご助力を賜りました。そして、北山氏の法人TOSHIN社員の方にも大変お世話になりました。日系アルゼンチン人のリラ・ミズタ氏、ビセンテ・ブリト氏、エデュラド・オカダ氏にもご協力を頂きました。心より感謝しております。

今回、通訳を担当してくれた若きサッカーコーチの細川雄介氏には、すべての拠点に出向き、一緒になって初めての人に声をかけてくれた勇氣、その全てに感謝を申し上げます。

最後に、インタビューに対し、快く応じて頂きましたアルゼンチンバスケットボール代表ヘッドコーチ・ジュリオラマス氏を始め、多くのアルゼンチンバスケットボール関係者に丁寧に対応頂きましたこと、深く感謝を申し上げますアルゼンチンコーチ達の、ご自身が行った世界への扉を開くという行動に対し尊敬の念を抱き、また異国人に対しても気さくに対応して下さって多くの時間を割いて頂いたことに対しても深く感謝を致しております。さらに、NBAのロックアウトということで母国でのトレーニングを積んでいた、ゴールデンエイジ世代とされアルゼンチンバスケットボールを引っ張っているエメニエル・ジノビリ、ルイス・スコラ両選手にも快くインタビューさせてもらい子供の頃の話聞かせていただいた事にも深く感謝を申し上げます。

ここで全てのアルゼンチンバスケットボール関係者の皆様に感謝申し上げます。

Muchas gracias a todos ayudaron a los argentinos.

最後になりますが、この論文を執筆するにあたり、非常に多くの方々の御協力や、御助力、励ましの御言葉を頂きましたこと、生涯忘れず、宝として、大切に心に仕舞うと共に、本稿のみならず、大学院生活において関わって頂きました全ての皆様に心からの御礼を申し上げます。皆様の今後の御健康と御発展を祈念して、本稿を締めくくらせて頂きます。

ありがとうございました。

付録 1 質問事項案

1. 過去での戦績について。
2. 誰がどのような責任をもっているか。
3. 普及、強化、育成との組織の成り立ちと連携について。
4. 代表選手を選抜方法、交渉の流れはどのようなになっている。
5. 目標は？短期的、中期、長期的にどのようなもっていて、取り組む方法、共有の仕方は何であるか。
6. 44 年間五輪に参加していなくて、1996 年にアトランタ五輪に参加後 8 年で優勝した要因は何であるか。
日本) 35 年五輪に参加して無い状況であるが打開策は何であるか。
7. 連盟としての強化、育成方針で特別な物はあるか。
8. 育成プログラムはあるか？それに特徴は何か。
9. 中期・長期の目標等のスケジュール（ロードマップのようなもの）は存在するか。
10. 指導者の育成プログラムはどんなものか、また予算はどのくらいなのか。
11. 代表ヘッドコーチは、海外コーチも考えているのか、選抜方法はどのようなものか。
12. 帰化選手についての意見はあるか。
13. カテゴリー別の活動日数はどのくらいか、変化はあるのか？80 年代からの移り変わりはあるのか。
14. カテゴリー別予算（もしくはそれぞれの比率）
15. 予算はどこからくるのか？ 数字登録費用、スポンサーは？
16. 連盟のビジョンはあるか？それは何であるか？
17. オリジナルバスケットボールと言える特別なものは存在するか？
18. マッチメイキングの方法、コネクション作りの方法はなにか
19. 各予選での争いについて
20. 現在の問題点と取り組んでいる改善点はあるか
21. 代表チームへの選手の参加は積極的であるか
22. プロリーグの影響が代表の成績と関係があるとすればどういうことか。
23. トップリーグが国際試合を戦う代表チームに対して、果たしている役割は何であるか
考えるか。

付録 2 クラブのジュニア選手へのアンケート用紙（日本語版）

現在 歳
所属

(1) いつからバスケットボールをはじめましたか？

(歳)

(2) バスケットボールを始めた理由は何ですか？

1, 親の進め 2, 兄弟がやっていたから 3, 友達がやっていたから 4, 憧れのプロの影響
5, それ以外 ()

(3) バスケットボール以外の習い事がありますか？（複数回答可）

1, サッカー 2, テニス 3, 水泳 4, 学習塾
5, それ以外 ()

(4) 将来の夢は何ですか？

1, 公務員 2, プロバスケ以外のスポーツ選手 ()
3, サラリーマン 4, プロバスケ選手 5, それ以外 ()

(5) バスケはずっと好きでしたか？

1, 大好き 2, 好き 3, 普通 4, 嫌い 5, 大嫌い

(6) 小学生（6歳）未満の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか？

1, 0回 2, 1回 3, 2回 4, 3回 5, 4回 6, 5回 7, 6回
8, 毎日

(7) 小学生（6歳）未満の時、平均練習時間はどれくらいでしたか？

1, 30分未満 2, 30分以上1時間未満 3, 1時間以上2時間未満
4, 2時間以上3時間未満 5, 3時間以上 6, 練習しない

(8) 小学生（6歳）未満の時、1ヶ月に試合を何試合くらいしましたか？

1, 1～3試合 2, 3～5試合 3, 5～7試合 4, 7～9試合
5, 9試合以上 6, 試合をしなかった

(9) 小学生（6歳）未満の時、練習は自主的に行いましたか？ 強制的でしたか？

1, 非常に自主的 2, まあまあ自主的 3, どちらとも言えない
4, まあまあ強制的 5, 非常に強制的

(10) 小学生（6-12歳）の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか？

1, 0回 2, 1回 3, 2回 4, 3回 5, 4回 6, 5回 7, 6回
8, 毎日

(11) 小学生（6-12歳）の時、平均練習時間はどれくらいでしたか？

1, 30分未満 2, 30以上1時間未満 3, 1時間以上2時間未満
4, 2時間以上3時間未満 5, 3時間以上 6, 練習しない

(12) 小学生（6-12歳）の時、1ヶ月に試合を何試合くらいしましたか？

1, 1～3試合 2, 3～5試合 3, 5～7試合 4, 7～9試合
5, 9試合以上 6, 試合をしなかった

(13) 小学生（6-12歳）の時、練習は自主的に行いましたか？ 強制的でしたか？

1, 非常に自主的 2, まあまあ自主的 3, どちらとも言えない
4, まあまあ強制的 5, 非常に強制的

(14) 中学生（12-15歳）の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか？

1, 0回 2, 1回 3, 2回 4, 3回 5, 4回 6, 5回 7, 6回
8, 毎日

(15) 中学生（12-15歳）の時、平均練習時間はどれくらいでしたか？

1, 30分未満 2, 30以上1時間未満 3, 1時間以上2時間未満
4, 2時間以上3時間未満 5, 3時間以上 6, 練習しない

(16) 中学生（12-15歳）の時、1ヶ月に試合を何試合くらいしましたか？

1, 1～3試合 2, 3～5試合 3, 5～7試合 4, 7～9試合
5, 9試合以上 6, 試合をしなかった

(17) 中学生（12-15歳）の時、練習は自主的に行いましたか？ 強制的でしたか？

1, 非常に自主的 2, まあまあ自主的 3, どちらとも言えない
4, まあまあ強制的 5, 非常に強制的

(18) 高校生（15-18歳）の時、1週間に平均何回練習場に行きましたか？

1, 0回 2, 1回 3, 2回 4, 3回 5, 4回 6, 5回 7, 6回
8, 毎日

(19) 高校生（15-18歳）の時、平均練習時間はどれくらいでしたか？

1, 30分未満 2, 30以上1時間未満 3, 1時間以上2時間未満
4, 2時間以上3時間未満 5, 3時間以上 6, 練習しない

(20) 高校生（15-18 歳）の時、1 ヶ月に試合を何試合くらいしましたか？

- 1, 1～3 試合 2, 3～5 試合 3, 5～7 試合 4, 7～9 試合
5, 9 試合以上 6, 試合をしなかった

(21) 高校生（15-18 歳）の時、練習は自主的に行いましたか？ 強制的でしたか？

- 1, 非常に自主的 2, まあまあ自主的 3, どちらとも言えない
4, まあまあ強制的 5, 非常に強制的

(22) 1996 年アトランタオリンピックまで 44 年間出場していない状況だったことを知っていますか？

- 1、YES 2、NO

以上です。

ご協力ありがとうございました。

付録3 コーチへのアンケート調査用紙

FIBA	ARG	Tenica (技術)	Tactica (戦術)	Con pesa: Fisico (筋力)	Decision (判断力)	Agilidad (フットワーク)	Reflejo (反応)	Noion De Espacio (空間認識力)	Coordinacion (調整力)
TOP	-								
U-23	-								
U-21	-								
U-19	17-18 Juvenil								
U-17	16-17 Cadete								
U-15	14-15 Infantil								
U-13	12-13 Pre-Infantil								
(Mini)	10-11 Mini								
	8-9 Pre-Mini								

付録 4 コーチへの意識調査アンケートまとめ

- ①共通の認識がある
 - 筋力トレーニングを始める時期を定めている
 - 空間認識力を最初から教えている
- ②ミニは、極端に指導者が求めるものが少ない
 - 空間認識能力とフィジカルコンタクトが最初でその後それを解決するために「技術」が備わってくるということを前提に持っている（アンケートを取りながら分かる）
 - プレミニとミニの差はない
- ③技術は、それぞれのカテゴリーで重要なものは違う
- ④U19 で全ての用意ができている状況を求めている
 - <U19 でプロの対象のなるため(3名)>
- ⑤20 歳以上を大人＝プロとして見ている。育成は、19 歳以下までであるというラインが共通している。